

国立国語研究所学術情報リポジトリ

Introduction to The Linguistic Atlas of Japan : Interpretation of the Maps Vol.2

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-03-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所, The National Language Research Institute メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001552

日本言語地図解説

— 各図の説明 2 —

国立国語研究所

1967

まえがき

各分布地図は、各調査項目に関する地理的な言語差の展望をおもな目的としている。したがって、この説明でも、各分布地図を理解するための作図の基準、凡例の補足的説明、地図の注目点、その他の参考事項などを簡単に述べた。各項目を調査した際に用いた質問文は、各分布地図の左下の欄に示してあるので、原則として、説明では触れない。実際の調査に際して使った調査票には、各質問について、注意すべき点を補注の形式で加えたものがある。これは、第1集の別冊『日本語地図解説—方法—』103ページ以下の調査票全文によって見よ。

説明の中で、語形を表わす場合、とくに、音声の詳細を示す必要のあるもののほかは、凡例にかかげたローマ字表記を使った。また、それらの語形のいくつかを同類と認め一括して示す場合は、カタカナで表記した。

資料の整理、地図の編集に関する総合的な解説は、第1集の別冊『日本語地図解説—方法—』31ページ以下を見よ。

この第2集では主として動詞に関する項目をとりあげた。第3集以下では主として名詞に関する項目をとりあげる予定である。

なお、各分布地図をいっそう深く理解するには、見出し語形の各地点での具体的な内容や、各語形に加えられた注記を記録した『日本語地図資料』(国立国語研究所に保存してある)を参照することが必要となろう。また、語の歴史を推定するに当たっては、文献資料とのつき合わせも必要となろうが、今回、多くは触れなかった。いくつかの項目についての徹底した言語地理学的解釈は、機会を改めて公表したいと思う。

この解説を執筆したのは、地方言語研究室の野元菊雄・徳川宗賢・加藤正信・高田誠である。

1967年3月

「日本言語地図」第2集編集・作図・資料整理の関係者

国立国語研究所第一研究部長

大石初太郎

国立国語研究所地方言語研究室

上村幸雄(室長) 野元菊雄 徳川宗賢 加藤正信 高田 誠

W・A・グロータース(非常勤) 白沢宏枝(研究補助員) 芥川豊子(同)

このほか、研究所以外の方々にも協力していただいた。お願いした仕事の内容や量はそれぞれ違うが、以下列記して(五十音順)感謝の意を表する。

井上史雄	太田恵子	大山成子	加藤貞子	川合正子
河口宣子	川本幸江	菊見洋子	北原佐嘉恵	小林豊子
小林増子	東海林良子	白井千鶴子	高志伴子	野崎洋子
浜田喜久子	平野淳子	与那覇政善		

目 次

はじめに	1
動詞項目全体について	1
51. すわる(坐る)	2
52. あぐら(胡座)をかく	4
53. いる(居る)	7
54. かたあしとび(片足跳び)をする—前部分—	8
55. かたあしとび(片足跳び)をする—後部分—	10
56. つくる(作る)	11
57. たく(炊く)	12
58. にる(煮る)	12
59. センタクスルを“裁縫する”の意味で使うか	14
60. ハソンスルを“修繕する”の意味で使うか	16
61. ナオスを“片付ける・しまる”の意味で使うか	16
62. すてる(捨てる)	17
63. ステルを“紛失する”の意味で使うか	18
64. おんぶする(幼児を負う)	20
65. しょう(包を背負う)	21
66. かつぐ(材木を担ぐ)	22
67. かつぐ(天秤棒を担ぐ)	23
68. かつぐ(二人で担ぐ)	24
69. かぞえる(数える)	26
70. かす(貸す)	27
71. かりる(借りる)	28
72. カッテクルを“買ってくる”の意味で使うか, “借りてくる”の意味で使うか	29
73. やる(遣る)	31
74. くれる(呉れる)	31
75. アズケルを“あてがう”の意味で使うか	33
76. もらう(貰う)	35
77. びっくりする(驚く)	37
78. オドロクを“驚く”の意味で使うか	38
79. オドロクを“目覚める”の意味で使うか	38
80. あざ(痣)になる	39

81. くすぐる(擦る)―前部分―	41
82. くすぐる(擦る)―後部分―	42
83. きゅう(灸)をすえる―前部分―	43
84. きゅう(灸)をすえる―後部分―	45
85. におい(匂)をかぐ(嗅ぐ)―前部分―	46
86. におい(匂)をかぐ(嗅ぐ)―後部分―	48
87. せき(咳)をする―前部分―	49
88. せき(咳)をする―後部分―	50
89. いびき(鼾)をかく―前部分―	52
90. いびき(鼾)をかく―後部分―	53
91. うそ(嘘言)をつく―前部分―	55
92. うそ(嘘言)をつく―後部分―	56
93. クサルを“濡れる”の意味で使うか	58
94. オチルを“下車する”の意味で使うか	59
95. <雷が>おちる(落ちる)	60
96. こおる(水が凍る)	62
97. こおる(手拭が凍る)	62
98. 助詞「が」―「雷が落ちる」における	63
99. 助詞「を」―「いびきをかく」(第 89 図)における	65
100. 助詞「を」―「あぐらをかく」(第 52 図)における	65

はじめに

▶この『日本語地図』第2集を見るに当たっては、まず本地図集巻頭の〈概説〉を読んでほしい。調査の方法などについてさらに詳しくは、第1集付載の別冊『日本語地図解説—方法—』を見よ。

▶凡例の見出しに、本集以降、新しく次のような表記を使う場合があるので、注意のこと。

Lī [ʔī, iī, ɓī] などの音声に当たる。沖縄の宮古島に現われる。

例：84 図—FFILĪ [mʔī]

—R 語末が子音Rで終わっているもの

例：84 図—YAKYUR [jak'jur]

▶この『日本語地図』では、ある質問に対する一連の回答を、前部分と後部分とに分割して、2枚の地図に分けて示したものがあつた。たとえば、「灸をすえる」に当たる各地点からの回答は、84 図と 85 図とに分割して示した。これらは、すべて回答の内容が複雑であり、しかも分割した各部分に、それぞれ別々の地理的分布が現われるものであつた。これらの場合、各地点の完結した回答は、2枚の地図の凡例を、一を目安にしてつなぐことによって知ることができる。

▶ある調査地点から二箇（以上）の回答が得られた場合は、地図に二箇（以上）の符号を並べて、へ印でくくって示した。このことは、〈概説〉で説明したとおりである。ただし、その二箇以上の回答のうち一つが標準語形と一致し、しかもその語形に〈新しい言い方であ

る・上品な表現・共通語的な言い方・まれにしか使わない〉などの注記がある場合は、その語形を地図から削つた。これは、〈標準語形も上品な表現としてなら使う〉といった回答は、そのような回答を得なかつた地点においても、実はありうる、しかも全国的にありうると考えたためである。

もっとも、そのような回答が現実どこで得られたかは、国立国語研究所に保存されている『日本語地図資料』に記録されている。

▶一連の回答を前部分と後部分とに分割するとき、ある地点で二箇以上の回答があつた場合、地図上に不都合が起こる。たとえば、ある地点でA—B・C—Dという二箇の回答があり、前部分の地図にA—、C—がへでくくって示され、後部分の地図に—B、—Dがへでくくって示される場合である。その地点の完結した回答は、地図上の材料によって正確に求めることができない。すなわち、A—は—Bと結びつくのか—Dと結びつくのか、C—は—Bと結びつくのか—Dと結びつくのかわからない。周囲の地点の回答から類推するにしても、正確は期し難い。正しい組み合わせは『日本語地図資料』によらなければならない。

▶凡例に「その他」と示したものは、その地点の回答が個別的で、地理的な意味を持たないと考えたものである。その内容は『日本語地図資料』に記録してある。

動詞項目全体について

▶ここで言う動詞項目の中には、たとえば「灸をすえる」のように、前・後部分に分割し、前部分として、動詞ではないものを扱つたものを含み、また、主格や目的格を表わす「が」「を」も含んでいる。また、助詞に当たる部分だけの地図もある。

▶用言については、終止形を答えとしてとりあげるのを

原則とした。調査に当たっては、終止形の用法を得ることができない場合は、代わりの形にそのむね解説をつけるように、調査員に指示した。現在の終止形以外の表現が、それぞれ報告されているときは、分布その他を参照して、できるだけ終止形に引きもどして作図した。とくに過去形が出がちであつた項目もいくつか

あったが(たとえば、「<雷が>おちる(落ちる)」)、これらも現在の終止形にもどした。

なお、奄美・沖縄では、まま終止形でないものがあると思われることがある。たとえば、85・86図「においをかく」の KAZADU—HABU で、HABU は連体形と考えられる。また八丈島のもは終止形なのかどうかははっきりしない。助詞のついた形であるかも知れない。

以上述べたように、原則として終止形の、しかも現在を求めているので、他の活用形については残念ながらわからない。この調査はあくまで語の調査であり、文法の調査ではなかったのである。また調査では、補助動詞をなるべく使わない形を要求した。そのために、たとえば、71図「借りる」などはカリテクルというように補助動詞がつくのがより自然の形であろうが、補助動詞をなるべく排除した。けれども、これは原則であってこれとは違う場合がある。奄美・沖縄の場合に補助動詞と思われるものもあるが、これらについて

は終止形と思われる形にもとづきそのままの形で表わしたことが多い。終助詞の類も省略するのを原則としている。

▶いわゆるサ変動詞「する」については、できるだけ各図を通じて符号を統一し、また、その凡例にあげる順序としては、—SURU, —SUI, —SUT, —SIRU, —SERU, —SYURU, —SU, —SIRO, —SOWA, —SYOWA, —SYOOWA とするのを原則とした。

これらに属するものとしては、55図「片足跳びをする—後部分—」、69図「数える」、77図「びっくりする」、88図「咳をする—後部分—」、90図「いびきをかく—後部分—」がある。これ以外の図でも可能なものはこれに合わせた。「する」についてはなお、64図「おんぶする」、84図「灸をすえる—後部分—」、86図「においをかく—後部分—」などがある。

なお、奄美・沖縄については統一はしなかった。

▶九州の T, I 語尾は符号をできるだけ統一し、T 語尾は T の形、I 語尾は Y の形の符号を使うようにした。

51. すわる(坐る)

「すわる」に当たる表現が意味する内容は多岐にわたっている。共通語でもスワルは、正座するだけでなく、椅子に腰かけるを意味し、さらにあるものに尻をつけている姿勢全体をも表わす。ここでは、そのうち、図のように正座することをどういうかを聞いている。なお、諸文献に現われているこの類の語は、正確には、どの状態を表わしているのかははっきりしないからあまり参考にはならない。

分布から推定される古さの順に考えると、赤系統の色で示した、ヒザ〜という形が一番古いものと思われる。ネマルがその次で、次はツクバウ、さらにカシコマルが出てきたと考えられる。近畿のスワルはおそらく新しい起源であろうが、これと地理的に連続していないスワルが果して新しいものであるかどうかは疑わしい。とくに九州南部と、北関東・東北南部・北信・新潟とのそれはそれほど新しいものとは考えにくい。

以下そのそれぞれについて見ていくことにする。

ヒザ〜には色分けで示したように明らかに二つの系列がある。ヒザタテル類とその他の類とである。この二つの類のうちでは、ヒザタテル類の方が古いようである。南北のヒザ〜類のうち、辺地の方がヒザタテルとなっているからである。ヒザのところを東北、とくにその北部と日本海側では HIZYA と言うことが多い。しかし東北の影響でヒザ〜を使う北海道半島部などでは HIZYA にはならず、HIZA を使う。なお、この拗音については69図「かぞえる」を参照。大分の東南の半分には HIDA が多い。これも 69 図参照。

その他のヒザ〜では、ヒザマズク類が主流であるが、これは地図では赤の円と関係あるしで示されている。西では九州東半分・琉球・八丈島におもに分布しているほか、西日本に点々としているのは、この語が古いことを示しているものと思う。山形の村山地方にはヒザマク類があって、地域的分布を示している。

東日本のヒザ〜では、ヒザオル類が主流であり、東北北部および、北関東に分布している。東北北部のヒザオル地帯に南接してヒザツク類があるが、これは、さらにその南に接しているヒザマク類とともにヒザマズクからの転化ではあるまいか。なお、質問文に、「ひざを折っ

て座につくこと」とあるので、ヒザオルが実際より多めに地図上に現われているかも知れない。

以上のようにヒザという語を使った語が多いが、いったいヒザとは人体のどの部分を言うのであろうか。ヒザツク(ヒザマズクも含めて)、ヒザオルのヒザは膝関節(前面)を言うのであろう。しかし、ヒザタテルのヒザはちょっと解釈に苦しむ。もしヒザツクのヒザよりも上の前面を言うのであれば、ヒザタテルは膝行するときの形になろう。なお、これにはタテルの意味も問題になる。必ずしも鉛直方向でなくてもいいかも知れないが、今よくはわからない。沖縄では hwisja は足全体のことを言う(『沖縄語辞典』)。その沖縄では、ヒザマズク類が多い。なお、沖縄の S-はスルに当たる語を総括したことを示す。

52図「あぐらをかく」と比べるとヒザ〜はとくに九州の一部(大分南部西部、宮崎北部、福岡東部)、それに山口西部、広島のとくに北部で重なるが、51図はヒザマズクなので、ヒザ〜であるとの意識はそんなに強くはなからう。

NEMARU の分布は北陸道を通して東北へ伸びる伝播の一つの典型をなすが、51図の意味でのこの語形は、北への進展を東北中部で強力にはばまれたという感じである。NEMARU という語形は地方によって何を表わすかが一定していない。横になる、寝ることを意味する場合もあるから、文献を扱うときは注意しなければならない。もっとも、この地図に関する限りは NEMARU が正座を示していることははっきりしている。島根東部にも現われている点に注意すべきである。カシコネマルは、カシコマルとの複合で、島根東部にある。西日本には、51図、52図の意味での NEMARU はあまりないが、『全国方言辞典』によれば「寝る」「横たわる」意味では使われているようである。なお、NEMARU は北海道には古い語型としてかなり現われていることに注意。山形の村山地方で、NEMARU がヒザに分断されているが、別の意味分野ではそこにも NEMARU があるかも知れない。

52図の「あぐらをかく」で NEMARU というのは岐阜北部、石川、富山、岩手北部、北海道である。岐阜北部を除いては違ったものを同じ語形で表現する点から混乱があるかも知れない。52図の NEMARU の方が先駆的に見える。

ツクバウは「突這う」であって、しゃがんで手を地につ

ける形であるというのが辞書の解であるが、ここでは行儀よく恐縮したさまという点では共通するにしても正座を示している。地図では草で示してある。分布からおしておそらく次のカシコマルより古いものであろう。各地に、活用部分の変種が見られる。おもなものは次のとおり。京都北部、鳥取西部、岐阜、長野西部の CUKUBARU、四国の CUKUNAMU、CUBAMU、大分の CAKUMAMU など。オックバイスルなどのように、一度名詞形としたものをさらにスルを使って動詞としているものもある。以上の諸変種のうち、ツクバウがもっとも名詞形となりやすいが、これが福井・長野・群馬というように、地域的にかたまっている。

カシコマルも敬い恐縮している形である。紀伊半島、中国・四国などの分布から、これがツクバウよりは新しいと判断したが、東の方への進展は南岸と北岸と別の語形を負っていることになる。東北地方への文化の伝播は、北岸沿いの方がまず発達し、南岸沿いはあとから発達したと見られる。ちょうどカシコマルが中央語となったときに、南岸沿いに文化の進む時期が重なったものであろうか。それにしても、そのときなぜツクバウ地帯を侵さなかったのであろうか。

この語は、事物がすでにあって、そこへ新しい言い方が伝わる場合とはいささか事情を異にし、おそらく、正座するという動作が伝播し、ことばがそれとともに進展していったものであろう。坐わり方は、家屋や調度との関係が深いと考えられるが、正座という坐わり方はおそらく非常に新しいものである。東京語のいわゆる「しゃがむ」という姿勢は、今のわれわれが考えるよりもはるかに安定した、したがって楽なものとして行なわれてきたものであろう。また、尻を下につけて足を前になげ出す形やヒザをかかえる形も休むときには多くとられていたであろう。なお五島では52図に示すようにカシコマルが「あぐらをかく」を意味しているのはおもしろい。

カシコマルの変種のうち地域性を持ったおもなものは、高知中東部を中心とした KASIKAMARU、山口東部付近、長野南部の KASIMARU、千葉の KASYOMARU である。この千葉のものは、語中の K音の脱落の結果できたものであろうか。

スワルは近畿およびその周辺に関する限りは、以上のものよりも新しいと言ってよからう。しかし、関東以北や九州のものがそのように新しいかどうかは疑問である。スワルという語自身「する」「すえる」に対する自動詞

として、正座を意味する以前から使われており、正座という坐わり方が行なわれはじめたとき、それを意味するようになったのであろう。キチントなど、スワルの前にその坐わり方の説明がついているものが愛知以西にだけ多く、関東に多くないのは不思議である。スワル自身が関西では多義なのかも知れない。九州南部のスワルはほぼ島津藩の地域となっている。新しい輸入ではあるまいか。なお、このスワルについては、古い中央語であったものがいったん衰え、ふたたび中央語となったとも考えられるが、ヒザ～類より東北では新しく、九州では古そうだというのがこの説に対して不利である。なお、52図によれば、「あぐらをかく」のをスワルというのは、長野南部・伊豆・岐阜西部、それに中国に点々とあり、また、大分の日田地方などにあるが、この51図では、これらの地方はスワルの現われない地方で、とくに意味の違いを無視すれば、長野の南方でスワルという語形は連絡することになる。こう考えれば、スワルは語形としては相当古いことがわかる。

OCIN SURU が福井、京都北部をおもな地域として近畿周辺部にあるのは、スワルの一つ前に中央語であった可能性を示す。浅野藩の地域に OGYOOGI SURU, ZINZYOO SURU などがあるのは地方的な現象であろう。OGYOOGI ～は近畿に見られる。

いったいに、この表現の報告には、子どもの表現および子どもへの表現という注記が多かった。これは地図上には記さなかったが、概観すると、近畿の北半で OCIN SURU が優勢であった。島根東部など中国、さらに中部南東で点々と OCYANKO SURU, 愛媛西部で OCYOPPO SURU, など擬態語的なものにも子どもに関するものが多かった。その他では香川と愛媛東部の OKAKKO SURU 類が、伊豆などの HIZA TATERU, 長野のオツンベスルなどが目立っている。これらはおおむね大人についていう同じ語形とは同じ地域に重ならず、隣接している。概略的に子どもの表現、子どもへの表現は、国の両端にはあまりない。これも正座する動作そのものが新しいことを示す傍証となろう。

52. あぐら(胡座)をかく

地図下欄の質問文のあとに図示したような、「あぐらをかく」動作に対する表現を求めたものである。単にあ

ぐら(胡座)に当たる名詞を求めたのではなく、「アグラ(を)～(動詞)」という形の表現を求めた。したがって、もしあぐらに当たる名詞を求めたら、多少違った結果がでたかも知れない。たとえば、ヒザオクムなどは、名詞形はもちろんヒザでなく、ヒザクミとなる可能性がある。

地図の分布の説明にはいるまえに、凡例の見出しについて説明しよう。

まず、ほとんどの見出しが前後二つの要素から成っている。後の部分の動詞の類の数は、凡例の数の多さに比較して、非常に少ない。カク、クム、スルが大部分を占めている。これら三つの動詞は、前部分の要素に対して目的格を要求するのが原則である。前部分と動詞の組み合わせにおいて、格助詞のオを持つものが多くあった。しかしここではこの助詞を表示することはしなかった。その分布は、100図に助詞オの図として示した。前部分と動詞との間にハイフンを入れた組み合わせは、助詞オを省略したことを示す(この中には、表現として助詞オの現われないものも含まれる)。また、前部分の末尾が長音化したと思われるものは、短音のものと同じ扱いとした。たとえば AGURAA KAKU は、目的格を表わす部分が長音として現われていると見てハイフンをつけて、AGURA-KAKU とした。ハイフンを入れず、分かち書きにしたものは、その動詞の他の組み合わせではオを持つことから、目的格だとは思われるが、その組み合わせでは実際には、オが現われなかったものである。その他、自立形式としての動詞と認めるか、付属形式としての動詞形成語尾とするか判断のつかないものは、分かち書きはしなかった。たとえば AGURAKASU の KASU など。その他の組み合わせは、文節としての切れ目があると思われるところで分かち書きにした。

色分けは前部分の分類を示す。桃はアグラ類、草はヒザ類としよう。後部分の動詞の区別は、符号の形で示した。全部を統一した原則でつらぬくことはできなかったが、カクはシッポなし、クムは下向きシッポ、スルは右向きシッポとした。つまり、シッポを切りすてた符号が共通の前部分を示している。

また、凡例の最後にローマ数字で示した見出しは、奄美・沖縄の語形を類別したものの番号で、後に示す内容をそれぞれ含むことを示す。

なお、音韻に関しては、ほとんどその詳細は無視した。東北方言の有声音化など対応関係のわかっているものは分立させず一つの見出しの中にまとめた。

地図を見てみよう。桃を与えたアグラ類は、広く東日本をおおい、愛知・三重・中国地方東部・九州中部に分布している。関東一帯・長野などにアグロ、アゴロなどの変種が分布している。紀伊半島南部には赤のべた符号を与えたオタグラ、ウタグラ、フタグラなどが、まとまった分布地域を持っている。関東などにはピタグラの類がある。また、九州西半には中ぬき符号で示したイタグラメ、イタグラ類が強固な分布の姿を持っている。以上の三つの類を、桃・赤で示したのは、前部分の中に-グラという共通した形態素を持つことに着目したことによる。

中ぬきの橙で示した類は、前部分の中に-BURA ないしは-BIRA、-BERA という形態素を含む類で、近畿中央部に分布する。この類の中で、さきの赤べた符号を与えたものと共通の形態素(OTA-, UTA-など)を持つものは、符号に共通点を持たせた。

橙のべた符号を与えたアブタ類は、京都北部から鳥取にかけての海岸部、隠岐に分布している。

新潟・山形に分布するのはアグシカクの類である。石川・富山・佐渡に分布するアグチ類とともに、茶のべた符号で示した。山梨にアグチがあることに注意すべきである。

茶の中ぬき符号を与えたのは、アクダの類で、中国地方東部にかなりまとまって分布している。この分布領域のうち鳥取の東半と隠岐は、後部分がカクであり、鳥取西部はクムであることはこの分布を解釈する上で一つの手がかりとなろう。

緑の中ぬき符号で示したものは、前部分の中に、AZU-, ACU- という要素を含む類である。これらはさらに、三つの類に分けられ、それぞれが別の分布領域を持っている。一つは、新潟から長野にかけて南北に分布し、なお静岡・三重に連なるアズクミの類。一つは、伊豆半島から伊豆諸島に連なって分布するアズクラの類(アシクラをも含む)。さらには愛知・三重に分布するアズマリの類の三類である。

緑のべた符号で示した類は、中国地方中部と富山・岐阜にまたがる部分との二地域に分布するイズマの類である。さまざまな変種を含むが、-ZUMA- ないしは、-ZU-, -ZI- という要素を核に持つという観点から一つ

の類にまとめた。また、緑を与えたのは、前に説明したアズクミの類と、-ZU- の部分で関連する点を考慮したものである。また、前部分は共通と考えても後部分について見ると、東は-KAKU であり西は-KUMU である。注目すべき現象であろう。

草を与えたのはヒザの類で、中国地方西半・淡路・四国・九州北東部分に大きな領域を占める。また、名古屋周辺・長野南端に、OOHIZA という形でも小領域を持つ。大分の HIZO- は、ハイフンを与えたことからわかるように、HIZOO KUMU とあったものである。O を省略する原則から HIZO- としたものであるが、HIZO という語根が長音化して HIZOO となったものかどうかは判然としない。開合の問題との関連が考えられる。すなわち、HIZA-O の AO が OO と変化したとも考えられる。ここではいちおう現象を客観的に表わした。

空で示したのは、近畿地方およびその周辺部にかなりの分布を示すジョラ、ジョロの類と、さらにその周辺部—九州にまで及ぶ地域—に散在するロク類とである。この前部分は、第一音節はほとんど ZYO(O)- である。符号の与え方としては、第二音節に注目し -RA を持つものに中ぬき符号、-RO を持つものにべた符号を与えた。分布の北半がジョラであり、南半がジョロであることがわかる。また、後部分の動詞、カク、クムの分布が、ジョラ、ジョロの分布とは少しずれていることに注意したい。ロクは、ジョロクのロクとの関連を考えてこの類に入れた。

以下に示す三つの語類は前・後部分に分けることが不適なものであって、符号の色の与え方の原則は、これまで述べた諸語類とは異なる。

紺で示したもののうち、スワルは、岐阜・長野南部・静岡にまとまった分布を示す。ネマルは、石川南部・岐阜北部・能登半島北端に単用で分布し、その他は、富山・石川・岩手・佐渡・北海道海岸部と、ほとんど他形との併存で分布している。51 図「すわる」に現われるネマルとも合わせ考えるべきであろう。51 図に現われる岩手の分布は、この地図に現われるネマルとは少しずれて、南へよっていることにも注目すべきであろう。五島に6地点あるのは、カシコマルである。分布は異なるが、51 図「すわる」に多く現われる形である。意味の変化が起こったものだろうか。また、近畿に数地点見られるアンザの類は、後に説明する奄美のⅥ類のアンザ類とともに

に、漢語「安座」に由来するものであろう。宮崎と屋久にあるヒウチの類と奄美のⅦのヒウチの類とはつながりがあるから、説明を省略する。

紺を与え、凡例でローマ数字で示したものは、奄美・沖縄に分布する諸語形である。各地点にさまざまな語形が現われ、ある形態に注目して一つの類にまとめても、代表する語形を示しにくく、かりに番号をもって表示した。各番号の類の内容を次に示す。

- I MAA-HIRA(K)-II~ という要素の認められる類：
MAAHWIRAKII SYUN, MAAHWIRAII SYUN, MAPPIRABII SYUN, MAAHIRA-KUUII SYUN, MAAHIRACYAAII SYUN, MAAHWIRAGUN I
- II HIRA(K)-II~ という要素の認められる類：
HIRAKUIIN, HIRAKIIN, HIRAII SYUN, HWIREEGUNII SYUN, PIRAKUGII SYUN
- III MAA-II~ という要素の認められる類：
MAABII SYUN, MAII SYUN
- IV HIRATANPAA
- V ANBIRAKAA SYUN
- VI ANZA(IRI)~ という要素の認められる類：
ANZA IRYURI, ANZAIRI SYUN, ANZAA SYUN
- VII HYUUCHIRI SYUN, HYUUCI UCYUN
- VIII ~KAKIBIRI(BİLİ)~ という要素の認められる類：
ANKAKIBİLİ (SYUN), DAIKAKIBIRI (SYUN), DONHAKIBIRI(SYUN), ANGA-HUMKAKIBİLİ ASİ, ANGUIKAKIBİLİ
- K ZASİKIBİLİ (SYUN), ZASİKIBİRÜ
- X DALİ~BİLİ~ という要素の認められる類：
DALİBİLİ U ASİ, DALİKUBİLİ U ASİ, DALİKURABİLİ ASİ
- XI ~BİLİ(Bİ, BII)~ という要素の認められる類：
BIKIDUNBİLİ, BOOCIRIBİ, HUUYABII ASİ

以上凡例によって全国に分布する諸語類を見渡してきたわけであるが、また違った観点からこれら进行分类することも可能である。アグラ、アグチ、アブラ、アブタ……

と並べてみると、A-という共通要素を抽出できる。単なる偶然か、過去の何かの要素の痕跡（たとえば「足」の意味）かは今のところ判定できないが、このA-に注目して、一枚の分布図を描いてみることもできよう。同様に、ITA-, OTA-, UTA- 等を得る。また、AZUKURA と AZUKUMI とから、AZU-を抽出することもできる。このような方法で、前部分を、さらに下位の要素に分割して、それぞれの地図を作ることができる。これらの地図については、いずれ発表する機会を得たい。なお、さらに前部分の後ろ半分についても同様に地図を作ることができるが、これも、発表は次の機会を待つことにする。これらの地図は52図とはまた別の分布の様相を示している。

さてここでふたたび52図を見てみよう。分布の細かな点にまで解釈を及ぼすことはできないが、ごく大ざっぱには、次のように考えられる。

空を与えた、近畿中央に分布する、ジョラの類は、分布の姿から、かなり新しい勢力と見られる。近世の文献にも上方の方言としての記録がいくつかあるようである。もっとも新しい勢力とは言うものの、この領域内でのアグラとの併用地点では、アグラを新しいものとしジョラ類を古いものとする注記がいくつか見られた。これは、ジョラ類が、近世に、一時上方のことばとして、勢力を得て周囲に拡がったけれども、現在は勢力を失い、標準語形アグラ類に圧倒されつつあることを示すのであろう。今、6525.30, 6573.71の地点を見ると、イタピラとの併用となっている。この2地点の注記では、イタピラの方が古いとある。これに従えば、ジョラの類は、近畿南部のイタピラ、イタピラの類の上に拡がった新しい勢力であると言えようか。

兵庫北部・鳥取にあるアブタの類は、鳥取中部・隠岐にあるアグラとの併用地点で、アブタの方を古いとする注記が見られ、古い層かと考えられる。その南側に分布するアクダの類は、併用地点の注記に積極的なものがないが、アグラと分布が入りまじっていて、分布の姿としては、古い層を思わせる。

このアブタ、アクタの領域へ、アグラがかなり混在している。このアグラは、どうい層のものだろうか。東日本や九州にあるアグラと同じ層のものか、近畿で標準語意識によってふたたび勢力をもちかえしたもののなか、判定がつかない。

もう少し東西に視野を広げると、中国地方中部と岐阜

に、緑で示したイズマの類がある。東西のイズマは歴史的につながりがあるものと思われる。ある時代に中央で栄え、アブタ、アクダより古い時代に東西へ伝播していったものであろう。ここで興味あることが一つある。後の動詞部分を見ると、東が-カクで、西が-クムとなっていることである。これは、イズマという形が、東へ進んだ場合は、そこにもとからあったカクを動詞としてとり入れ、西へ進んだ場合は、クムをとり入れた結果か、あるいは、イズマが侵入した後に、東にはカク、西にはクムが侵入した結果の、いずれかであろう。カク、クムの分布を見ると、非常にはっきりとした姿を示し、安定している。これは、古くからさしたる変動を経なかったことを思わせる。そこで、イズマが、カク、クムの分布していたところへ伝播して行って、イズマ-カク、イズマ-クムという表現が成立したように見える。しかし、一方、西のイズマの付近では、前部分のアクダ、アブタなどと、カク、クムとの分布にずれが見られ、動詞部分単独の伝播のあったことを思わせる。とくに、アブタの領域では、現在、鳥取西部がクムで、隠岐と、鳥取東部・兵庫北部が、カクとなっている。これは、まずアブタ-カクが東から伝播し、一度鳥取西部から隠岐まで侵入し、そのあとでクムがその分布を分断し、鳥取西部をアグタ-クムの領域に変えた結果と考えられる。イズマ-クム、イズマ-カクについても、さらに詳しい検討を加えるべきであろう。

イズマの中には、多くの変種がある。IZUMA の I- は、“ゐ(「ゐる」のゐ)”の名残りであろうか。そうだとすると、-ZUMA は何か。また、IZUMARI の -MARI は、「かしこまる」「うずくまる」などの -MARU などと関連があるか。IZUMAI の -ZUMAI は、「たたずまい」などの -ZUMAI と関連させるべきであろう。

緑の中ぬき符号を与えた、アズクミ、アズクラ、アズクマリの類について考えてみよう。これらの類は、他の語形と併用される場合の注記に、二、三、古いというものがあり、分布の姿からも今まで触れたいくつかの語形より、さらに古いものの残存かと考えられる。伊豆半島から南に分布するアズクラの-クラは、アグラの-グラと同じものであろう。

中国地方西部と、四国・九州東部に広く分布するヒザの類は、前部分は、完全に一つの要素と見て間違いなからう。今までに触れた諸語形のように前部分内部の要素

間の類似がないことから、それらとは、かなり異なった歴史を持っているものと考えられる。これは分布の独立性がかなり強いことからもうかがえる。名古屋近辺にある、オオヒザの類との関係はどうであろう。今まで触れた近畿周辺に分布するさまざまな語形よりは、さらに古い層の表現らしい。

アグラについては、これをア-と-グラに分けて描いた地図によって解釈するのが適当である。その地図を省略した今、詳しく述べるのは、次の機会にしたいが、結論だけを簡単にいうと、近畿周辺のア-は、オタ-より新しいであろう。また、-グラは-ブタ、-クダ、-グチ、-ピラなどよりさらに古いものであろう。東日本のアグラはこれと地理的に連続したものであろう。

奄美・沖縄は、I~IV, VI, VIIに、IIもしくはIRI, VIII~Xに、BIRI, BĪLĪ, BII, BĪがある。ほとんどが、“ゐる”の後裔と考えられる。本土では、51図、52図の《すわる》意味を含む図にはまったく現われず、奄美・沖縄に現われることは、“ゐる”の歴史を示すものとして、注目すべき現象であろう。

53. いる(居る)

この項目は、後期調査計画であらたに加えたものであるから、地点数が少ない。

三つの類が全国をおおっている。緑で示したイル類、橙を与えたオル類、紺で示したアルの三つである。

ARU は紀伊半島南部に分布する。イルは、東日本に分布し、近畿中北部にもその領域を持つ。ERU は、いわゆる、イとエの区別のない地域に分布する。なおこのE-は[e, e, e]をまとめたものであり、中舌化の[i]はあまり見られなかった。ITA, ETA は、東北方言の文法の問題として注目されている-TA を含むものであり、いわゆる「完了のタ」ではないようである。この項目は、質問文からもわかるとおり、イルというかオルというかを選ばせる形式の質問であった(C式という)。それにもかかわらず、イタなどの答えを得たことは、この-TA が、単なる完了などではないことを示していると言えよう。IRO は、伊豆利島にある。他図と比較すればわかるように、終止形がオ段で終わる特徴を持つ地点である。

オルは西日本のほとんどをおおう。静岡西部でイルと

分布が重なり、その他のイル地域にも点々と現われている。佐渡もオルの領域である。奄美・沖縄の諸語形も、オル類と考えられる。オルのうち、OR は島根・対馬・彦岐・五島・長崎にあり、[or, ol] などなどと表記されたものを表わす。OO, OI, OT は、九州西南部に現われる形であるが、先に説明したC式質問のためか、その現われ方が他図と比較して少ない。YORU は、近畿中央部に数地点ある。

近畿のイルは、オルとの併用地点で、オルが古いとする注記が見られた。もし、イルに〈新しい・上品・まれ〉などの注記があれば、この地図では併用とせず、イルを除いて、オルの単用としてある。したがって、この近畿のイルは、標準語の影響によって抜がった新しい分布と見られる。一方、静岡西部のイル、オルの併存地帯では、併用の際、オルが、新しい・上品、という注記が多くあった。この地域では逆に、オルが、力を得ているようである。また、東日本のイル領域の中に点在するオルは、分布からは、何の意味もないものと思われる。質問のしかたが、語形を与えて選択させる方法であったため、文語的表現などが、ふと浮かんだものかと考えられる。ただ、新潟北部・秋田南部のオルは、あるいは、日本海沿いに北上した西の勢力かも知れない。

この図の分布から、イル・オルのどちらが古いかをきめることは必ずしも容易ではない。この際、合わせて考えるべきことに、イル・オルの補助動詞としての使われ方があるということである。また、イル・オルの元の形「ある」(または「う」)「をり」の意味・用法の変化の歴史とも関連してくる。この図は、そのような「ある」(をり)ないしは「あり」の意味・用法の変化の歴史の一面を示しているものと考えたい。

紀伊半島に分布するアルについては、現代標準語では人が主体のときアルとは言わないが、古くは、「あり」に「(人が)いる」の意味があったと考えられる。しかし、それが、ほとんどの地域でその意味を失い、「(物が)ある」の意味になっていった過程の中で、紀伊半島にだけ、アルが「(人が)いる」の意味を保ってきた歴史、また、「むかしむかし、おじいさんとおばあさんがありました」の形で化石的に保たれていること、これらの問題を総合的に考えていくことが必要であろう。

また、待偶表現もこの場合関係を持つであろう。今、奄美・沖縄には、オル類の語が分布する。51図「すわる」、52図「あぐらをかく」では、この地域は、ほとんど、

イル・イイなど、イル類の語、つまり「ある」の末裔と考えられる語が分布する。両図とも広義の「すわる」の意味を持つ語を示したものである。「ある」の中の「すわる」の意味が、本土では失われ、奄美・沖縄で保たれている様子が見られる。

ともあれ、この図によって、イル・オル・アルの各類が、このように、截然とした分布を示していることを理由として、「ある」「をり」ないし「あり」の意味・用法の変遷の過程に、二つないし三つの大きな流れがあったということは、はっきりと言えよう。

54. かたあしとび(片足跳び)をする —前部分—

「片足跳びをする」に当たる表現は、前部分(54図)と、後部分(55図)に分割して地図に示した。ただし、前部分の語形が多様なため、および調査の際、動詞としての表現が得られず、「片足跳び」という名詞形に当たるものだけを報告せざるを得ない地点も多かったので(55図に後部分がないと示した)、助詞に相当する部分を見捨てて作図したことを断わっておく。助詞の有無および具体的な形については、『日本語地図資料』にゆずる。前部分が目的格になる場合、助詞の「を」に当たるものの分布は99図、100図に準ずるが、この項目の場合は、副詞的な表現、名詞のままの回答が多いため、やや事情が異なる。

このように助詞部分を見捨てても、なお、語形の類が多いために、凡例の見出しには似た語形をまとめて、かりに代表的な形を示したものも多い。また、語末部分が雑多なものを含むため、その部分を代表的な形で表わしにくい場合は～印によって示した。ただし～印は、すでに凡例で語末部分まで示されている形以外のものが見つかった場合だけを意味する。(～)印は～に当たる部分のある語形と、ない語形すなわちその前で語形が終わるものとの両方を含むことを示す。たとえば、ASI～はすでに凡例にあげてある ASIKENKEN から ASIN～までの、ASIにつづく形式以外のものが見つくることを示し、KATAASI(～)は KATAASI で語形が終わる場合と、そのあとに何らかの語形がつく場合を含むことを示す。

調査内容は、質問の際使用した絵にあるような動作で

あるが、この動作の意味が地点によって異なっているようである。たとえば、確立されたゲームとして、ただ子どもがふざけてする所作として、また、何の意味もないただ可能な姿勢としてなど。とくに、日本海側一帯と、紀伊半島東南・四国西南端などの無回答地域は、「このような遊びをしない」との注記が多かった。東南北部のビッコ類、全国に点在する KATAASI (~) の中にも、「遊びはしないが、もしこういう動作を表わすとしたら」という注付きの回答もあった。

いちおう標準語として項目名に採用したカタアシトビが、東京では話しことばとしては使われず、全国的にもまとまった分布領域もなく、散在するものが併用も合わせて40地点足らずということは、標準語の問題を考えるについて興味深いことである。東京の話しことばでは、チンチンのようである。

全国を概観すると、赤の線符号で示したケンケン類が近畿から瀬戸内海にかけて、空で示したチン〜類が中部地方に、ともに広くまとまった分布をすることが目立つ。そのほか、橙で示したアシ〜類がその東に、茶で示したビッコ類がそのまた東北にある。上記のものを囲んで、桃で示したヒト・イチ類と、草で示したテン〜類が分布し、もっとも外側には、緑で示したステ・スケ類が分布している。それ以外の、紺で示した類のうち、山口のリリン、関東と中国のコンギ、などがやや目立つ。

ケンケン類は、北海道にも分布するが、分布の様相から見ても、もっとも新しい表現と思われるし、事実、この類を他の類と併用する地点では、ケンケンが新しいことばであるとの注が非常に多かった。岩手南部に離れて分布するケンケン類についての解釈はむずかしいが、ヒト類、ビッコ類、アシ類の分布する東南北部や関東でも、HITOKENKEN, ASIKENKEN, BIKKOKENKEN のケンケンの部分に注目すれば、他の類の分布する中に、ケンケンはそれらの類の語形のあとに複合語として食い込みながら太平洋側を北上したと言えよう。九州のヒト・イチ類の地帯においても同様の侵入があったと思われる。なお、符号は、ただのケンケンに赤の線系統で示し、アシ、ビッコ、ヒト、イチなどの類にケンケンがついた場合は、それらの類の色に、線系統の符号で示したので、ケンケンという部分のある語形は、色に関係なく、地図で線系統の符号をたどることによって分布を知ることができる。同様にして、コンコンおよびそ

れを含む語形は馬蹄形によって示した。

チン〜類はケンケン類よりは古いと思われるが、他の類よりは新しそうである。この類は、丸などの符号で示したチンガラなどと、矢印の符号で示したチンチンなどと分けられる。山間部に分布するチンガラなどが、近畿や東海道筋に分布するチンチンなどより古いと思われる。チンチンなどのくりかえし語形は、ケンケンの影響によって生じたものかも知れない。チンガラなどは、各部分の母音と子音の変種をできるだけ体系的に符号化したつもりである。

アシ類は東関東と新潟にまとまった分布を見せている。その他の地方に点在するものは、各地で独自に命名した可能性もある。

ビッコ類がアシ類の東北に広く、またアシ類の西南辺にも少し分布していて、アシ類より古そうである。なお、ビッコ類が東日本にだけ分布し、チンバ類が西日本にだけ分布しているのは、跛行そのものの方言分布を反映しているものと思われる。

BIKKONAGE など~NAGE という語形を持つものは、類に関係なく中点のある符号で示したが、これは宮城を中心とする地方や瀬戸内海にいちおうまとまった分布を示しているようであって、この地方で新しく発生した傾向かと思われる。なお、宮城は62図「捨てる」で、ナゲルの分布している地方である。

ヒト、イチは同じような地域にまじり合って分布しており、意味的にも通じるものがあるかも知れないので、同色の符号を与えた。

テン〜・タン〜類の分布が、ヒト・イチ類と似ていて、歴史的にも同じ段階、すなわち、ビッコ、アシの類よりは古いものと思われる。ステ・スケ類は東北北部・山陰・九州というもっとも辺境の地に分布するので、上記の類のうち、もっとも古いものと思われる。東京西部のものはやや疑問もあるが、やはり古いものであろう。

なお、KENKEN, TONTON, CINCIN, KATAKENKEN などくりかえし語形を持つという点に注目して分布を述べると、近畿から西は瀬戸内海・四国・九州海岸部、東は東海道・南関東・東関東・東南北部・東北東部に分布し、文化の中心から街道沿いに連続して分布しており、具体的な語形の相違があっても、くりかえし音を使う傾向が新しく広まりつつあったとも言えよう。

55. かたあしとび(片足跳び)をする

—後部分—

後部分は動詞部分に当たるものについてである。後部分がない、すなわち、名詞形だけしか答えなかった地点がかなり多い。この名詞形回答の多少は、県によって少し傾向がある。「動詞の出ないとき名詞形だけでも報告する」という調査の際の指定の判断の程度が、調査者によってやや異なったためもあると思われる。しかし、大きく、東北地方・関東東南部・瀬戸内海・九州にそういう現象が比較的多いということは、ある方言的事実を反映しているものと思われる。

緑で示したスル類が全国的に分布し、そのほか、草で示したヤル類が東日本の太平洋側と瀬戸内海西部にあり、赤で示したカク類が中部地方に、桃で示したカス類とコク類がその西に分布している。空で示したヒク類は東北の日本海岸・関東・四国などに、茶で示したツク類が中国と北陸などに、さらに、橙で示したが、前部分がなく一語で表現するチギル類が紀伊半島に分布している。

スル類の中における語形変種については、「はじめに」を見よ。

東北部の SU は五段活用的なものらしい。東北地方南端・関東の一部・北陸・中部地方などの SIRU は一段活用的なものらしい。東北地方の日本海側と山陰にある SIRU は、SURU に当たるものが、音韻法則により SIRU に近い音になっているものであろう。逆に、東北地方一般に見られる SURU は、[sírɯ][súru]をもまとめたものであり、この中に一段活用的な SIRU に当たるものの音変種が含まれているかも知れない。九州西南部の SUT, SUI などは、SURU の音変種である。東海地方の SERU は、下一段的な活用をするものらしい。

スル類の分布が「後部分がない」の分布と重なっているが、これはふだんは動詞的な表現をしていないが、とくに動詞形を求めたため、それにスルをつける以外に方法がなかったためとも考えられる。

ヤルは共通語ではスルと多少ニュアンスや用法がずれて使われている。この図でヤルの現われている地点は、共通語のように、スルとは別に、そのようなニュアンスを持つ語であるヤルの方を答えた場合が多いと思われる。

しかし、「片足跳び」の場合は、動詞はヤルとしか言わない

地点が含まれているかも知れない。なお、図でヤルが現われていない地域の中には、ヤルという語が土地のことはとしてみたく存在しないところもあると思われる。

カク類は前部分がチンガラなど(チンチンは含まない)と分布が一致するので、チンガラーカクというイディオムとして広まったものと思われる。これは、中部地方を中心にかなりまとまった分布をしているので、比較的新しく発展したものと思われる。しかし、この類は山間部に多く分布し、平野部や街道筋にスル・ヤル類が侵入していること、房総半島先端・福井・三重などにも離れて分布していることを考えると、のちスル・ヤル類によって押されたり、分断されたりしていると言えよう。

カス類は分布から見て、カク類と関係があるかも知れる。しかし、たとえば CINGARAKASU のような場合の ~KASU は、一語のうちの接尾辞にすぎないものをこの図では、他の動詞と同列にとりあげているのかも知れない。52 図「あぐらをかく」においても、やはり長野は ~KAKU、岐阜は ~KASU であって、この図におけるカク類とカス類の分布と一致する。82 図「くすぐる—後部分—」における ~KASU の分布は、この図とは少しずれている。

コク類の分布する地点は、少数ではあるが、92 図「うそつく—後部分—」でもコクという地域に含まれる。

ヒク類は、「引く」の意味を持つものと思われ、前部分である 54 図と重ねてみると、東日本では、いずれもビッコーヒクであることがわかる。スル類がビッコ類につく場合は、BIKKOBIKKO—SURU とか BIKKO—NAGE—SURU とかいうように遊びを示す形になるのに対して、ヒク類がビッコ類につく場合は、BIKKO—HIKU のようにただ歩き方としての「びっこをひく」の意味でしかないらしい形である。このビッコーヒクの分布する地域が無回答の多い地域に重なるのも、このことと関係があろう。西日本ではヒク類の前部分がさまざまである。なお、秋田・山形・新潟の HUKU, HUGU は、ヒクの音変種と考えられ、ヒの音変種については、第 1 集の 12 図、13 図に示した。

ツク類は足で地面を「突く」の意があると思われるが、54 図とつき合わせると前部分は雑多である。この類は、中国山地・北陸山地と半島先端部・佐渡・八丈島・紀伊半島・四国・九州の辺地に分布しており古そうである。

動詞一語によって表現するチギルは、伊勢湾をはさん

でチンギリークなどの地域と関係を持ってつながっていたが、のち、ケンケンスルなどによって分断されたのかも知れない。また、東京付近のKIRUもそのようなものに関係を持ってつながっていたかとも思われる。紀伊半島では54図のTENGI(~)とこの図のTEGIRUとが隣接している。

56. つくる(作る)

工場で物を作るときの「つくる」である。別に、この調査では、酒を造る意味の「つくる」を調べたが(質問番号024)、東北地方にコシラエル類があるほか、全国ツクルであったため地図には示さなかった。また、これらの項目は、前期5か年で調査をうち切ったため地点数が少ない。

地図を見ると、空を与えたツクルの類と、橙・赤・茶を与えたコシラエルの類との二類に大別できる。その他デカスが、栃木・愛知・島根・対馬に数地点分布する。

ツクルの類は、九州・奄美・沖縄のほとんどをおおいそのほか、関東一帯・中部・近畿東部にかなり多く分布し、その他の近畿・中国・四国にはやや少なく、東北地方には少ない。ツクルのうち、TUKURUは、第一音節が[tu]ないし[^hu]のものであって、大分・高知に分布する。CUKUT, CUKUI, CUKUUは、九州西南部に分布し、この地方の動詞語尾の文法論的ないし、形態音韻論的特徴を示している。

コシラエルの類は、九州以南を除く全土に分布し、中部・関東のツクル地域にはやや少ないが、他のツクル地域では、ツクルと混在している。

コシラエルの類は、文法的特徴に注目して三つの類に分け、三つの色を与えた。すなわち、コシラエル・コサエル・コセルなど下一段活用と考えられる類には橙を、コサウ・コサルなど五段活用と考えられる類には赤を、コシラエルなど下二段活用と考えられる類には茶を与えた。これらの活用形の類別は、詳しい活用形の調査をした結果ではない。むしろ、橙は、-ERU 語尾、赤は、-AU, -OO, -OU, -AA ないし、-ARU, -ORU 語尾、茶は、-URU, -YU 語尾と言った方がより客観的であろう。

凡例で、橙のKOSIRAERUからKOSYERAERUまでをコシラエルとすると、コシラエルは、北陸・近畿

から中国・四国に強い分布を示し、中部・関東各地および岩手にも分布する。KOSAERU 以下の橙をコサエルとすると、コサエルは中国西部・四国・中部・関東南部から福島・宮城・秋田・岩手・青森等の地域に分布している。今、コシラエル、コサエルなどの語中の-AE-は、長母音の[e:]も含む。[e:]となる地域は、第1集40図で、-AIが-EEとなる地域とほぼ一致する。ただし、山梨は、40図で-AIであるが、本図では、[e:]であった。語中・語尾という音環境の違いによるものであろうか。

茶で示したコシラエルの類は、九州東部・西部、和歌山に分布し、そのほか、隠岐や陸中海岸北部にもある。

赤を与えた類には、コシラウ・コサウなどの-AU 語尾のものと、コシロオ・コシヨオなどの-OO 語尾のものがあ、符号の上でもその区別を示した。また、コシラウとコサウとの語幹の相異も符号で区別した。これらの類は、山形・新潟・北関東の地域と、静岡・愛知・三重の地域に分布を持ち、そのほか、北海道・隠岐・三陸海岸・長崎にも分布する。このうち-OO 語尾は、新潟、福島の一部に分布するだけである。コシラウ、コサウの二つを比べると、分布はほとんど重なっている。

以上、分布のあらましを述べたが、今、コシラエルとコサエルの分布を見ると、コサエルの方が外側にある。近畿・北陸など比較的中心部に、コシラエルが分布する。分布から、単純には、コシラエルが新しく、コサエルが古い勢力と言えるかも知れない。これらはともに、下一段活用と考えられ、歴史的には、「こしらふ」「こさふ」などを祖先として持つと考えられる。一方、赤のコシラウ、コサウなどは分布からは、コシラエルよりは古く、コサエルよりは新しいもののようにも見える。

しかし、分布があまりはっきりしていない地域も多いことから、地理的な伝播だけでなく、個々の地域での個別的变化も考える必要がある。個別的变化がどのような原因で起こり、どう発展したかは、この図からは十分説明できない。各地域の活用形などについて、さらに詳しい調査研究を待たなければならない。

ツクルと、コシラエルとは、非常に近い意味を持つ語と考えられるが、古く何らかの区別があったものが、次第にその区別を失い、現在のはっきりしない分布を示すようになったのであろう。その間、九州以南では、コシラエル類の侵入を許さなかった。この場合、コシラエルという語形をもとととり入れなかったのか、ツクル・

コシラエルの二語の意味分野がはっきりと分かれていて、コシラエルがツクルの意味を侵し得なかったのは、今はわからない。いずれにしても、九州以南のツクルと、中部・関東などにほかの類とともに分布するツクルとが、歴史的に同じ層のものであり、コシラエルの類によりその分布を分断されて、現在の分布を示しているものかどうか、よくはわからない。九州以南では、ツクルがその位置を固く守って現在に至り、中部・関東などのツクルはコシラエルとの意味分野のずれによって今の位置を得、現在、コシラエル類の語と共存していると考えるのが妥当であろう。

57. たく(炊く)

58. にる(煮る)

57図は御飯を「炊く」という意味に対する語形、58図は、大根などを味付けして「煮る」という意味に対する語形をそれぞれ示したものである。両図は、現われる語形がほとんどタクとニルとの二つの類の語形であり、両図に共通するので、色と形を共通させた。

57図「炊く」から説明しよう。全図ほとんど赤で示したタクの類である。TAGUは、東北地方に多い。また新潟西部、福井北部、甕島にも数地点見られる。千葉南部に分布するTAHU、TAUは、この地方の語中のK音脱落の現象を示している。TATは、九州南部・五島などに分布するが、他の図で示した-Tよりその分布が狭い。鹿児島北部にあるTAHUは、千葉のそれと同一符号を与えたが、末尾母音[u]の無声化を伴っており、動詞語尾の促音化へ到る過程にあるものと考えられる。奄美から与論までタクであり、沖縄・宮古にもタクが数地点ある。

空で示したニルは、58図と異なり、狭い地域に分布するだけである。岩手に一地域、福島から関東西部・長野にかけて一地域、その他、伊豆諸島・北陸・中国山地・九州中部などに分布領域を持つ。沖縄・宮古にもニルがある。

福井北端に紺で示したKASIKUがあり、秋田・青森にKASIGUが分布する。この-G-は、[-g-]と[-ŋ-]とを含む。青森の数地点、秋田南部の数地点を除いてはすべて[-g-]であった。音韻対応の法則からは、福井のKASIKUに対応するものと考えられる。

そのほか、バカスン、マカスンなどの類が八重山その他に分布する。本土のワカス(沸かす)に対応する語であろう。

次に58図を見ると、57図とは異なり、ニルが広い地域に分布し、タクは、近畿から中国・四国の瀬戸内海側、九州東部へと連続した分布を示し、これと辛うじて連続するかの如くに、九州西部にかなりの分布地域を持っている。そのほか、能登・犬吠崎・岩手東部と南部にそれぞれ少しの分布を示している。最後の二地域では、TAGUとなっている。これらのタク以外の地域は、沖縄先島を除いてすべてニルである。ニルのうち、NIT、NIIT、NIIは、九州西南部に分布している。NIIRUが新潟その他に、NURUが宮城と山形沖の飛島に、NYURUが岩手中部にそれぞれ数地点ずつ分布している。NIROは伊豆利島にある。奄美・沖縄・宮古はほとんどがニル類である。57図と異なり、ワカス類が、徳之島・与論・沖縄本島・久米島などに見られ、そのほか、八重山・宮古にバカス類、沖縄本島にワカス類の語が少しずつ分布する。

次に両図の解釈を試みよう。57図からは一見して、ニルが古い言い方の残存であることがわかる。各地域のタクとの併用地点で、ニルが古いという注記が多く見られたこともそれを裏付ける。カシクも、タクより古いとする注記があった。

58図を見ると、分布からは、タクが新しい勢力として近畿から九州東部まで拡がっているように見える。しかし、タクとニルとの併用地点の注記を調べると、近畿周辺部・愛媛西部・九州東部などで、タクが古いという注記が見られた。また、同じ地域で、ニルに、〈上品・新しい・まれ〉の注記があったが標準語と考えて削除した。これらの注記から、上記の地域では、タクは古いということになり、さきに、分布からタクは新しい勢力らしいとしたことと矛盾する。

57図で、ニルを、単に、タクに追われた残存と言っているものであろうか。「御飯を炊く」という意味を表わす語はもとニルであり、その後、タクが拡がったと考えていいだろうか。むしろ、「米」ないしそれに類するものを、「飯」にして食べる習慣の拡がり方との関連を考えるべきではなからうか。つまり、「飯を炊く」という意味範疇そのものが伝播し拡がり、それに伴ってタクという表現も拡がっていったのだと考えるべきではなからうか。

57・58両図を合わせて考えてみよう。「炊く」―「煮

る」の二つの意味を、タク・ニルの二つの語形を組み合わせて表わしている。その組み合わせは、ニルーニル、タクータク、タクーニル、ニルータク、の四通りが可能である。こうして全国を見ると、ニルーニルで区別をしない地域が、岩手・福島・関東西部・山梨・長野・静岡北部・伊豆諸島・中国脊梁山地・沖縄本島・宮古、その他、57図でニルのあるところのほとんどすべてである。タクータクで区別をしないところが、近畿から四国・中国の瀬戸内海側、九州東部へ連続した地域を持ち、九州西部・能登東北端、および犬吠崎・岩手東部の数地点にそれぞれ分布を示している。その他の地域は、タクーニルとして区別を持ち、ニルータクという区別をしている地域はないようであるが、タクとニルの二形が両方の意味にまたがっている地域が岩手中部などにある。

このように両図を重ねて見ると、第一にニルーニルの分布がもっとも古い層らしいことがわかる。一方、タクータクの分布は、分布だけから見ると、新しい拡がりのように見える。その中間が、タクーニルとして区別する言い方であるように見える。ここで、先にも触れた、「炊く」―「煮る」の意味の分化―料理法の分化か―の歴史をさぐってみよう。一つの考え方は、古くは、ニルーニルという地域が拡がっていて、その後、「炊く」意味にタクが生じて、タクーニルとなり、東西に拡がり、ニルーニルの地域を侵し、最後に、近畿を中心に、タクータクがいちばん新しい勢力として、西に勢力を張っていった、という解釈ができる。この解釈からだ、近畿地方その他、タクータク地域では、ニルーニル、タクーニル、タクータクという変化をしたことになり、いちど「炊く」、「煮る」の意味を分化させて、ふたたびタクータクと同化させてしまったことになる。

別な考え方をすれば、次のようになろう。古くは「炊く」、「煮る」の二つの意味は区別されず、語形としてはニルが使われていた。ないしは、「炊く」という料理法はなかった。そのあとに、タクという新しい単語が起こって、近畿地方にタクの地域が広まって、そのあとで「炊く」という「煮る」とは別の料理法が発達した。しかし、国の中心では積極的に「炊く」「煮る」の意味を語形で区別する動きはなく、タクは、二つの意味にまたがって使われ、今もそのままである。その後、分化した意味「炊く」―その料理法が急速に拡がり、同時に、語形タクもその新しい料理法に伴って全国に拡がっていった。この「炊く」料理法とそれを表わすタクという語形の伝播し

た地域では、ニルーニルから、タクーニルへと変化していった。現在、ニルーニルと区別していないところは、料理法は伝わっても、まだ語が伝わっていない地域と考えられる。このようにして、ニルーニル、タクーニル地域が形成された。しかし、先にも触れたが、58図で、タクが古いという注記の見られた地域では、標準語のタクーニルの影響からか、タクータク勢力の後退が見られる。また、一方、兵庫北部・九州中部山地などのように、タクータクが力を持っているところもある。

今までの推論には、九州西部のタクータク地域は含まれていなかった。このタクータクの分布は、近畿を中心とするタクータクの分布と連続するものであろうか。連続するものとすれば、近畿から瀬戸内海を通過して西進したタクータクは、九州中部山地を越えて、西部九州へ侵入し、対馬・壱岐・五島・甌島などまで拡がったと考えなければならない。しかし、58図では、九州中部をたてにニルが分布し、タクーニル地域を構成していて、その中に、タクが、点々と分布はしているとは言え、この地域をタクータクが、何の影響も受けず「通過」したことになる。これは隣接地域伝播の原則に反する。また、タクータクが、対馬・壱岐・五島・天草、島原・長崎・西彼杵の半島部などの比較的辺地にしっかりした分布を持ち、九州本土部でむしろ、タクーニルとの混在を示していることから、九州西部のタクータクは、近畿に中心を持つタクータクとは直接には連続していないものと考えられる。しかし、一方、九州中部山地に、ニルが古いという注記も少なからず見られ、「煮る」の意味でタクが新しい勢力として侵入していることもうかがわれる。質的には異なっても、東西に同じタクータクをひかえ、間のタクーニルが何らかの影響を受け、「煮る」意味でのタクの侵入を受けていることを示している。

近畿を中心とするタクータクと、九州西部のタクータクとは、直接に連続する分布ではないと結論したが、この両者をまったく関係のないものとすることはできない。しかし、三陸海岸・犬吠崎のタクータクは、近畿の影響による飛火と考えるには少し遠すぎるようである。本来区別のないところに両方の意味で共通語タクを受け入れた可能性もある。能登のタクータクでさえ、近畿のタクータクとの連続と考えるのには疑問が残ろう。現在の段階では、これらの間の関係を考えることは、単なる推測となるから差しひかえる。

そのほか、57図のカシグは古い語形の残存であろう

が、先に推論したニルーニルからタクーニルへの変化の過程で、どのあたりに位置するものかは判定しにくい。八重山その他のバカス、ワカスの類は本土のワカスに対応するものと考えられる。ニルーニルよりさらに古い層であろうか。

59. センタクスルを“裁縫する”の意味で使うか

「センタク」ということばを「裁縫」の意味に使うというのは、奇妙なことである。しかしこの項目(質問番号171—地図下欄を見よ)に対して「言う」と答えた地点は各地方にまたがり、しかもかなり多い。調査者、あるいは被調査者の誤解に起因するとは考えられない。この項目は本集60図などととも、漢語出自のことばの勢力範囲と歴史を考える上でも、興味深い項目と思われる。

地図を見る前に、注意してほしいことがある。

まず、この項目は、前期5か年で調査をうち切ったもので、地点数は2,400ではないことである。

次の点にも注意したい。日本語地図作成のための調査には、この調査項目のほかに実は、質問番号170の「着物をせんたく(せんだく)するというのは、着物をどうすることを言いますか」という項目があった。いわゆる関連項目である。もし、この質問番号170に対して「裁縫することだ」という答えがあったとすると、そのまま質問番号171に対して、「言う」と答えたことになる。質問番号170、171に対する各地点からの報告は、ほとんど矛盾がなかった。しかし、一部に、両者を総合した方が、問題をいっそう明確にできるものも、ないではなかった。たとえば、質問番号170に対して「着物・ふとんをほどこき、洗い張りして縫い直す全過程をも言う」と回答しながら質問番号171については「言わない」とするものなどである(4685.88)。

こういう場合、この地図では、質問番号170への回答をも参考にして作図してある。なお、質問番号170の調査項目も、前期5か年で調査をうち切ったものであった。

この地図の凡例はなかなか複雑である。各地点からの回答の内容の複雑さを反映しているわけであるが、以下に、それぞれを概観してみよう。

なお、ここで「センタク」と言う語形には、fendaku, hendaku などの音変種をも含んでいることを、あ

らかじめ注意しておこう。なお、たった1地点ではあるが、洗うことは fendaku, 裁縫は hendaku と言って言い分けるといふ興味深い注記があったので付記する(5528.31)。

「言う」ないし「聞いたことがある」について——

ひとくちに「裁縫する」とはいても、「仕立てる」「縫い直す」「繕う」など、さまざまな種類がある。ここで「言う」に分類した各地点からの報告は、これらの全部を指すのか、あるいはいずれかを指すのか。各地点からの報告に付された注記を見ると、全国的に「繕う」ことに限るとするものが多く、注目される。ことに西日本のものほとんどには、この注記があった。裁縫とは言うが、新しく「仕立てる」ことには使わないとする注記も、いくつかあった。東国では「繕う」のほかに、西国ではわずかだった「縫い直す」ことをさす、とするものも多かった。着物をいったん解いて、縫い直すのであろう。両者の勢力は半々と言ってよからう。

また、これは全国に関することであるが、「縫い直す」とは言っても、ふとんや綿入れに限るとするものが、24地点に見られた。たとえば岐阜のものなどが、それである。

一方、東北地方には8地点ではあるが、「新しく仕立てる」ことに言うという地点があった。同種のものはほかには、九州に1地点しかない。

「洗い張りして縫う一連の動作を全部まとめて言う」について——

これは、全国各地に点在する。元来、和服(ことにあわせや綿入れ)やふとんなどは、そのまま洗うことはできない。ほどいて洗い、またもとの形に縫い直す必要がある。場合によっては、繕うことも必要になるかも知れない。この見出しに含まれる地点では、センタクスルをその全工程に当たることばとして使っている。

なお、ここで馬蹄形の符号を与えたもののほかにも、関連するものがあった。すなわち、「言う」ないし「聞いたことがある」のところでも説明したように、その中にも、洗うことはとくに必要としないが、ふとんや綿入れをほどいて縫い直すことを言うという地点が(全国に24地点)あった。

「嫁が里帰りをしたときにする裁縫のことだけを言う」について——

これは、前項と違って工程に関するものでなく、裁縫の場面に関するものなので、岩手・新潟(佐渡を含む)に

わずかに見られるものであるが、とくに別の見出しを立ててみた。嫁入り衣装のアフターケアを実家に帰ってする習慣があるのであろう。

「漁師が網を繕う場合にだけ言う」について——

「繕う」に限定されたセンタクスルが、さらに、場面を限定されたものと考えられる。すでに、洗う動作との関係は断絶している。淡路と高知に見られる。

「複合語としてなら言う」について——

全国に散在するが、具体的な例を挙げてみよう。末尾の数字は地点番号を示す。

- ハルセンタクスル(冬物を夏物に改装する)3752.53
- ワダイレセンタク(縮入れの縫い直し)4700.37 など
- センタクバサ(冬期などにふとんの縫い直し、縮入れなどをする老婦人)5615.20 など
- ポロセンタクスル(繕うこと)6339.35 など
- センタクチギ(繕い用の布切れ)6421.26
- アラエゼンタク(縫い直し)6422.93
- センタクイト(縫い糸)6422.93
- スイゼンタク(破れを直す)6452.83
- フセゼンタク(縫い直しなど)7249.35, 7340.24 など
- オキシセンタクスル(夏に着物、冬にふとんの縫い直しをすること)7402.47

ツギゼンタク(繕う・縫い直す)7414.43, 7425.02など
「センタクを着物の意味になら使う」について——

岩手に見られる。これは、裁縫とは直接関係がないように思われる。しかし、ほどいて洗い、張って縫い直した工程の結果の物を着物とするならば、あながち無関係とは言えまい。もっとも、新しい(仕立ておろしの)着物だとする地点もあった(3725.72)。さらに変化した形であらう。

4706.53では、次の注記を得た。「昔は嫁入りの着物を作ってやるときだけ、センタクにするかカネにするかと言った」(着物を作って持って行くか、持参金にするかの意)。この地図では、センタクスルを、裁縫する意味で古くはまれに使ったとして分類してあるが、あるいはここに分類すべきものだったかも知れない。

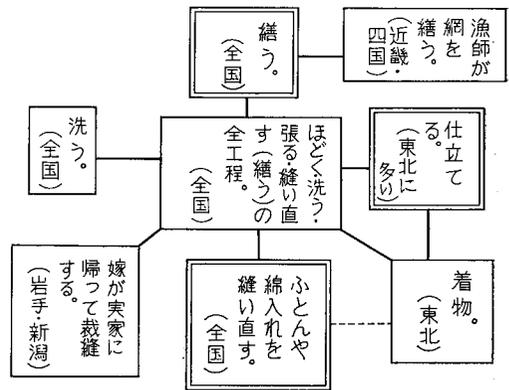
4726.80の地点の注記は「外出・旅行・嫁入りなどのために、着物などをととのえ準備することに使う。着物だけでなく、嫁入り道具にテレビをセンタクスルというようにも使う」とあった。この地図では「言わない」に分類してあるが、センタクが着物の意味になる過程を示唆しているように思われる。動詞の用法を保っている点も

興味深い。

「言わない」について——

無答、センタクということばがまったくない、なども、ここに含めてある。ただし質問番号170の調査結果から、センタク(洗濯)ということばがまったくないのは、地域としては、琉球・八丈島に限られることがわかる。

以上述べたいろいろの意味の相互関係を図示すれば、概略次のようにならう。図のうち二重の線で囲んだものがこの地図で、「言う」ないし「聞いたことがある」に分類したものである。



結局は、この地図は、センタクスルということばの歴史を反映しているとともに、洗濯法の歴史、ひいては衣類・裁縫の歴史をも反映していることになる。

分布からみると、センタクスルを“裁縫する”意味に使うというのは、ある程度の古さを持っていると考えられる。国の中心部には現在ほとんど認められないが、ある時代、近畿地方にもあった表現と思われる。もっともこの表現は、東北北端や九州南半などの辺境にまでは伝播しなかったものと見える。洗濯から裁縫への意味変化は、ほどいて縫い直すまでの全過程をへて、はじめて「衣類を洗う」ということが完結するという事情にもとづくのであろう。

現在、「繕う」意味で使われることが多いのは、裁縫(針仕事)の中心が繕い物にあった歴史を物語るのであろう。東北地方では、新しい布地から衣類を仕立てるものまでもセンタクという。これも、その工程がごく特殊であって、特別の表現を持たず、一般の「ほどく・洗う・張る・縫い直す」を示す表現によって代表されていた時代を推定させる。センタクが「着物」をさすようになった過程も、やはり、改装された着物が主流であって、新しい仕立ておろしの着物というものが特殊であった歴史を

媒介としているのであろう。

60. ハソンスルを“修繕する”の意味で使うか

「修繕する」ことをハソンスルというのは、まことに奇妙である。しかし地図左下の欄に示した質問文によって、「言う」と答えた地点はかなり多く、しかも東日本において広大な領域を占めていることが明らかになった。調査者、あるいは被調査者の調査時における誤解に起因するとは考えられない。

この地図集には載せないが、質問番号211「物を“はそんする”というのは物をどうすることですか」の結果でも、この地図で「言う」を得た地域では、「修繕する」という答えを得た。

この質問番号211では、他はすべて「こわれる」「こわす」意味で使うと答えたが、参考として報告のあった回答語形とその分布に興味があるので、参考のために、その概略を列記してみる。

北近畿を中心に イタム、イタメル（以下自動詞形だけを挙げる）

大阪を中心に ツブレル

熊野灘沿岸 シモタレル

和歌山 モジケル

徳島 クダケル

中国地方(山口を除く) メゲル

山口を中心に(志摩・高知・天草にも) ヤブレル

九州 クズス・クヤス・ワル・ソンジカス
(これらは他動詞形)

東国にはコワスが多い。

さて、60図に返るが、この地図で赤の符号を与えたものには、さまざまなものが含まれているので、注意を要する。

a) 限定された場合にだけ言うと答えた地点がある。家や塀の修繕に限るといふ地点もあったが、とくに衣類・足袋の繕いのみ使うと答えた地点が多かった。

b) 言わずに、聞くだけの地点がある。ただし、「聞く」と答えた地点がすべて「言う」の地点に接しているので、「古くは言った」「まれに言う」に連続するものと了解してよからう。

c) 語形がハソンでないのに、この中に含めたものがある。たとえば、ハソ・ハソオ・ハシンなど。もっとも、ハシンを一般的な針仕事(つくりに限らない)に使うという答えは、この地図では、質問文からみて「言わない」に分類してある。

このあたりに、この地図の謎をとく鍵があるのではなからうか。

もと、ハシンという語形があり、裁縫を意味していた。『大日本国語辞典』には次のようにある。「はしん(把針) 裁縫すること。はりしごと。又、その人。おはり。大蔵流狂言若市『さる寺へ把針に頼まれて参る』」。一方、ハソンは、こわれることを意味していた。両者が併用され(ともに多少いかめしいことばづかいであったろう)、類音牽引の現象が起こり、ハソンが裁縫の意味を持つようになる。針仕事のうち、繕いは、もっとも大きな部分を占めることから、ハソンは繕いの意味となる。それがさらに、衣類の補修から一般の補修にまで拡大されたのではなからうか。

ハソンが裁縫の意味を持つ地点のあることは、前に述べた。ハソンが衣類の補修を意味する地点のあることも、前に述べた。ハソンが一般の補修を意味する地点のあることは、この地図の示すとおりである。

類音牽引の結果ハソンとならず、ハシンとなって、しかも一般の補修を意味するように変化した地点のあることも、すでに述べた。別の経路ながら平行的な変化があったことを暗示している。

もし以上の推定が正しいなら、分布図から見て、この変化の起こった中心地は、関東(江戸)ではなかったろうかと考えられる。現在の分布は、その誤った(?)変化が文化の中心ではその後復原したにもかかわらず、山間地ではまだ残存している——ということになる。

東国以外の赤符号の由来は、よくわからない。たとえば、広島西部などで、東国の場合と同様の変化が、無関係に起こったのかも知れない。

なお、この地図で、海岸部に赤の符号がほとんど見られないことが、偶然であるかも知れないが、注目される。

61. ナオスを“片付ける・しまる”の意味で使うか

この地図の質問文の焦点は、やや分裂している。「片

付ける」と「しまう」の意味は、重なる部分もあるが、重ならない部分もある。この地図に現われた分布は、このため多少乱れがあるのではないかと考えられる。

もっとも、凡例をみればわかるように、片付ける意味にだけ使うと注記のあった回答には、とくに別の符号を与えた。しかし、この符号が特別の分布領域を持つわけでないから、この問題はあまり重視する必要はなからう。

また、この地図集では割愛したが、質問番号 025 の「物をなおすと言ったら、物をどうすることですか」の結果の中で、「しまう」「片付ける」および「整理する」の答えを得た地域は本図と大差ない（ただし地点数は少ない）。これは主として 025 と 026 の両項目の調査地点数の差に起因しよう。また、質問形式の差も関係があるかも知れない（『日本語語地図解説—各図の説明 1—』43図の説明（26ページ）参照）。「しまう」と答えた地点と「片付ける」と答えた地点は、連続ないし混在していることから、大きな問題とする必要はないと考えられる。

凡例でわかるように、「元の位置にもどす」「位置を正す」の意味で使うと答えたものにも、別の符号を与えた。これらは「片付ける」とはまた意味が違うが、関連があると考えて赤を与えてある。NAWASU という語形でなら「片付ける」「しまう」の意味で使うと答えた地点が、九州の西側に見出される。これにもまた別の符号を与えたが、NAWASU は NAOSU の訛形と考えてよからう。

ナオスという語形を「片付ける」「しまう」の意味で使う地点の分布は、大別して、

1. 岩手東岸と九州から沖縄にかけての辺境（関東南岸は辺境とも言えないが、これに含める）
 2. 近畿地方を中心にした地域
- となると言うことができよう。

ここで、地図集では割愛したが、質問番号 027「ナオスということばを、こわれた物を修繕して元通りにすることに使いますか」の調査結果を見てみよう。意外にも、東北地方に 12 地点ほど、関東・甲信越にも 10 地点ほど、九州に 30 地点ほど、修繕して元通りにする意味には使わないと答えた地点が現われた（全国 1,000 地点ほど調査したところのうち切った項目である）。これらは、ほぼ点在するが、岩手東南部・九州ではほぼ全域に、やや目立っている。

さきに挙げた 1 の地域が、ほぼこれに重なるのではあ

るまいか（2 の地域には、修繕するをナオスと言わない地点がほとんど見られない。1 地点だけ）。すなわち、1 の地域では、ナオスを、「片付ける」「しまう」の意味では使うが、「修繕する」意味では使わない傾向が強い。2 の地域では、「片付ける」「しまう」「修繕する」の各意味に使う傾向が強い、と言うことができよう。つまり、1 と 2 とは、地図では共通の符号を与えてあるが、異質のものである可能性がある、ということである。

このことは、この図で「最近を使う」という見出しによって示した符号の分布とも関連があろう。それらは、2 の地域の周囲に放射するように分布して、1 の地域の周囲には見当たらないように思われる。これは 1 の地域のナオスは現在とくに発展してはいないが、2 の地域のナオスは発展中であることを示しているのではなからうか。

さて、1 の分布は、国の東西に分かれている。そのために、圏論が適用される可能性がある。過去のある時期に国の中央で行なわれていた言い方の、地方へ伝播した残存形かも知れない。すなわち、2 を含めて考えれば、ナオスを「片付ける」「しまう」の意味で使うことは、国の中心から 2 回にわたって地方に波及したということになる。しかし、意味のずれ（移動）に関して圏論をあてはめていかどうかについての理論は、かならずしも確立していない。各地で、それぞれ同方向の意味のずれ（移動）があったとも考えられるからである。

62. すてる（捨てる）

後期調査計画になって追加した項目のために、調査地点数はあまり多くない。しかしこの程度でも、ほぼ全国を大観することができる。なお、63 図の内容とも関連があるので参照されたい。

全国は、かなりきれいに分割される。東北——ナゲル、関東・中部——ウッチャル・ブチャル、近畿を中心に——ホオル・ホカス、近畿周辺と中国・四国（および北関東一帯）——ステル・シテル、九州——ウシツル・ウッスル、沖縄——シッティン。

このうち近畿を中心とするホオルの類は、新しく発展した語形と考えられるし、九州のウシツル・ウッスルなどはウツ+スツル（二段活用）の訛形と考えられるので、日本アルプス以西は、元来ステル（スツル）が広く使われ

ていたことになる。

北関東のステルには、二つの見方がある。

1) このステルは、以前、日本アルプス以西のステル(スツル)に連続していたが、後にウッチャル・ブチャルが新しく発展し、そのために二つの領域に分断された。——すなわち残存。

2) 以前、北関東では、東北のナゲルと関東のウッチャルが勢力圏を接していた。類義語として併用されることも多かったろう。この混乱を回避するために、中央語(文章語)ステルが輸入され、この地域に定着した。——すなわち輸入。

この地域におけるステルとウッチャルの併用地点でステルを新しい言い方である、共通語的な表現であるとの注記があっても(事実そうであり、その逆はなかった)現代の標準語形がステルであることから、これを全面的に利用することはできないが、それでもなお、われわれは後者、すなわち2)の見方をとっておきたい。

その理由は、次のとおり。すなわち、ウッチャル・ブチャルの内部には各種の変種が認められ、それぞれかなりはっきりした領域を占めている。これは、このウッチャル・ブチャルが、新しい表現とは言えないことを示していると考えられる。八丈島でこの類の語が使われていることも、この推定を支持しよう。

ところで、東北のナゲルには、あまり変種がない。近畿を中心とするホオルと、よく似た発想法であるが、分布領域が画然としているので、無関係なものと考えておく。もっとも、石をナゲル、石をホオルという場合、たとえば東北ではナゲルと言ってホオルとは言わない、近畿ではホオルと言ってナゲルと言わない、とでも言うなら、考え直す必要がある。また、西日本の各地に、いくつかのナゲルが見出されることも、注意しておく必要がある。今は、これらのナゲルは東北のナゲルとは直接関係のないものであり、ホオルの単なる言い換えと考えておく。

関東・中部のウッチャル・ブチャルは、接頭語のついで点では、九州のウシツル・ウッスルと共通する。しかし、直接の関連があったとは思えない。山形県庄内のウタルは佐渡のスタルと関連があると思われるが、ウッチャル・ブチャルの類に含めておいた。新潟の山間部にナゲルが認められることから、この地方では現在ナゲルの上にかぶさっていく、新しい勢力と考えられる。

近畿を中心とするホオル・ホカス類の内部では、その

分布の様相から、ホカスがもっとも新しい言い方であると考えられる。この類は、九州北部にも見られるが、これは、ある時期に、近畿地方から輸入されたものである。もっとも、全国的に見ると、この類は、それほど広くその勢力を伸ばしていない。これは、ある時期に、近畿地方のことばの権威が薄れたことと関連があろう。

東国に見られるステルにはそういうことはないが、日本アルプス以西のステル類には、SITERUなどで代表される訛った形で現われる場合が、意外に多い。九州のUSICURU・UHICURUなどもこの類と考えられる。訛形が多いことは、その言い方が土着のものであることを示す、と言ってよかろう。したがって、このことも、前に述べた北関東のステルを輸入と見る傍証たりうる。

ステル>シテル、シテル>ステルのいずれの変化が、どの地方でどのように起こったかについては、現在のところ(この程度の地点数の材料からは)、明言できない。ステル・シテル間の変化は一方向のものでなく、相互間の往復が、何度か、しかも各地域で別々に起こったかも知れないからである。

愛媛のマクルについては、今は何とも言えない。

63. ステルを“紛失する”の意味で使うか

「失う」と「捨てる」とは、動作の結果は似ているが、積極的な意志が働くかどうかという点で、根本的に相違すると考えられる。しかし意外にも、この調査項目における「使う」という答えは、かなり広い領域を持っている。

しかも、62図と比較することによって、「捨てる」ことをステルと言う地域(62図で赤の符号を与えた)のほとんどで、「使う」という答えが得られた。つまり62図、63図を通じて赤の符号が分布する地域では、ステルという語形は、「失う」と「捨てる」の両方の意味を持っていることになる。

これに関して、さらに興味深い事実がある。今ここで図示はしないが、この質問に対して「使わない」と答えた地点(すなわち、この図では紺の符号を与えてある)で、それでは紛失することを何と言うかを参考のために付言してくれた注記の分類である。次のような結果が現われた。

ナゲルと言う地点が、秋田と新潟に2地点現われた。ウッチャル・ブチャルと言う地点が、関東・中部に34地点現われた。

ホオル・ホカスと言う地点が、近畿に9地点現われた。もちろん、このほかに、オトスと言う地点が19地点、ノオナルと言う地点が12地点、ウシナウと言う地点が29地点(近畿に4地点、他はすべて九州西部)現われるということなどもあった。

これらの情報はすべて好意的に寄せられたものであるから、地点数について上に示しはしたが、これをあまり重視することはできない。

さて、たとえば、関東・中部を例とすると、「失う」ことをステルとは言わないが、ウッチャル・ブチャルと言うと注記した地点は、62図でウッチャル・ブチャルを得た地域のほぼ全域に、しかも満遍なく認められる。このことは、この地域においても、ステルという語形ではないが、「失う」と「捨てる」の意味の区別を、語形によって行っていないことを示す。

ナゲルやホオル・ホカスについては、その情報を得た地点が、確かに少ない。しかし、ステルやウッチャル・ブチャルのケースから類推すると、62図でこれらの語形を得た地域のかなりの部分で、やはり同様のことがあるのではなからうか。「失う」をナゲルあるいはホオル・ホカスと言うという情報の得られた地点は、それぞれ、62図においてそれらの語形を得た地域に含まれている。

もしそうだとすると、日本語は、「失う」と「捨てる」とを、語形によって本来区別しなかったのではないかとさえ、言えそうである。西日本では確かに「失う」についてはウシナウと言い、「捨てる」を表わすウスツルやウシツルを使わないようであるが、この方がむしろ、地方的な現象のように思われる。

少なくとも、「失う」と「捨てる」とを、同じ語形によって表現することは、62図、63図で赤の符号を共有する地域より、さらに広い地域に分布することだけは確言できる。別のことばで言えば、この地図で紺の符号を与えられた地点にも2種類あり、a. 「捨てる」を表わす語形によって「失う」ことも表現する、b. 「捨てる」を表わす語形以外によって「失う」ことを表現する、ということになる。そして、aが案外多い。日本において、所有の意識(権利)がどのように確立されていくか——おそらく古くは、現代と異なっていたであろう——の問題と、関係

があるかも知れない。

では、主として関東地方に見られる赤の符号は、何を意味するのであろうか。62図と比較すればわかるように、これらのうちいくつかは、西日本の赤符号と同じく、「失う」「捨てる」ともにステルと言う地点であるが、ほとんどは、「捨てる」はウッチャル・ブチャルと言い、「失う」はステルと言う地点ということになる。

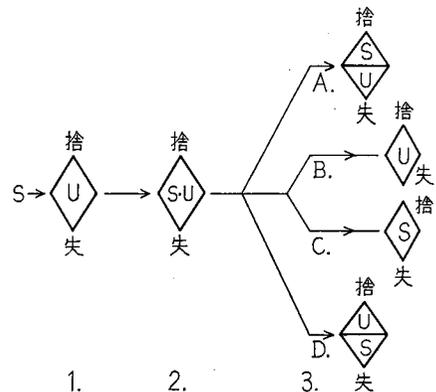
これについては、次のように推定する。

1) 関東・中部では、元来「失う」「捨てる」を区別せず、ウッチャル・ブチャル(Uと略称する)と言っていた。そこへ、西日本から、同様に「失う」「捨てる」を区別しない同義語ステル(Sと略称する)の影響が及ぶ。

2) その結果、UとSとは、同義語・類義語として共存する状態が生ずる。

3) 同義語・類義語は安定が悪いので、安定をとりもどすため、四つの解決の道が現われた。

- A. Sは「捨てる」の意味を分担し、Uは「失う」の意味を分担する。
- B. 侵入者Sは姿を消し、もとの状態にもどる。
- C. 逆に、元来のUが消滅し、Sは「捨てる」「失う」の両意を表わす(すなわち、西日本と同じ状態が生ずる)。
- D. Sは「失う」の意味を分担し、Uは「捨てる」の意味を分担する。



さきほど、これらの赤符号のうちいくつかは、西日本の赤符号と同じく、「失う」「捨てる」ともにステルと言う地点である——とした。すなわち、Cの経路によって生じた結果と推定する。また、ほとんどの地点は、「捨てる」はウッチャル・ブチャルと言い、「失う」はステルと言う地点である——とした。すなわち、Dの経路によって生

じた結果と推定する。また、前に、関東・中部に、「捨てる」「失う」ともにウッチャル・ブチャルと言う地点のあることを指摘した。これはBの経路によって生じた結果が含まれると推定する。そして、Aの経路から標準語が生じたのであろう。Uの部分にはさらに他の語形に入れ替わっているにしても……。

64. おんぶする(幼児を負う)

64図、65図は、現われる語形が似通っていて、分布も重なる部分が多いので、符号の色や形をできるだけ一致させた。両項目とも、後期調査項目であって、地点数が少ない。

全国は、大きくオブウ・オンブスルとオウとカルウの三つの地域に分けられる。

空を与えたオブウの類は東日本をおおっている。オンブスルの類には草を与えた。北陸でボンボスルが広く分布している。関東のオンブスルは、標準語形と認められるが、積極的な分布は示していない。

近畿中部から九州北部にかけて、オウの類が分布する。鳥取・徳島の OOTORU は、OU・OO のいずれに分属されるべきか判別がつかず、そのままの形を見出しに立てたものである。

福岡・大分を除く九州には、カルウの類が分布する。

オブウの類のうち、語頭に母音を持たない、ブウが、新潟から秋田中部にかけての地域と、南関東とに分かれて分布している。茨城と西関東と福島、伊豆諸島にウブウが分かれて分布する。福島から山形にかけて分布する NBU・NBUU、静岡の UNBUU も、これと何らかの関係が考えられよう。

ブウを除いたウブウ、ンブウ、ウンブウなどを見ると、これらは、静岡から山形にかけての範囲内に分布し、関東での発生、伝播の跡を示すものと考えられる。これらの諸語形の分布の間を、オブウがうめている。オブウの分布領域の内部で上の諸語形が生じたものと考えられるが、発生のはっきりした地域はわからない。ブウは、これらオブウないしその変種の外側に分布する。この発生については、次のように考える。一つには、分布から、新潟と南関東のブウは、もと連続した分布を示していたものが、オブウその他のものによって分断されたとする考え方である。次に、この両者は、西の方の一つ

の源から別々に東進して、今の分布を示しているとする考え方。第三には、まったく別々に、両方の地域で発生したとする考え方である。第一の考え方からすると、東日本のもっとも古い層は、ブウということになる。そうすると、東北部のオボルの分布、また、岩手でオブウが、ブウに分断されていることの説明がむずかしい。第二の考え方を支持するものとして、北陸・近畿北部のボンボスル、ブスル、ボスル、滋賀のボス、など、語頭に母音を持たないものの分布がある。この、語頭に母音を持たない BO-, BU- の分布をたどると、滋賀あたりから日本海岸を北上し秋田中部まで連続した地域が得られる。一方、伊豆半島にも、ボンボスルがある。これは、北陸との直接の連続は考えないとしても BO-, BU- として伊豆から千葉への連続が得られる。しかし、日本海側の分布は新しいとしても、伊豆・千葉の分布は、必ずしも新しいものとは言えない。第三の考え方は、この場合、音的な問題であり音環境が似ているので可能性がある。UBUU、ないし NBU などをも仲介として、個別に変化して成立したとも考えられる。

オウの類は、西日本に強固な領域を持っている。近畿北部と、能登・佐渡のオウの間にボンボスルがはいって分布が断たれている。もとは連続していたものが、ボンボスルによって分断されたものではあるまいか。次の65図と比べると、この地図においてオウの領域が、いっそう広いことが注目される。「おんぶする」意味でのオウの進展が見られる。

沖縄本島の、ウファスンの類は、オウの類と認められる。使役形のようにも思われるが、『沖縄語辞典』によると、?uhwa・?uuhwa がオンブに当たる名詞ということである。本島に多いことからこの地域としては、新しい語と考えられる。西日本のオウと関係があるかも知れない。もしそうなら、-HW-ないし -P- を持つことから、オウが、[-Φ-]ないし [-p-] であった時代に伝播したものと考えられる。

九州のオブは、説明しにくい。オウの西側にあることから、東日本のオブウなどと同じ層のもので、オウに押された結果の残存とも考えられるが、また飛火であるかも知れない。

また、オウとオブ・オブウとは、オウの古形[oΦu]か、いし[opu]を介して、何らかの関係があったのではなからうか。

カルウは、九州にしか分布しない。ある時代の中央語

の残存だとは、この図からは考えにくい。65図のカルウの分布領域との差から、オウに押されて、退縮しつつある語形だとは言えそうである。四国には、1地点もカルウが見出されない。

65. しょう(包を背負う)

64図に、この図と共通する語形が多く現われているので、符号の色や形は、なるべく共通させてある。もっとも、近畿と東日本一帯に広く、64図とは異なる語形が現われる。おもなものは次のとおり。北陸と、新潟にカズクが分布し、近畿・長野・岐阜東部・愛知東部以東にショウ・セオウの類が広い領域を占めている。そのほか、三重・滋賀・岐阜などに、オイネルの類、大阪・奈良・和歌山などに、セタラウの類が分布する。

緑を与えた北陸・新潟のカズクの類は、66図～68図に多く現われる語形である。符号の色や形に共通なものを使った。しかし、後の三図とは分布の様相が非常に異なる。66・67・68図では、この地域には、カタネルの類が強力に分布し、カズクはあまり現われていない。この地域でカズクは、一般に65図の意味で使われ、他の三つの図には、意味の微妙なズレによって出現しているのであろう。

桃を与えたショウの類のうち、SYOOが関東東部、福島などに分布する。東北北部のSYORU, SORUは、いわゆるワ行五段活用がラ行五段活用化する地域である。76図「もらう」に共通する現象が現われている。伊豆利島のSYOWOは、とくに、一般の二重母音OUが同化して生じたSYOOと区別するために立てた見出しである。この島では、一般に動詞の現在形がオ段で終わる。SYONAU, SYOKONAUは、愛知西部にあり、66図以後に現われるINAU, NINAUの-NAUとの関係が考えられる。セオウは、兵庫南部などの近畿地方、関東などに分布する。ショウは、セオウから生じ、セオウはオウから生じたものとする考え方があがるが、地図上の分布から、それを裏付けることができない。セオウからショウへの変化は、東日本では完了してセオウはまったく姿を消し、近畿・関東などのセオウは書きことばを媒介としての復活と考えられる。とくに、東日本方言には-EO-という連母音をきらう性格が強いのかも知れない。

三重・滋賀・岐阜のオイネルは、オウと関係があると考え、橙で示したが、66図以後に北陸・新潟に現われるカダネル、カズネルと、-ネルの部分が共通している点注意すべきである。これを一種の動詞形成語尾と考えるとこのネルは、三重から北陸・新潟へかけて、広い地域にわたって分布していることになる。結局、オイネルは、オウとこのネルが結びついたもので、分布の形からこの地方に独自に発生した新しい語形であるということになる。69図「数える」に対するカズネルの北陸における分布とも比較すべきであろう。

セタラウの類は、語頭にセがあることから桃で示した。『大言海』などでは、セタラとは、馬の背のたわんだところから、セタラ+オウと解釈している。これに従えばオウの類に入れて、橙にすべきであったかも知れない。このセタラウの類は、大阪を中心に拡がった新しい表現と言えよう。セタラウより古く大阪で使われていた語形が、セオウであったか、オウであったかの判断はむずかしい。直前にはセオウがあったと考える方が妥当のようである。確実なところは、この地方でのさらに詳しい調査を待たなければなるまい。

オウとカルウの境界は、64図と比べると、東に寄っている。オウの勢力は、64図に比べて弱いと考えられる。

沖縄には、無回答が多い。運搬の方法に相違があるからであろう。

初めにも述べたように、この64図と65図との2枚の地図には、共通な語形が多い。そこでこの2枚の地図を重ね合わせて考えてみよう。64図には、東から、オブウ類、オウ類、カルウ類の三つがあり、65図には、東からショウ(セオウ)、オイネル、オウ、カルウ、がある。こう見てくると、若狭から、近江中部・大和・紀伊の諸国の東側の線を境として、語彙構造の大きな相違が見られる。すなわち、それより東では、2枚の地図に違った語形が現われるのに対して、西では概して、共通の語形が現われる。もう少し詳しく見よう。まず東国から北陸・新潟で、オブウーカズク(以下、64図の語形を先に、65図の語形をあとに示す)という構造があり、その他の地域ではオブウーショウ(<セオウ<オウ)が広く分布し、オブウーオイネル(<オウ)もある。他方、先の線の西側には、オウーオウが、中国・四国西部まで強力な分布を示し、カルウーカルウが、福岡・大分を除く九州に拡がっている。オウーカルウが、その間にある。ま

た佐渡は、オウーセオウ、オウーオウとなっている。近畿中央にはオウーセタラウがある。

このうち、オウーカルウの地域は、オウの勢力がカルウの地域に進展したため生じたものと考えられ、元来はカルウーカルウであったと考えられる。オウーセタラウについては次のように考える。セタラウは新しい表現で、もとは、セオウか、オウであったであろう。したがって、元来は、オウー(セ)オウの地域であったと思われる。

まことに概略的であるが、以上のように考えると、元は全国には、東から、オブウーオウ、オブウーカズク、オウーオウ、カルウーカルウという四組の言い方を持った地域が広がっていたということになる。沖縄については、65図がはっきりしないため、よくわからないと言わざるを得ない。しかし、64図にオウの類があることは確かである。

66. かつぐ(材木を担ぐ)

66図から68図までは、肩で物を運搬する方法に関する地図である。運搬法を三つに分けてそれぞれの回答を図に示した。これら三図の内容は、意味範疇が隣接していると考えられ、また、現われる語形も共通するものが多い。したがって、符号の色と形はできる限り一致させた。また、これらは、後期調査項目であるから地点数が少ない。

初めに、3枚の図に共通する語類とそれに与えた色とを概略述べよう。まず、緑は、カツグ、カズクの類に与えた。カタグ、カタゲル、カタネル等の類には、紺を与えた。ニナウの類には、赤のべた符号、イナウの類には赤の中ぬき符号をそれぞれ与えた。その他の類については、二図に共通するものもあるが、それぞれの図で述べる。また、奄美・沖縄の語形に与えた色と符号の体系は本土のそれとは、別とした。

この66図の説明にはいろいろ。この質問では、一人で材木などを肩にのせて担ぐときの表現を求めた。緑で示したカツグ、カズクの類は、近畿の東以东に分布する。また、近畿から西にも、カタグの類と混在する。このうち KAZUKU は、三重・愛知を中心に分布し、伊豆半島・三宅島・千葉と、北陸・新潟にそれぞれ分布する。とくに65図と比較して、この KAZUKU は、その分

布領域が大きく異なることに注目すべきであろう。

この図では、カツグの類の-G-の音の内容をこまかく区別した見出しを立てた。一般に東京などの [-k-] と、[-g-] ないし [-ŋ-] とが、東北地方で、[-g-] と [-ŋ-] とに対応することは広く知られている事実である。このことから、KACUG[ŋ]U は、中部地方・関東・福島・宮城などに分布し、西日本や、新潟・群馬・埼玉の KACU-G[g]U に対応するもので、カツグ類の中核と見られる。新潟から関東にかけての [-g-] に関しては、第1集の1図、2図に示されている。また、本集86図をも参照。KAZUG[ŋ]U は、茨城と、山形・宮城以北・道南に分布する。したがって、この KAZUG[ŋ]U は、それより南に分布する、KACUG[ŋ]U、ないし、KACU-G[g]U に連続するものと考えられる。秋田・青森に分布する、KAZUG[g]U は、この地方の [-g-] が、東京などの [-k-] に対応することから、KAZUKU の類と認めておく。あるいは KACUKU に対応させるべきかも知れない。もし標準語に KAZUKU という語形があれば、それに対応するものとしては KAZUGU[g]U であってほしいところである。しかし、音韻対応の法則は、必ずしも万能ではなく、つねに、-Z-:~Z- となるとは限らず、-Z-:~Z- のままのこともありうる。ここに、「地理的分布」が登場する。KAZUG[g]U は、KAZUKU に対応させることによって、その西の、とくに、65図に多く現われる、KAZUKU と、分布の連続が得られる。KACUKU に対応するものと考え、その西には、KACUKU がほとんど現われず、分布の連続は得られない。すなわち、「地理的分布」から、KAZU-G[g]U は KAZUKU の類と認めることが適当と考えられる。先の KAZUG[ŋ]U も、まったく同じ理由で、KACUGU の類と認めた。

以上のように考えると、緑の中に大きく二つの類が広く分布することがわかる。一つは、カズク類で、これは三重・愛知から、伊豆・千葉にかけての一地域と、北陸・新潟(この地方は65図に顕著に現われるが)から東北地方西部にかけての二つの地域に分布する。それ以外の地域に分布するのが、カツグ類である。このカズクは、新しい侵入か、残存か、決めがたい。文献によると、カズク、カツグともに古くから使われていたようである。その意味も、物を「かつぐ」意味、頭に「かぶる」意味、水に「潜る」意味などが、厳密には音は違いますが、同音異義語のように使われていたらしい。そのうちに「水に潜る」意味

は別としても、意味が接近しているために、長い間には、類音牽引や類義牽引・同音衝突・同義衝突などの現象が生じ、その結果広まって現在の分布に反映されているのであろう。微妙な意味の違いはあったとしても、語形としては、連続が得られることから、やはりある種の伝播があったと考えてよからう。

西日本を見ると、紺のカタグ、カタゲルなどの間にかツグがかなりの量混っている。しかし、まとまった連続した分布は示していない。67・68両図で、カタグの領域が狭ければ、カツグも平行的にその領域を狭めている。分布の姿がかなり不連続であることは、カツグがカタグの中へ、地理的に侵入したのではないことを示すのではなからうか。

これらカツグが分布する地域には、実は、別の接近した意味分野にかツグという形があって、もしその意味分野を切りとれば、カツグがきれいな分布を示すのではなからうか、なども考えられる。山口には、カツグが多く現われている。他の図にもままた見られる現象であるがこの地域は、標準語と同じ形の現われる傾向の強い地域である。また、カタグ、カツグは語形が似ているので、カタグの地域では、標準語カツグを受け入れやすいということがあるかも知れない。さらに、カツグはもと[katugu]であったと考えられ、この[-tu-]とカタグの[-ta-]とが、古い時代何らかの関係を持っていたとも考えられる。

紺で示した、カタグ、カタネル、カタゲル、カタグルの類について述べる。これらはすべて、KATA-という共通部分を持つと考えて、共通の色を与えた。分布が、新潟・北陸・近畿以西と連続していることも、KATA-をとり出して注目したことを支持しよう。

カタネルは、新潟・北陸・近畿北部に分布する。この分布と隣接して、カツネルがある。この両方から、-NERU という共通部分を取り出すことができると思われる。また、65図で触れた三重・滋賀・岐阜のオイネルの-NERUもこの図の-NERUと連続する地域に分布する。これらは、65図でも符号を同じくしてある。オイネル、カタネル、カツネルなどの分布をつなぐものは、-NERUという部分である。-NERUについては、一般にどのような働きをしている morpheme なのかを詳しく調べたいものである。なお69図「数える」のカズネルと比較せよ。

カタグは、出雲・伯耆・隠岐を除く中国・四国を中心

に分布し、九州東部・近畿・北陸にも点々と分布する。このカタグは分布が密でない。先にも触れたことであるが、カツグがその中に点々と分布し、カタグが連続した分布を示さないことが多い。この混在の理由については先のカツグのところの説明にゆずる。もっとも、東のカタゲル、西のカタグルの分布との地理的な連続性を考えると、この地域の類義語カツグとカタグのうち、カタグの方が、この図の求める意味を分担することが本来的であることだけは言えよう。

近畿などのカタゲルと、九州のカタグルと、中間のカタグは、活用は違っても、同類と考えられる。これらのうち、もっとも古いのは、二段系であろう。近畿のカタゲルは新しい拵がりであろう。北陸や、紀伊半島山中などにカタグがあるので、カタグはカタゲルより古そうに見える。しかし、これらのカタゲルや和歌山山地のカタグルの中には、さらに古い層が残っているのかも知れない。九州ではカタグル地域にカタグの侵入している様子がわかる。北九州のカタゲルは、近畿との関連も考えられるが、一方、動詞の活用の種類の内部の変化であれば、個別に、二段から一段へと変化したものとも考えられる。北九州に多いことから、近畿の影響も受けつつ、個別に発生したものであろう。

イナウが、鳥取・島根の一部と隠岐および九州北部に分布する。ニナウも、上の地域や近畿北部に分布する。この二語形は、67・68図に広く分布するので詳しい説明はそちらにゆずる。この図からは、山陰のイナウは、カタグに駆逐された残存のように見える。

九州西部に点在するカナムルの類は、古形の残存であろうかとも考えられる。奄美・沖縄のKATAM-、HATAM-などの類と対応するものであろう。形としては、遠く離れてはいるが、KATANERU などとその成立において関連があろうか。

67. かつぐ(天秤棒を担ぐ)

一人で、天秤棒で物を担ぐときの言い方を求めたものである。まず、66図の説明の始めの二節を参照。分布は66図と西日本ではかなり異なるが、現われる語形は、ほとんど共通している。

緑で示した、カツグ、カズクの類の説明は、前図に詳しく示したのでここではしない。分布の違いだけを述べ

ると、岐阜・愛知・三重・滋賀などで、赤のイナウ、ニナウが拡がりカツグ、カズクを退けていることが特徴的である。また、西日本でも、カツグの分布領域は66図に比べ狭い。

カタネルも、66図と比べて、北陸地方の南部・岐阜北部で、ニナウにおされて分布領域を狭めている。佐渡に1地点カタネルがある。

カタグ、カタゲル、カタグルの類の分布は、66図とは、大いに異なる。まず、近畿地方に、カタゲルがほとんど見られない。カタグは四国東部と、鳥取・島根の一部を除く中国中・西部その他の地域にその領域を狭めている。カタグルも、九州東岸と、対馬に分布するだけである。

その他の地域に、赤で示した、ニナウ・イナウの類が分布する。近畿地方を中心としてみると、これらは、その他の語類と比較して、新しい表現と思われる。兵庫北部などのNIRAUはNINAUのNAが個別的にRAになったものであろう。概して、イナウとニナウは、それぞれ分布領域が分かれる。イナウは、島根・鳥取に一地域、近畿中部から三重・岐阜・愛知に一地域、そして、九州と、三地域に分布する。ニナウは、その他の赤地域で、とくに、静岡西部・紀伊半島南部・種子・屋久・五島・老岐、その他で、イナウに分断されていることに注目したい。分布から、近畿と九州とは、イナウの方が、ニナウより新しいように見える。しかし、近畿と九州のイナウを、合わせて考えると、両者が同じ層のものかどうか、はっきりしない。もっとも、イナウとニナウとは、語形も似ているし、分布も隣接している。両語形の間には何らかの関係があることは確かである。ニナウの語頭のN-が脱落してイナウになったとする考え方もあろう。イナウにN-が接してニナウが生じたという可能性もないではない。しかし、こういった現象が、三地域で別々に生じたか、あるところで生じた現象が伝播したのかは判断しがたい。また、東京・宮城などに、ニナウが離れて現われている。隣接する意味には、ニナウがもっと強力に存在することを思わせる。事実、二人で机を運ぶ動作を指してニナウという地域が関東などにあるようである。したがって、中国地方など、赤がなくて分布が切れているところにも、別な意味で、ニナウ・イナウが存在することも考えられる。こういう考え方は、ある語が、個々の方言の語彙の中で占める位置、果す役割りは異なっている、語形としては地理的に連続して分

布する場合があるという考え方にもとづく。言語地理学の一つの新しい課題と言えよう。

奄美・沖縄に現われる諸語形は、66図と同じであり、66図で九州西部にあったカタムルと対応するものと考えられる。

68. かつぐ(二人で担ぐ)

二人でモッコなどを棒に通して担ぐときの言い方を求めたものである。66図の説明の始めの二節を参照。前の2枚の図と比べると、とくに西日本に、初めて現われる語形がいくつかあり、また分布もそれに従って異なっている。新潟西部から静岡西部にかけてより東の地域では、ほぼ、前の2枚の地図と同じ分布である。

まず、この図にだけ現われる語形から述べよう。草を与えたのは、紀伊半島のナカドル、九州西部のナカズル、両地域にあるナカイナウなどである。これらはナカ-という共通する部分に注目して一つの類と考えた。九州のナカズルは、また、三重・愛知・岐阜から、富山・石川・佐渡まで分布する空で示したツルないズルと共通する面を持っていると考えて符号の形を同じくした。しかし、これら、ナカドル、ナカズル、ツルを、歴史的に連絡のあるものとは必ずしも考えなくてよからう。ナカ-もツルも、日本語として基本的なものであるから、各地で、個別に同様な表現を作り上げる可能性もある。九州では、ナカズルは、イナウにとりまかれていて、イナウより新しい表現と考えられる。67図で、この地域にはイナウが一面に分布していることから、ナカイナウは、67図などのイナウから二次的に生まれた語形であろう。そして、分布もかなり拡がっていることから、ナカズルよりも前にこの地域に現われたものであろう。そして、ナカイナウのナカ-をもらって、ナカズルという語形が生じたものであろう。同じようなことが、近畿でも言える。大阪・京都など、ナカイナウがあるところは、67図でイナウの分布するところである。やはり、67図の意味のイナウと区別するために、ナカ-を付けたものであろう。この場合、和歌山などのナカドルは、地理的に連続していないから、ナカイナウと直接関係はないものと考えておく。これらの地域で、二人で担ぐ意味を区別するために、イナウに、なぜナカ-を付けたか、また、ナカイナウではおさまらず、ナカズルと、な

ぜ、ツルを持ってきたかは、この図からはわからない。各地点では、二人で、材木を担ぐ場合には、どう言うのであろうか。やはりツルなどを使うのであろうか。

桃と茶を与えたものは、サシ-という要素を持ったものである。

サシアウないしサシアイ-という要素を持ったものは、桃で示した。サシアウは、近畿西部・岡山と、奈良・和歌山とに分布する。やや新しいある時期に、中央から拡がった言い方であろうか。岡山のサシアウの西の端、大分・宮崎などに、サシアイと、カタグ・カタグルとの結合が見られる。これらも、66図、67図の意味で使うカタグ・カタグルと区別しようとして、近畿からサシアイを輸入したものであろう。また、愛知東部に、サシアイと、イナウとの結合が見られる。これも、西日本の場合と同じく、67図のイナウと区別するために生じた語形であろう。九州東部・愛知は、現在のサシアウの分布領域と離れている。必ずしも隣接伝播の法則に合わないが、サシアウがかなり新しくなることから、飛火として伝わったものと考えておく。サシアウという語形が、全国でどのように使われているか、知りたいものである。

茶で示したものは、サシデ、サシニなど、サシ-という要素を持った類である。サシデニナウ、などの場合、後部分は、それぞれの語形が単独で使われる場合の符号と一致させた。滋賀などに、サシとニナウの結合が見られる。その他、大分に、カタグルとの結合などがある。これらも、それぞれ、67図などの意味を表わす、ニナウ・カタグルと区別するために、二次的に生じた形であろう。必ずしも、ある一地域で発生し、それが伝播したものとは考えられない。サシという語の分布を、詳しく知りたいものである。「サシ」は、二人で担ぐときの道具を意味する場合があるようである。もし、この語形を共通して持っているならば、ニナウ・カタグルを他の意味から区別しようとするとき、もとの語形とサシとを結合することによって新しい語形を生む地域が、別々にあっても不自然ではない。

橙を与えたのは、カクの類である。兵庫から四国・山口・九州北部に分布する。四国と九州・山口との分布は、地理的に必ずしも連続しているとは言えない。愛媛西部にニナウが現われて分布を断っている。このニナウ地域に、カクはまったく存在しないのであろうか。別の類似した意味(二人で机を持って運ぶなど)でこの語形が

存在する可能性を、否定することはできない。今までにこれについての報告も発表されている。もしそうならば、意味をいちおう切り捨てた語形カクに注目すれば、分断されたように見えるカクも、実は連続することになるのかも知れない。こう考えると、石川・福井や、67図で広島などに現われるカクは、こういった他の意味分野のカクが、この意味分野に「しみ出した」ものかも知れない、とも考えることができる。つまり、語形としてはカクは、広く連続した分布を持っている可能性がある。

三浦半島・群馬などのニナウも、67図で触れたように、他の意味分野でのニナウの存在を暗示するものではないであろうか。

カタグ・カタグルは、66図、67図と比べて、その領域がいちばん狭い。カツグ・カズクの類は、愛知からカズクがまったく消えているほかは、ほぼ66図、67図と一致する。これらについては、66図の説明に詳しい。

今、66図、67図、68図を比較すると、同じような語形が、各図に現われ、分布のほぼ一致するものがある一方、異なった分布を示すものもあることがわかる。一地点一地点の対照、組み合わせの詳細については、別に報告する予定であるが、たとえば、東日本では、三つの意味分野を区別しないで、同一語形で表現する地点がほとんどである。区別しないという点からは、島根・鳥取などのイナウ地域、中国地方中部・九州西部・対馬などのカタグ・カタグル地域も同様である。その他の地域は、それぞれ何らかの語形で三つを、少なくともうち二つを区別している。この場合、図式的に表わして、ある二つの要素からなる意味の構造に、二つの言語体系の間で、 $A : B = C : D$ という対応をしている場合は、それなりに解釈は比較的容易であるが、 $A : B = B : C$ というように、同じ語形が異なる言語体系の中で、異なる役割りを果している場合には、その解釈に注意を要する。

この3枚の図を比較すると、このような分布が、多く見られる。これを解釈するには、地図を1枚ごとに切り離して、言語地理学的に見るだけでは、もちろん不十分である。3枚を重ね合わせて、三つの意味分野で語がどのように意味を分担しているかを見ながら考えなくてはなるまい。同時に、隣接する意味分野にはどのような語があるか、それらがどのような分布を示すか、なども合わせ考えることが必要となろう。今、これらの図を比較して、具体的な解釈を引き出すことはあえてしない。言語地理学の新しい問題を提起するにとどめておく。

69. かぞえる(数える)

鉛筆を数える場合について描いた地図である。このような場合、東京のことばでは、カゾエルと言うのがふつうで、カンジョオスルは俗語的、しかもどちらかと言えば計算するというニュアンスがはいっているようである。したがって、この地図において標準語はKAZOERUだけと見なし、併用の場合、この語形に<上品、新しい、共通語的、まれ>などという注のある場合、この語を地図から除いた。KANZYOO SURU にそのような注があっても、併用として地図に示してある。

大きく言って、緑で示したカゾエル・カズネル類が全国的に分布し、赤で示したカンジョオスル類が関東を中心とした地方に、空で示したヨム類が近畿を中心とした地方および沖縄に分布している。ほか、少数ではあるがミル類が瀬戸内海方面に見られる。

各類とも、カズオという目的語部分を前に伴って報告された地点がかなりあり、とくにヨム類とミル類にはそれが多かった。これらの動詞は意味範囲が広いので、目的語による限定を必要とする場合が多かったのであろう。しかし、調査対象が動詞部分に限ると解釈してそれだけを報告した被調査者あるいは調査者も多いと想像されるので、同一のレベルで比較するため、目的語部分を切り捨てて作図してある。また、カズオという目的語部分の有無については、上記のヨム・ミルの場合のようにあとにくる動詞による相違のほか、地域差らしいものは認められていないことも、この部分を地図に載せなかった理由である。詳しくは、『日本言語地図資料』を参照。

カゾエル類は、カンジョオ類とヨム類に分断されて、東北・中国・九州など比較的辺地に分布していることから、もっとも古いものと思われる。しかし、関東およびその周辺部においては、カンジョオスル地帯の中で、カゾエル類が平野部や街道筋に分布していることは、この類が新たに標準語として復活し広まりつつある様子を示していると言えよう。事実、この地方で、併用の場合、カゾエル類が新しい(地図では除いてある)とか、カンジョオスル類が古いとかの注が多く見えている。福井などのものは、ヨム類を分断して新しく発展したものである。

KAZOERU など KAZO~は 地図で丸系統の符号で

示し、それに対して、KAZUERU など KAZU~は三角系統の符号で示した。KAZEERU などは KAZOERU などからの音変化か、KAZUERU などからの音変化か不明なので丸と三角の中間の符号で示しておいた。KAZU~は西日本に広く分布しているが、語源的に「数」から出た古いものであるとも、また、本来 KAZO~であったものが「数」からの類推により生じた新しいものであるとも、二通りの歴史が考えられる。

カゾエル類のうち KAN~のように Z の前に N のはいっているものは、中に小さい穴のあいた符号を用いて示した。このうち、KANZYOERU、KANZYOYURUなどは、分布から見て、カンジョオスル類への類推によるものかと思われる。KANZERU もカンジョオスル類との関係で生じたものであろうか。このようなカンジョオスル類への類推のほか、東北地方などでKAN~と表記したものの中には、有声音の前に、軽い鼻音が伴うが、音素としてはNを形成していないものとか、あるいは、東北地方ならずとも、ある時代にZの前の軽い鼻音であったものが、のち音素として独立したNとなり、Nを持つ語形に固定したものもあると思われる。九州などのKAN~は、付近に分布している KANNERU などと関係があるかとも思われる。

カズネル類は緑のうちでも白ぬき符号で示したが、富山・中国・九州など離れた三地域に分布している。この語形は、「東」と「東ねる」などと同じように、「数」という名詞に「ネル」をつけて動詞化することによって生じたものであろう。富山のネル語尾は、66図、67図、68図にも現われる。このカズネル類とカゾエル類との歴史的な関係は不明である。KANNERU などは KAZUNERU からの音変化によるものと思われる。

カンジョオスル類は、分布からみて、新しくカゾエル類の中に発生して広まったものと思われる。これとヨム類との歴史的な関係は不明である。九州の旧延岡藩領にだけこの類が離れて分布しているのが目立つが、この由来についてもよくわからない。この類は、カンジョオにスルがついているものであるが、スルに当たる各方言変種は、他のスルを持つ項目 55図、77図、88図、90図などと符号を統一してある。カンジョオの部分の最後が、KANZYOO などのように長音の場合と、KANZYO などのように短音の場合とでは符号の向きを変えることによって区別をした。北海道南部・東北北部は、長音が規則的に短音になる地域であるが、それ以外の地

域でもカンジョオスル類の分布するうちの比較的周辺部でカゾエル類に接する地方に短音が多いようであることは興味深い。この現象は長音の音節の直前にNを持つ点、「本当」を[honto]と短音に発音する傾向と似ている。

ヨム類は、古典などにある古い用法に通ずるし、近畿のほか、離れて四国西南や沖縄に分布することをも考えると古そうでもあるが、近畿を中心としてまとまった分布をしているものは他の語形より新しそうでもある。ヨムという語形は、他の意味ならば、各時代を通じて多くの地方で使われていたと思われるが、その意味がある時代、ある地方で、この「数える」の意味にまで広がることもあって、このような分布を示しているものかとも考えられる。北陸地方にYONが分布するが、この地方の方言は五段活用動詞のうち、ナ行、バ行、マ行などの終止・連体形の語尾がンとなる傾向を持つためである。

この図は鉛筆を数える場合について質問した結果である。調査の際は、この項目の直前(質問番号092)で、金を数える場合についても質問したが、その結果は、この69図とはほぼ同じ分布になったので、金を数える方の調査は前期5年でうち切り、地図の印刷を割愛した。

金を数える場合の分布が、この69図と比べて異なる点だけをあげておく。調査地点数が69図の6割しかないのに、SANNYOO～が北陸・中国・四国・九州などに40地点近くも現われている。SANMIN～も、沖縄本島付近と八重山群島大部分・奄美の一部に及ぶ勢力を占めている。カンジョオスル類が岩手の海岸部から宮城にかけて、三重・和歌山・京都北部・兵庫と岡山の海岸部・島根・四国・佐賀・長崎・鹿児島西部などにやや増えている。両項目において相違の見られるこれらの地方は、鉛筆を数える場合と金を数える場合とを言い分ける傾向を持つとも言えよう。さらに、このほかの物を数える場合や、数え方の違いについて調査をすれば、また若干異なった分布が現われるかとも思われる。

70. かす(貸す)

全国に同種の語幹を持つ語しか分布していないが、これをカス、カセル、カラスの三つの類に分けて、それぞれ別色で示した。

カス類は全国的に広く分布している。これは標準語と同様に五段活用をしているものと思われる。KASUの

中には、SUの音が[sū][θ]などのものも含まれている。KAHIは、カスの中の音変種と認めた。

カセル類には、下一段的な活用をされると思われる中部地方や山陰のKASERUなどと、下二段的な活用をされると思われる九州のKASURUなどが含まれる。KASERUのSEの音が[e]であるものの分布は、第1集の7・8図とはほぼ一致する。KASEEはKASERUからの音変化であろう。九州のKASUI、KASUTはKASURUの音変種である。KASUUもKASURUからの音変化であろう。山陰に1地点だけあるKASURUは下二段活用をしているものかとも思われる。静岡に3地点だけあるKASIRUは上一段的な活用をしているものかとも思われるが、発生はKASERUからの音変化か、あるいは五段活用の連用形の類推によるものかよくわからない。

3地域に離れて分布するカセルは、各地でそれぞれ独自に同じ傾向が生じた結果であろうか。それともある時期に連続して広まっていたものが、現在3地域にだけ残存しているものなのであろうか。

中部地方に帯状にあるカセルは、その東側では平野部などに勢力があって、新しい発展と思われるが、西側では、山間部などに多いので残存的な分布と思われる。すなわち、この帯が西から東へと移動していることになる。中国地方のカセルは、北側では、進展しつつあるものかも知れないが、南側では残存的な分布を見せている。中部地方のものが中部山地から南北に広まったとか、中国地方のものも中国山地から広まったとは考えられない。おのおのもっと文化の高いところ、たとえば濃美平野から中部山地へ、山陽から山陰へと進んだものと思われる。さらに想像すれば、両地域のカセルは昔は連続していたものと考えることができるとも知れない。ただ、文献での傍証を得にくいこと、近畿地方山地にカセルの残存的な分布の見られないところにこの推定の難点がある。ところで、国語調査委員会『口語法分布図』31図によると、使役の助動詞は、近畿地方では「ス」であり、中国地方と中部地方は「セル」であって、カス対カセルの分布と平行的な分布を示している。「貸す」のように相手に対して働きかける動作は、もっと念を押す気持ちから使役の助動詞からの類推が働くことも自然と思われる。その気持ちを表わす語形が近畿に発生し、東西に及び、使役がセルの地域では、カセルを生み出して中部地方を東進し、中国地方を西進または北進したものと

考えられよう。

九州の KASUT をはじめ KASURU に当たる諸変種は分布の様子からみて、古いものの残存ではなく、鹿児島市あたりで独自に発生したものおよびその変種が周囲に広まったものであろう。この発生は、やはり上記のような使役的な表現（『口語法分布図』31 図によれば、この地域は、使役の助動詞は「スル」である）をする気持ちと関係があるかも知れない。この地域は多くの動詞語尾が促音になっているので、その類推により、本来五段活用のもの語尾の後ろに促音が添加して生じたとも考えられる。

カセルの歴史は、これと対をなす 71 図「借りる」におけるカレルなどと、活用の仕方の上で、関連があるかと思われるので、71 図の説明で両項目の活用を対比しながら考えてみることにする。

沖縄のカラス類は、「相手に借りるようにさせる」という使役表現から一語へと固定したものかと思われる。HWAA~, KOO~ などは、KARA~ の音変種であろう。

なお、調査の際、単独で「貸す」という言い方を求めているので、「カシテヤル」など補助動詞をつけて寄せられた数地点の報告は、終止形にもどして整理した。この～ヤルについてはまったく地域的な傾向が認められない。

71. かりる(借りる)

東日本と山陰に緑のぬりつぶし符号で示したカ Ril 類、北海道南部・新潟・東海・山陰東部などに緑の中ぬき符号で示したカレル類、西日本に赤で示したカル類が分布している。さらに、それらとまったく異なる類として、少数ではあるが、山梨に紺で示したイロオ類が分布している。

カ Ril 類は上一段活用をしているものと思われる。山形では、終止形は [karirû] で、連用形に補助動詞の「～くる」がついた場合は、[kaddekürû] であるとの注記のあるものが 15 地点見られた。東北の日本海側に分布する KAIRU は、KARIRU の語中の R が脱落したものであろう。KAIRU は、音声としては、[kajirû], [kaurû], [kaerû] などを含んでいるが、多分 KARIRU からこの順序で変化したものであろう。

[kaerû] の中には、場合によって KARERU から

の変化したものが含まれているかも知れない。新潟の KANRU は、分布から見て、KARIRU からの変化とも KARERU からの変化とも考えられるが、他の動詞、たとえば 74 図「くれる」などで、～RERU に当たる場合に～NRU が現われているので、これは KARERU からの変化である可能性が強い。なお、この地点では、「～てくる」につづく場合も、[kantekuru] (借りてくる) であるとの注があった。

カレル類は下一段的な活用をしているものと思われる。この類は、北海道南部・新潟・東海および伊豆諸島・山陰東部にまとまった分布を見せるほか、東北にも点在する。これは、古い形の残存というより、各地でカ Ril から変化した新しいものと思われるが、「借りる」ということが、相手から物を受ける受動的な動作であるため、受身の助動詞の「レル」からの類推により生じたものかも知れない。これと、70 図「貸す」におけるカセルとの関係については後述する。

カル類は五段活用を示すものと思われる。補助動詞のついた [kattekuru] とか、過去形の [katta] を普通に用いるとの注が多く、とくに、[kattekuru] しか報告されていない地点が、西日本に若干あったが、分布を参考にして KARU に入れてある。九州の KAA は KARU からの音変化であろう。奄美・沖縄の諸語形はほとんどカルに対応するものであるが、KUIKUN, KUIKUU は「～くる」に当たる補助動詞のついたまともと思われる語形をそのまま掲げておいたものである。

カ Ril 対カルは、分布だけを見るとカルの方が新しいとも思われるが、中央の文献に古くはカルしか見当たらない。もしそうであるとしても、文献時代にはすでに、カルに変化していたことになる。むしろ、昔はカルであったが、のち、東国や出雲でそれぞれ独自に一段化の傾向が起きてカ Ril を生み出した可能性が大きい。この傾向は、「借りる」だけでなく、「足りる」のタル対タ Ril、「飽きる」のアク対アキルなど、一連の語彙におけるものと関連して考えるべき面を持っているかと思われる。もっとも、このようにカルとカ Ril の発生の歴史的な関係を推定することはわずかしいが、佐渡・新潟北部・富山のカルは、海上交通によって新しく伝播したものと言えよう。なお、この図は、東西に二分された分布を示すには、北海道に西の勢力の及んでいない点珍しいと言えよう。西日本のカル地域に散在するカ Ril の新古および、もし新しいとした場合、共通語の侵入か、独自

の活用変化か、などについては不明である。併用の場合、カ Ril の方に<新しい・共通語的>などの注記のあるもの(したがって、規則により、地図ではカルの単用になっている)が3地点しかなく、カルの持つ西日本共通語的性格のかなり強いことが知られる。

イロオ類は山梨にだけ見られるが、ここは、ワ行五段活用動詞の語尾の連母音 ~AU, ~OU に当たるものが ~OO となる地域であるから(76 図「もらう」、65 図「背負う」を参照)、もとの形はイラウまたは、イロウであると思われる。『物類称呼』には「物を借るといふ事を、甲斐国にて、いらうと云」とある。イロオはカレルとの併用が多く、そのほとんどにイロオが古いことばであるとの注が見え、廃語となる一歩手前の状態を思わせる。

なお、報告された形のうち、補助動詞がついていた場合、その部分を除いて、終止形にもどして地図に示した点は 70 図と同様である。

語形と分布の面からみて、70 図「貸す」におけるカス・カセルなどと、この 71 図「借りる」におけるカレル・カルなどとは、平行性があると思われるので、つぎに、70 図「貸す」と 71 図「借りる」における諸語形を対比して、それらの発生や変化の原因や過程を、この観点から考えてみようと思う。

「貸す」:「借りる」

- ① KASU : KARU 北陸・近畿・四国・中国南半・九州(鹿児島を除く)
- ② KASU : KARIRU 関東・東北・隠岐
- ③ KASERU : KARU 佐渡・北陸のごく一部・中国東部の山地・鹿児島
- ④ KASERU : KARIRU 長野・岐阜・出雲
- ⑤ KASERU : KARERU 新潟・静岡の東半分・近畿北部・山陰東部
- ⑥ KASU : KARERU 北海道南部・東北北部に点在・山梨
- ⑦ KARASU : KARU 沖縄

周囲論的に考えれば、非常に古い時代に、②カス:カ Ril であったが、活用の面で不均衡なため、カ Ril が五段化して、①カス:カルとなって全国に広まったと推定できるかも知れないが、文献に現われる語形の順序を重視すれば、むしろ古くは、①カス:カルであったが、のち何らかの原因によりこの均衡が破れて、山陰や東日本では、②カス:カ Ril が生じたと考えの方が妥当かと思

われる。のち、これが「貸す」の使役意識、また「借りる」の受身意識による、使役・受身の助動詞からの類推とか、「貸す」と「借りる」の活用を平行させる心理などにより、⑤カセル:カレルが近畿地方の東西に広まるのであるが、その直前の段階として「貸す」の方が早く下一段化して発展したところが多いらしく、この段階が①の地域に及ぶと、佐渡・中国山地の③カセル:カルとなり、②の地域に及ぶと、長野・山陰西部の④カセル:カ Ril という不均衡を生じている。この逆すなわち、「借りる」の方だけが下一段的である⑥カス:カレルのうち、山梨のものはカス・イロオであったが、イロオの生命が弱いため、隣接する静岡からのカレルに侵されたものと思われるし、そのほか、北海道南部と東北に点在するものは、母音の I が E に近いため、カ Ril がカレルとなりやすいものと思われる。つまり、⑥のように「借りる」がさきに下一段化することは、中央からの全国的波及というよりは局地的な現象と思われる。

なお、沖縄の⑦カラス:カルは同一動詞の使役表現と普通表現との違いによる対比ということになるが、この歴史はまた別に考えるべきものと思われる。

おもな過程をまとめると、①が③になり、②が④になるという段階を経たと思われるが、結局は⑥となって発展し、のち、①が西日本共通語として、②が現代標準語として、復活し広まっているということになる。

72. カッテクルを“買って来る”の意味で使うか、“借りて来る”の意味で使うか

この項目は、質問の際、二つの意味をあげて選ばせたという点で、一般の S 式項目と異なっており、C 式と言うこともできる。すなわち、ある意味で使うかどうかをそれぞれ吟味するというより、どちらかの意味で使っていると思われるが、そのどちらの方かという質問になり、いちおうどちらかを選んで回答したものの、現実にはすっきり割り切れない場合も多かったと思われる。事実、報告に種々の注のある場合が多く、それが、どちらとも割り切れない場合は、凡例にそれぞれ見出しを立ててその程度を示したが、注のないものの中にもそのような程度のもが含まれている可能性がある。

“買って来る”の意味で使う地域は、東日本と山陰で

ある。この方言では、

買う	カウ	買ってくる	カッテクル*
借りる	カリル** カレル	借りてくる	カリテクル*** カレテクル

のような組み合わせであると思われる。したがって、これは71図「借りる」におけるカリル・カレルと同じく緑で示した。東北北部では「買ってくる」をカッテクルとは言わないが[kateküürü]とならば言うとの注記のある地点がかなりあった。この地域では促音が十分に発音されないという音声的な特色を考えてカッテクルと見なした。山形内陸部では「買ってくる」は[katteküürü]、「借りてくる」は[kaddeküürü]または[kaddseküürü]との注のあるものが10地点あった。これは71図でも連用形に[kadde] [kaddse]の注の見られた地域である。この地域はKARITEKURUなどの場合、Tが規則的に有声化[d]となる。その後RIが促音化しても[d]が有声のまま保たれたので[kaddeküürü]となり「買ってくる」の[katteküürü]と区別されているらしいので、[kaddeküürü]をカッテクルとは認めなかった。

「借りてくる」の意味で使う地域は、山陰を除く西日本である。この方言では、

買う	カウ	買ってくる	コオテクル*
借りる	カル**	借りてくる	カッテクル***

のような組み合わせであると思われる。したがって、これは71図「借りる」におけるカルと同じく赤で示した。71図と72図において赤の符号の分布地域は一致するはずであるが、三重県東北部にだけずれが認められる。あるいは、71図のもの(質問番号099)はなぞなぞ式質問であるから、いま普通に使っている形しか思い出せなかったが、72図のもの(質問番号101)はそのあとで語をあげて選択させたため、方言的な用法も思い出し、その方を選んで回答したためかとも考えられる。いずれにせよ、境界地帯の不安定な様子を反映しているものと思われる。

「借りてくる」の意味のほか、まれに、または最近「買ってくる」の意味にも使う、ということはいわば二語併用である。本来カッテクル(借りてくる)のところになんか新しくカッテクル(買ってくる)という標準語形がはいってきたためであろう。したがって、地図中の符号は、本来の方言の用法である「借りてくる」と同じく赤を用い、符号の形は新しい用法である「買ってくる」に似たものを用いた。これは西日本でも近畿中心部で比較的標

準語に接する機会の多いところ、佐渡・三重のように両者の接触地帯に見られており、また北海道にも2地点現われている。71図で北海道には西日本式のカルがまったく見られないことは一致しない。これは71図とは活用形が違うという事情もあるが、この項目の方は語形と意味とを与えた調査なのでまれなものも現われたのであろう。この2地点とも、被調査者の両親が四国(愛媛と高知)の出身であった。

「どちらの意味にも使わない」というものは紺の符号を与えたが、これは新潟・山陰・沖縄などにまとまった分布地域を見せている。この地方の方言では、カッテクルという語形がないのであって、沖縄以外では、

買う	カウ	買ってくる	コオテクル* カアテクル
借りる	カリル** カレル	借りてくる	カリテクル*** カレテクル

のような組み合わせであると思われる。これはワ行五段活用にウ音便のある等語線と、「借りる」をカル、「借りてくる」をカッテクルという等語線とが一致していない、すなわち、ウ音便の等語線の方が張り出しているために生じたずれの地帯に見られる現象ということになる。等語線がずれる場合、この逆になって、「買ってくる」でウ音便の線が張り出さずカッテクルであるのに、「借りる」カル・「借りてくる」カッテクルの方が張り出している場合、つまり両方をカッテクルというところは多少はあるが、ずれの地帯としてまとめることのできるような広い地域はない。これは同音衝突をさけているためと思われる。標準語の「買ってくる」カッテクルが西日本などの「借りてくる」カッテクル地帯に侵入する場合、このような同音衝突があるため、なかなかはいりにくいものと思われる。

この「買ってくる」カッテクルが侵入しやすいところは、新潟・山陰などの、カッテクルという語形をまったく持っていなかったところへということになり、これらの地域には地図で見られるように、どちらの意味にも使わないが「新しく「買ってくる」の意味に使うようになった」が分布していることは当然と思われる。

奄美・沖縄では、「どちらの意味にも使わない」とした地点が多かった。これらのうち、語形の注記のあるものを組み合わせると大体次のようになる。

	買ってくる	借りてくる
喜界島	ho'tisu:ri	ha'tisu:ri

沖縄本島北部	ho:tiΦuin	ka'tiΦuin
	ho:tikuN	kattikuN
	k'ɔ:tiku:N	ka't'ik'u:N
沖縄本島南部	ko:titʃu:N	ka't'ik'u:N
	ko:titsun	katitsun
宮古	kaiku:	kariku:
	kaiΦu:	kari:Φu:
	kaitsi(:)	karitsi(:)
八重山	kaikun	kuikun
	ke:kun	karikun

宮古・八重山以外では、カッテクルに近い形は、どちらかと言えば、“借りてくる”の意味に使われていると見てよいし、71図によってもカル類の分布しているところであって、西日本的な組み合わせを持っていると思われる。しかし、語形がカッテクルという形とは離れているし、語形注記がなく、ただ「どちらの意味にも使わない」との地点が多いので、これらの注記のあったものもそれに含めて示した。奄美で注記のない「“買って来る”の意味に使う」、「“借りてくる”の意味に使う」が数地点あるが、上記のような琉球方言特有語尾の対応を考えてカッテクルと理解し回答したものか、それらとは別に標準語や西日本共通語が新しくはいったものを、そのままの形で使っているものか不明である。しかし、その周囲に「“買って来る”の意味に最近使うようになった」や「“借りてくる”の意味に最近使うようになった」が分布しているので、後者の可能性が大きいと思われる。

* 国語調査委員会『口語法分布図』22図(ハ行四段活用ノ語ノ連用形)による。

** 71図「借りてくる」による。

*** 71図についての説明文(29ページ)に述べてある。

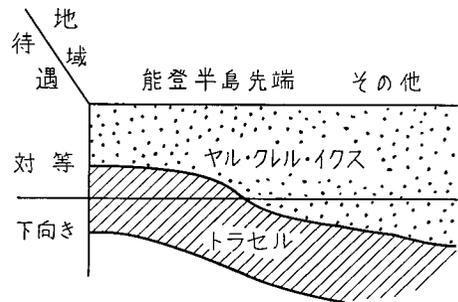
73. やる(遣る)

74. くれる(呉れる)

この2枚の地図についての質問は、調査の場ではなかなかむずかしい項目であった。適当な答えを得ているかどうか、自信の持てない地点が多かった。しかし地図を見れば、大体に各方言語形の分布領域が現われ、大過ない結果を得たと信じられる。

物の授受については、待遇表現が密接にからまってく

る。たとえば、73図については、ヤルとアゲルの関係、74図については、クレルとクダサルの関係などである。この地図では、とくに対等の授受に関するものだけを図示してあるので、注意してほしい。つまり、報告があっても「丁寧」とか「目上に対して」とか「上品」とか「女性語」とか「子どもに対して」とか「卑俗な言い方」とか「目下に対して」とか「下品」とかの注記のあった語形は、地図から除いてある。これは作図の技術上からやむをえない処置であるが、しかし、連続した言語地層を示す点で、あるマイナスを覚悟しなければならない。たとえば、73図 TORASU は、この地図では能登半島に3地点しか認められないが、もし注記のあるものをも援用すれば、北陸には TAASERU を含めて、さらに数地点のトラセル類が現われる。このことは、トラセル類が、



上図のように、能登半島先端部以外にも、待遇上別の層にはあるが、連続して存在することを示すのであろう。この地図では、対等の場合のみを採用したため、3地点のみが登録され、他は切り捨てられたわけである。73図については、ヤルとクレルに関して、同様な、そしていっそう大規模な関係が予想される(下向きにならクレルと言うなど)。73図アゲルも、「上品」とか「目上に」とかの言い方を採用すれば、もっと明瞭な分布領域が現われたかもしれない。本図を見るに当たっては、以上の点に留意しなければならない。この地図から除いた語形、およびその注記については、『日本言語地図資料』に記録してある。

73図、74図では、符号を統一してあるので、比較しながら見るのが望ましい。

概略的に言って、国の中心部では、ヤル・クレルの区別が、はっきりしているが、国の北端と南端とは、両図ともにクレルであって、区別しない言い方の域が広がることがわかる(他の語形については、あとで述べる)。

このことは、標準語のような、ヤルとクレルとを区別する用法(体系)が新しいものであり、クレル一語で両意を表わすのが古い用法(体系)であることを、想像させる。すなわち、73図のヤルは国の中心で使われはじめ、それが東西に進んで、新体系の拡大を押し進めたものと考えられる。新体系への移動は、意味の分化を起こすことであるが、これは、授受に関して方向ばかりでなく、動作の主体を、動詞の内部に含ませようとする力(そうした意識の働き)と平行すると見られる。まったくの想像であるが、行為者を明示するかどうか(たとえば人称代名詞をよく使うか、あまり使わないか)についての習慣の変化が、からまっているかも知れない。

74図において、九州にヤルが存在することも、以上の推定を裏付けるものと考えられる。この一見奇妙な意味のずれは、次のようにして生まれたのではないか。すなわち、当地方は、元来73図、74図の両方の意味をクレル一語で表わしていた。そこに、73図の意味でヤルが侵入してくる。このことは、単に73図に限られた問題ではない。旧体系への、新体系の圧力を意味する。そこには、当然混乱が起こりうる。

ある地域では、新体系をそのまま受け入れたであろう。しかしかなりの地域では、新しいヤルを、旧体系なりに受け入れる事態が想像される。つまり、ヤルが73図の意味に限られる点をうまく受け入れることができず、在来のクレルに代わる新しい語形として受け入れる場合もありうる、というわけである。73図、74図を通じて赤の符号の見られる地点は、ヤルを、こうして受け入れた地点と考えられる。またある地方では、逆に、すなわち73図に在来のクレルを残し、74図に新来のヤルを受容するといった特殊な受け入れ方をした地点もあるかも知れない。新体系をどうにか受け入れはしたが、逆転した形で受けとめた状態、と考えることができる。

東国にも、九州と比較すればわずかであるが、群馬などを中心に、同様な混乱が見出されることは、興味深い。国の東西に、平行的な現象が見出されるわけである。これは、この混乱が、両体系の現在の接触地域に見出されることを示している。

ヤルが新しい発生なら、このような混乱は、もっとあちらこちらで見出されていていい、という考え方もあろう。確かに、そういった状態が、過去には存在した、と想像される。しかし、現在新体系の分布する地域内(ことに中心に近い地域)では、中央からの影響は繰り返し及ん

だはずである。それゆえに、混乱も、いつしか影を消したものと理解される。そして現在は、新体系と旧体系との接触地帯に、混乱がわずかに残存していると考えるのである。

ヤル・クレル以外で注目される語形には、次のようなものがある。

73図では、北陸を中心に見られるヨコス(イクス)、能登半島先端のトラス(沖縄にも同類の語が認められる)、東関東と男鹿半島、および北海道渡島半島の西岸に見られるダス、沖縄島中部に見られるイイラシユンなどである。

74図では、まず山陰地方に見られるゴス(ゴセル)、それから73図と共通するもので、北陸・関東・東北に点在するヨコス(イクス)、東関東と北海道のダス、沖縄島中部に見られるイイラシユンなどをあげられよう。沖縄には能登半島だけにあったトラセル類のトッラシユンが現われている。東北(岩手・山形)その他にモラウが見られるが、これは回答者の誤解に基づくものであろう。

これらのうち沖縄に関するものは、両図を比較することによって、ほとんどの地点で両図同語形であることがわかり、語形はいろいろであるが、体系としては、前述の旧体系、九州の南部に連続するものであることがわかる。クレル類は、さまざまな語形をとっているが、分布の上から、これが元来行なわれていた語類であろう。沖縄島に見られるイイラシユンはイイユン(『沖縄語辞典』'iijun もらう)の使役形と考えられ、分布から見てある時代に中央(沖縄島南部の首里・那覇地区)で行なわれ、それが島内に伝播したものであると思われる。現在の首里・那覇は KWIYUN であるが、これは、いったんイイラシユンになったけれど、本土方言の影響によって、ふたたびクレル類にもどった姿と推定される。沖縄北部のトッラシユンは、在来のクレル類とイイラシユンとが衝突し、その結果生じた語形ではなかろうか。本土のトラスとは、直接の関係はなかろう。73図のみに現われる NEERYURI (NEERYUN)、73図、74図ともに現われる GEESYUN は、ともに1地点だけであって、よくわからない。

73図で能登の先端のみに見られるトラスは、この地域がヤル・クレル・イクスの混交地帯であることから、おそらくこの地域で新しくこの意味で採用された表現と考えられる。

本土の諸語形のうち、74図に主として現われるゴス

(ゴセル)は、ヨコス(イクス)に関連がある語形と思われる。もしそうだとすると、このヨコス類は、両図を複合的に見た場合、近畿中心部には見られないが、その両側に存在する、ということになる。地点数から言えば、74図の方に顕著である。

この語類については、次のように考えられる。すなわち、ヨコス類は、ある時代、74図の意味で、近畿地方に使われ始めた語形である。しかし、これは、一時的な現象で、まもなく衰える。現在は語形をさまざまに変えつつ、近畿周辺にわずかに残存するのみである。一部は、73図の意味に転化した(意味の転化については、ヤルの場合の説明で、わかんと思う)。

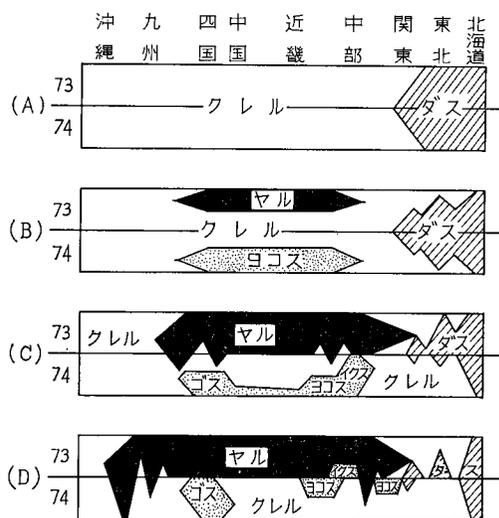
主として73図に見られるダスについては、次のように考えたい。まず、北海道におけるこの語の分布に注目しよう。これは、かなり古い時代に、この地域で使われ始めた語形と考えられる。この地域が、北海道でもっとも古く開けた漁場の分布と一致しているからである。このダスが、男鹿半島付近から、最近伝播していったものとは、ちょっと考えにくい。74図と比較すれば、北海道と男鹿半島とのダスが異質のものであることがわかるが(男鹿半島のものは74図で姿を消す。北海道のものは74図でも同様に現われる)、この事実も、そのひとつの裏付けとなる。ダスは、過去のある時代、少なくとも東北北部に、さらに広く分布していたのではあるまいか。ここで、男鹿半島のダスを東関東のダスと関連づけることは、あながち強引とは言いきれない。ダスは、東国一帯に広く分布していたものと考えられる。

さて74図に見られるダスは、現在主として73図に見出される語形ではあるが、元来は、73図、74図の両意にまたがって使われたのではないかという考えが浮かんでくる。

以上の推論をまとめると、次のようになろうか。古く東国には、ダスが73図、74図両方の意味にまたがって広く分布していた。この時代に北海道への伝播が起こる。そこへまずクレル類が侵入してくる。しかしこのクレルは73図、74図の両方の意味にまたがるものであるから、まだ意味の分化は起こらない。ダスは次第に後退して行く。さらに73図の意味を持つヤルが東進してくる。このヤルの侵入は、前述のとおり新しい体系の侵入を意味する。また、動詞の中に動作の主体を強調しようとする力の侵入でもある。一方のクレルは、74図の意

味に限定されつつ、ヤルとともに侵入を続ける。この時、ダスに意味の限定が起こる。その結果東国のダスは、ほとんど73図の意味に限定され、他方、使用地域も男鹿半島・東関東に限られる。わずかに東関東と北海道とは、73図、74図両意にまたがる本来のダスが残存する。

以上、ヤル・クレル・ヨコス・ダスに関して述べてきたことを、まとめる意味で略図によって示せば、下のようになろう。A, B, C, Dと順に変化したものと考えられる。



なお、この地図を真に理解するためには、前に述べた、さまざまな待遇における種々の表現の詳しい調査が必要であると同時に、補助動詞的用法の調査との比較が望まれるが、現在は、この段階に止めなければならない。さらに、行為者を明示するかどうか(たとえば人称代名詞の使用)についても、詳しい調査が望まれるが、今のところ、いたしかたがない。

さらに、63図「ステルを“紛失する”の意味で使うか」の説明でもちょっと触れたように、日本における所有意識の成立の問題も、考慮しておく必要があるかも知れない。

75. アズケルを“あてがう”の意味で使うか

まず質問文に注意する必要がある。質問番号097である。別に、実際の調査に関しては、この地図集に載せる

ことは割愛したが、次のような質問もあったことを、注意しておこう。「こんなふうには使いますか。よく働いたからほろびにお金をあずける。お金を与えるときにです」(質問番号098)。つまり、097の質問では、とくに「子供にあてがう」といった意味について、あずけらうかが問題になることが明らかになる。言い換えれば、この地図では、単なる「与える」(一般)が問題になっているのではない。

それにしても、この097という質問は、むずかしい項目であった。これは、地図下欄に示した質問文では、意味の切り取り方を十分に伝えることができなかつたことに、原因があったのかも知れない。あるいは、この質問文が、各地点の言語を、適切に切り取るためには、不適切であったと言い換えてもよからう。また、質問文のアズケルが、どの程度の語形変種までを含めるかにも問題があったかも知れない。たとえば、アツケルなど。

この地図を見る前に、割愛した質問番号098についての調査結果を、概観してみよう。この場合は、第3年度までで調査をうち切つたために、地点数の総計は75図と比較して少ない。しかしその割合をも越えて、「使う」と答えた地点が、この質問番号097に関する地図と比べて、格段に少ないことが注目される。地域的に見れば、青森・秋田・新潟・関東7都県・長野には、まったく見られない。北海道・岩手・宮城・山形・福島・静岡には、わずかに使うと答えた地点が見られるが、多くとも全地点の三分の一以下で、この75図と比較して、劣勢であることには変わらない。このことは、どの程度の語形変種までを含めるかの迷いを越えて、やはり097と098の質問文の性格の違いに由来すると考えられよう。

さて、この75図を見てみよう。いわゆる親不知・浜名湖線を境として、東西が截然と分かれていて、注目される。この線以東では、秋田・南関東から長野・静岡にかけて、および佐渡に例外が認められるが、他の地域には、ほぼ一様に赤の符号が分布していることがわかる。ところで、赤の符号とは言うが、実は6種類の区別がある。このうち「意味用法に限定がある」の具体的内容は、次のようなものである。

持たせておくの意

軽いものを与えるときに使う

ぞんざいに言う場合、目下のものにわたす場合

これらは以上のような積極的な注記があったために、

特別の符号を与えたわけであるが、例からもわかるように、質問の趣旨を明確にしたと考えられるものが多かった。とくに別符号を与えなくても、よかつたかも知れない。なお、この点について詳しくは、『日本語地図図資料』を参照。

赤の符号のうち注目したいことは、「古く使った」が案外少ないことである。地図を見ると、赤の符号の分布は、東日本全域にわたって、必ずしも圧倒的でない。すなわち、どこでも、紺の符号と混在している。このことから、この表現が、現在退潮しつつある言い方ではなからうかという考えが、いちおう浮かんでくる。しかし「古く使った」という答えは、案外に少ない。「聞く」「まれに使う」がはっきりとした分布を持っていれば、まだしも退潮説を主張できようが、これらも有意な分布を示していない。そのほか「このごろ使う」という答えが、かえっていくつか見出される、ということもある。以上の点から、この表現が、東日本全域で現在衰えつつあるとは、言えそうにない。

では、なぜ赤符号が、東日本全域にわたって、必ずしも圧倒的でないのか。これはおそらく、前述の、この質問が意味の切り取り方について、必ずしも十分でなかつたという問題と、関連があろう。ある地点では、たまたま核心に触れることができ、赤の符号を得る。ところが他のある地点では、ちょっとしたはずみで核心に触れることができず、赤の符号を得られない(紺の符号が出る)、ということもあつたのではなからうか。別のことばで言えば、適切な質問文によれば、さらに赤い符号が多く得られたのではないかと考えられる。

さらに、どの程度の音変種までをアズケルと認めるか(たとえばアツケルはどうする)などの問題もからまっている可能性がある。また、用法は古くても、隣接したことばが標準語にもある——この場合“預ける”の意味ではアズケルと言う——場合は、特定の用法だけ切り出して、新古を言いにくいという事情が、からんでいるかも知れない。

ともあれ、もし西日本にアズケルということばがあるなら(おそらくあるのであろう)、西日本と東日本とは、このことばの意味にかなり大きな区別があるということになる。標準語のアズケルは、返してもらふことを前提としているはずであるが、どうもこれは西日本の用法らしい。

東日本と西日本とを分けて考えたが、秋田・南関東か

ら 静岡 にかけて(長野南部・山梨もこれに含めてよからう), および佐渡だけは, 以上と切り離して考えるべきであろう。この地域で紺の符号が優勢であることは, 質問文の不十分さ, 語形分類の不確定さを越えて, 有意味であると思われる。このうち, 秋田以外については, 西方の勢力の侵入として理解できよう。つまり, この地域に限っては, 西方の勢力によって, アズケルをあてがうの意味で使用法が, 退潮しつつあると言っているであろう。

秋田については, よくわからないと言うほかはない。日本海岸を, 西方の勢力が北上して侵入したのかも知れないが, 明確でない。北海道の西岸と関連させることができるかも知れない。調査者側に問題がありはしないか, という見方もあろうが, この地域全地点が同一調査者とは限らないから(この地域担当の地方研究員以外の調査者によるものが, 5地点含まれる), 断定することはできない。

この75図を理解するために, 73図ヤルと比較することは, あながち無意味ではあるまい。73図の内容と75図の内容とは, 確かに違うけれども, 関連はある。75図(および質問番号098の調査結果)によれば, 東日本と西日本とでは, 物の授受について, 多少ともずれがあると考えられる。このことは, 73図の説明で, 東日本では, 元来ヤル・クレルの区別がなく, 語形は, おそらくダスではなかったかと推定したことと, 何か関係はないであろうか。現在の資料からは, これ以上深入りすることはできないが, 75図で, 秋田が西日本風であることも, この視点から解釈できるかも知れない。73図では, 秋田(男鹿半島だけではあるが)に, ヤルとクレルを区別して(語形はダスとクレルであるが)西日本風なところがある。

76. もらう(貰う)

紺で示したモラウ類が全国的に分布し, ほか, 橙で示したもののうちエル類が九州西部と沖縄に見られる程度である。

モラウ類の中で, MURAU など MU~のものは, 細い輪郭の白ぬき符号で示したが, 奄美のものは共通語の O が U になっているという規則的な音韻対応によるものと考えられる。中部地方・房総半島・伊豆諸島・山

陰の MU~はこの語について個別的に各地で同じように訛って生じた新しい形であろうか。

以下, モラウ類の語尾部分の変種について述べる。この語は共通語のワ行五段活用動詞に属しており, この種の語一般の傾向を示しているであろう。この「もらう」はこの種の動詞のうちでも語幹最後の音が A のため語尾の連母音が AU となる類である。『日本言語地図』ではほかに65図「せおう」があって, それは語尾の連母音が OU となる類なので, 適宜対応させることにする。

MORARU は青森を中心とする地方に分布しているが, この形はラ行五段的な活用をしているものと思われる。これは, この地方で新しく発生した形で, 「もらった」などという連用形の促音便が「取った」「下がった」などというラ行活用の語の連用形と同じになることからの類推によって生じたのかも知れない。65図でも SYORU というル語尾が青森を中心に分布している点似ているが, 北海道の一部にまでル語尾のある点だけが, この図の分布と異なる。

連母音の融合については, MOROO が岩手・宮城・福島・新潟・関東西部・山梨・富山・石川・大分・宮崎・鹿児島・対馬に分布し, ほか近畿・中国にも少数ではあるが点在する。このうち, 新潟中部ではオ段長音の開合の区別があって, 開音に当たる「もらう」は [morɔ:] と広い [ɔ:] に発音され, 合音に当たる65図「せおう」の [fo:] における [o:] と区別されている。この地帯の MOROO が広い [ɔ:] であることと, これに接したところに MORAO が2地点見られることとは, 音声的に連続するものと思われる。

MORO は九州南部に分布するが, この地方は共通語の長音が規則的に短音になっているところである。屋久島の MOO は MORO の R が脱落して生じたものであろう。

MOROU は山梨・名古屋・四国にわずかに点在するが, MORAU と MOROO の中間的性格を持つものであろうか。あるいは, MOROO に訛ってからのもち, 終止形の語尾は U である意識が作用して, MOROU となったのかも知れない。

AU のように連母音に発音するものと, OO のように長音に発音するものとはどちらが古いであろうか。76図では AU が日本の先進地帯に拡がっており, OO が比較的辺境の地に分布しているので, いちおう AU の方が新しいと考えられよう。しかし, 連母音の融合現

象は、離れた無関係な何か所かで同じ変化をとげる可能性も大きいので、分布からだけでは結論が出せない。この分布を、国語調査委員会『音韻分布図』（明治38年）9図「『逢フ』『買フ』など波行四段活用動詞の終止・連体法の発音分布図」と比べると、今回の調査で新たに OO の見られるのは、岩手・宮城・大分だけであるが、今回の調査で新たに AU の見られる地域が、長野・福井・滋賀・奈良・兵庫・岡山・広島・徳島・愛媛など西日本を中心とするかなり広い地方に及んでいることに気づかれる。国語調査委員会のものは通信調査であって、厳密を期しがたいこと、この76図は「もらう」という一語における現象しか調べていないこと、など両図を同じレベルで比較することはできないが、それにしても、明治から現在にいたるほぼ50年の間に西日本をはじめかなり全国的に OO から AU への変化のあったことを反映するものと見てよからう。中央語で非常に古い時代は、AHU であり、それが AU となり、室町末期には OO となっていたことは文献によって知られている。上方ではそれが明治の国語調査委員会のものでは AU と OO が入りまじり、この『日本言語地図』ではほぼ AU だけとなっている。京都付近だけでなく、全国のかかなり多くの地点でこのように OO>AU という復活が行なわれつつあり、辺境ではまだ古い OO が残っていると考える方が妥当かと思われる。これは、先進地帯から書記言語の影響を受けたためとも考えられる。なお、文化的な伝播の問題と無関係ではあるが、動詞語尾は U で終わるといふ類推は常に働いていたと考えられるし、終止形・連体形以外の活用形の場合は MORA~のように語幹最後の母音が A であるから（音便形に MORO(O)-TA のある場合もあるが）、正しく AU にもどすことは比較的容易であったと思われる。

MORAA は、岩手の一部・福島・茨城・千葉の一部・伊豆・山陰などに分布する。このうち山陰のものは、動詞語尾以外でも歴史的に AU の連母音に由来するもの、すなわちオ段の開音は OO ではなく、音韻法則として AA として現われているところである。その他の地域は、この種の動詞語尾にだけ見られるとされるから、AU>AA という法則ではなく、AU>OO という音韻変化ののち、動詞にだけさきに述べたような終止・連体形以外の語幹の A からの類推が働き、OO から分かれて AA が生じたものかと思われる。

MORUU が岩手・宮城、MORU が九州に少数地点

あるが、いずれも MOROO に接した地帯にあるので、MOROO からの音変化によるものと思われる。あるいは単なる音変化のほか、終止形を U にするという文法的な類推が働いたのかも知れない。

『日本言語地図』にとりあげた項目では、ほかに56図「つくる」におけるコシラウ類(赤の符号)が、ワ行五段の AU 語尾に当たるが、その類の分布する地域における語尾の分布はこの図とほぼ一致する。

なお、この AU に由来する語尾と65図の OU に由来する語尾とを対比すると、両者とも混らず AU:OU で区別する地域、区別がなく OO:OO の地域(新潟は[o:]:[o:])、長音にはなるが OO:AA で区別する地域と大きく三つに分かれる。ただし、山梨では OO:OU で例外となるが、OU の方の音が不安定で、OO に近いものなのかも知れない。UU は76図に多く65図に少ないが、これは65図は調査地点数が少ないためであろう。なお、九州では、一般に OU に当たる音が UU となって、AU に当たる音と区別のある地方もあると言われているが、65図では九州の大部分にカルウ類が分布しているのでその区別を確かめることはできなかった。

鹿児島西北部に MORAHU が数地点分布するが、ここは67図でも INAHU が分布している地域である。このフ語尾は国語史における古い段階のもの残存かとも考えられるが、発音が [Φu] でなく [hu] であるところをみると、語尾をはっきり切って発音することからこのような現象が新しく生じたとも考えられる。あるいは語末母音の無声化によって、子音がかえってはっきりあらわれたとも考えられる。

エル類は「得る」に由来するが、九州・琉球列島ではモラウ類より古そうである。この類は、各分布地点の文法的・音韻的事情により多くの変種を生み出している。

トル類は、73図、74図、75図で指摘したように、授受関係の認識の未発達を思わせる。沖縄にある SUIN の S は T に対応するこの地点の方言音である。

クレル・ヤルなどは、立場や主語の認識が不十分のため生じた被調査者の誤解ではないかとも思われる。

なお、この項目は、対等な人間関係の場合を調査したもので、敬語とか卑語とかの注のある語形は地図から除いた。また、注がなくとも、イタダク・チョオダイスルなどは常にモラウ類との併用でしか記されていないので、これも敬語形と見なして地図から除いた。地図から除いたこれらの敬語形には、地域的な傾向は認められ

なかった。

この「もらう」は、補助動詞として使われる場合も、これと同じような分布を示すかどうか、興味が持たれる。

77. びっくりする(驚く)

これは、後期から調査を始めたものである。

「びっくりする」にはさまざまな原因がある。意外・恐怖など。ここでは、急に後ろから大きな声をかけられてドキンとする場合をとりあげた。これは、次の78図の場合とほとんど同じといつてよからう。このような意味の限定が答えを支配することがあろう。とくにいろいろな語形が混在する地域では場面までも答えに影響を及ぼすかも知れない。

おもな類としては、ビックリスル類、タマゲル類、オドロク類、オボケル類、ドオテンスル類がある。標準語形は **BIKKURI SURU** であると認めるが、これは分布から見てもっとも新しいものと思われる。分布は近畿を中心に現在伸びつつあることがうかがわれる。東京は関東北部・新潟・東北南部のタマゲル類に対する **BIKKURI SURU** の最前線となっている。このタマゲル類は中・四国の西半にも分布しているし、この類に属する **TAMAGARU** は九州に拡がっている。仙台以北にドオテンスル類、長野・静岡・愛知に **ODOKERU**、山陰・隠岐に **OBIERU**、香川・徳島に **OBUKERU**、庄内に **OBOKERU**、佐渡に **OBOERU** がある。

ビックリスル類の符号の与え方は、大体一般のスルを含む地図の符号の与え方の原則に従った。分布域のうち西の方では **BIKKURI SURU** だけであるが、東の方には、**BIKKURI SIRU**、**BIKKURI SERU**、青森には **BIKKURI SU** があって、他の地図のスルに対応している。

オビエル類(桃)は、中・四国東部、庄内・静岡・伊豆神津島などに分布することから、ビックリスルの一の前中央語であったと推定できる。長野・静岡・愛知の **ODOKERU** (赤)は、**OBOKERU**、**OBUKERU** などを通じて、**OBIERU** と連絡するかも知れる。この **ODOKERU** のうち、浜名湖・糸魚川線上の12~13地点では、**BIKKURI SURU** が併用で使われていたが、後者に共通語とか上品だとかの注記があったので、図では省略されている。ともかく **ODOKERU**

も、**OBIERU** も、また **OBUKERU** も、ビックリスル類とタマゲル類との間に分布していることは注目すべきであろう。能登・庄内の **OBOKERU** もこれらと同時にやはり日本海沿いに北上したものであろう。オドケルに当たるらしい語形は奄美大島にもある。

ODOROKU と **ODOKERU** とはおそらく同根であろうが、78図と比較すると、**ODOROKU** は非常に少ない。**ODOROKU** は口頭語というよりもむしろ文章語的に知識として知っているものであろう。この地図から実際に口頭語として生きて使われている語ではないと考えられる。**ODOROKU** は東京より北の関東に、多くは併用として点在する。このこともこれを裏書きしていると言えよう。沖縄にはオドロク類がはっきりした分布を示している。ここでは、オボケル類よりオドロク類の方が新しいのであろう。ただし、文献ではオドロクの方が古い。

さらに一時代古いものはタマゲル類であろう。長野・静岡・愛知の境界あたりの **TAMAGERU** は他の語形が拡がったときに、辺鄙なところでとり残されたものであろう。接頭辞のつくものが西九州に多いのは注目される。これが、接頭辞を伴うことが多いとされる東日本、とくに関東に現われなかったことは注目している。その九州一円で、その他の **TAMAGERU** に対して二段活用で対応せず **TAMAGARU** で対立するのは珍しい。

ドオテンスル類は「動転する・動顛する」という漢語独自の語形と考えられるから新しいものであろう。これが擬態語的な音感をも持っているために地方に受け入れられ、また、ますます擬態語的に変形されて拡がっていったものと思われる。もっとも、この逆に、もとある語形があり、それがあとで民間語源的に漢語と結んだものとも考えられる。しかし、「動転する」というのは、漢語として、そう民衆になじみの深かったものとは考えにくいから、この可能性はあまり高くない。このドオテンスルが行なわれる前に、何がこの地方にあったかの推定はむずかしい。一つには、**TAMAGERU** であって、この **TAMAGERU** とドオテンスル類との混在地帯に、あとからビックリスル類がはいってきたとする考え方である。これは、宮城・山形・岩手の一部についてはよく説明がつくし、三陸の **TAMAGERU** は残存形と説明できようが、青森では必ずしもこの説明は成功しない。もう一つの考え方としては、この青森と西の九州東支那海沿岸方面とにビックリスル類があることを理由に、本土

ではこの類が案外古い、とするものである。この考え方によれば、ピックリスル類は2回中央に興り、今の共通語形は古い語形の復活である、ということになる。第一の考え方の方が蓋然性が強いのではなからうか。なお、第1集の42図「おそろしい」にドオテンシタ類が宮城・岩手に数地点あることに注意せよ。うち数地点では、「びっくりする」も「おそろしい」もともに同じ語によって表現することになる。両地図で語形の一致しているのはこれだけである。

佐賀に BICCH SURU, BICITTE SURU のあることは、辺境のピックリスル類がもて何か別の擬態語であったかと思わせる。

キモオツプス類は、タマゲル類よりは新しい時代にはやった言い方かも知れない。

78. オドロクを“驚く”の意味で使うか

この項目調査は第3年まででうち切ったものであるから、地点数が少ない。77図の調査は第4年から始めたものであって、沖縄を除いて全地点で重ならないのが原則である。ほかに参照すべき地図は79図。

まず77図と比較すると、77図ではオドロク類がきわめて少ないのに対して、78図で非常に多く、その差がきわだっている。これは77図の説明ですでに述べたように、質問形式の違いを反映するものであろう。「使う」が多く現われるのは大きいところでは、北海道、茨城を除いた関東、紀伊半島南部を除いた近畿であり、ともに新しい共通語としてのこの語の姿を示していると思われる。そのほか、四国南半・長崎・奄美・先島などでもこのことばを使っている。

79図と比較してみよう。この78図に「使う」が多く現われていることは言うまでもない。これは78図の場合の方が現在、とくに文章語的な共通語としての用法があることを意味している。また78図の方は現在拡がりつつあると考えられる。このことは注記として「共通語的に使う」「新しい語として使う」などというものが多く見られたことから支持される。

78図と79図とは地理的に補い合い分布を示すであろうか。この観点からすると、岩手・青森の南部領、紀伊半島南部、大分では補い合っているが、西中国・四国

(とくに徳島・高知)ではうまく補い合わない。山口西部については補い合っているようであるが、山口東部ではこの78図についての調査がないために、補い合っているかどうかはわからない。78図、79図のそれぞれで、「使う」地域内では、79図の方がはるかに強力であり、「使わない」などをその地域が多く含まないことははっきりしている。

沖縄に「使う」が多く現われるのはオドロクという語形そのものだけでなく、その変化形・対応形をも幅広く許容している。沖縄本島ではその許容の幅が狭かったかと思われるが、これは調査員による誤差であろう。このことは77図と比較して(沖縄だけは77図と調査地点が部分的に重なる)非常に違うことからもうかがわれる。

話しことばとして中央語 ODOROKU がそのあとの中央語に席をゆずったあとも、新中央語が文章語にのりにくい形だったので、文章語としては依然共通語的な勢力を保っているというところをこの図は示すと思う。

79. オドロクを“目覚める”の意味で使うか

この項目は、それまでの調査結果で「使わない」と答えるものが圧倒的であった地域では第5年度までで調査をうち切った。したがって、全調査地点での結果が出ているわけではない。

調査では、「夜どんなに遅くまで起きていても、朝5時半には必ず“おどろく”というように」(質問番号 028)というように場面を例示した。このほか、この調査にはさらに「この人はぐっすり眠っているので、いくら呼んでも“おどろかない”というふうに使いますか」という質問(質問番号 029)があった。両質問に対する回答はほとんど分布上の差が認められなかった。したがって、ここでは、質問番号 028 についてだけを図示する。なお、この項目の内容は、77図および78図とも関連する。78図との比較については、その説明の中で触れたところがある。

「使う」という答えの分布する地域は、北から、青森・岩手の南部領、紀伊半島南部、中国では広島・島根西部・山口東部、さらに四国全部と大分である。このうち、瀬戸内海西部を中心とした「使う」地域は相当広くかつ強力である。

概観して、「使う」という答えが古いと思われる。「使う」が古いという推定は、「古く使った」「まれに使う」とくに前者が、「使う」の周辺部にあることから支持される。分布から見て、九州・沖縄にこの用法が古くあったとは思われない。近畿・中部に孤立的に現われる「使う」は、おおむね辺地にあって、残存物と考えられる。過去のある時期に中央にこの用法があったことは、文献にも用例があることからわかる。

80. あざ(痣)になる

この図でいう「あざ」とは、物に強く当たったり打たれたりしたとき内出血して皮膚の一部が青黒く変色した部分のことをいう。第3集でとりあげる「痣」、「ほくろ」などと合わせて考慮する必要がある。

はじめに、凡例について説明しよう。まず、この地図では、たとえば、シヌ：シヌルなどの文法的変種、東北方言の有声化、母音の変種等、対応関係の明らかなものは、区別して示さなかった。次に、この地図では、とくに前部分に注目して作図した。質問によって得たほとんどの語形は、「あざ」に当たる前部分と、「(に)なる」に当たる後部分とに分割できる。前部分はさまざまであるが、後部分はある限られた範囲の動詞が全国に分布している。しかし、動詞部分には、意味のある分布が見られず、前部分の分布に意味があると考えられたからである。前部分を類別して色分けした。ただし、シヌ(「死ぬ」に由来するか)の類とシム(「染む」に由来するか)の類との区別は重要であると考えて、それぞれに色を与え、この類が含まれるものは前・後部分に関係なくすべてこれらの色で示した。その他のおもな動詞には、補助的な符号——シッポと名付ける——を与えて可能な限り区別した。イル、デキル、デル、ヨル、スル、ナルには、ほとんどのものに、統一した補助シッポ符号を与えた。

また、前部分と後部分との間には、多くの場合、助詞があった。ガとニである。ガ・ニのどちらが現われるかは、もちろん動詞によって決まるが、ほとんどの場合、ガであり、動詞ナルの場合は、ニであった。その見出しで表わしたもののうち、ガを含むものが一つでもあれば、-をもつてガのあることを示し、まったく助詞の無いものは半角あけで示した。ガとニの両方を含む見出しは・-/NI・で示した。KUROZI・-/NI・SINUは、

KUROZI-SINU(ガを持つ)と KUROZI・NI SINUの両方を同時に含む見出しである。ニの前には・を置いた。これらの切れ目以外の部分で切って2行にわたったものは、=でつぎめを示した。これは、字数の制限によるものであり、他意はない。さらに、異なる色の符号間の形の類似は、必ずしも、語形の類似を示していない。後部分のないもの、ないし、前に示した代表的な動詞以外の動詞を持つものは、~で示した。

次に、図について説明しよう。シヌ、シニの類には、赤を与えた。シヌ類は、近畿中部から、日本海側を北へ青森まで、長い連続した分布領域を持っている。シヌの中には、jinuの外、jinuru、jijuなどを含むが、今、それらの変種の詳しい分布は地図に示さない。見出し語の中の変種の詳細は、『日本言語地図資料』に記録されている。北陸・能登のシニは、当地の文法的特徴を示す。シヌと、次に述べるシムのどちらに対応するか判定がつかず、別見出しを立てたが、分布から見て、シヌに対応させる方が自然と考えて、赤に含めた。シンダも、シヌに対応するものと考えてのが普通であろうが、中に、シムの連用形の音便形である可能性を含むから、別見出しを立てた。他の赤の符号の中に分布するシンダは、その分布から、ほとんどシヌと考えてよいが、長野・静岡など、橙のシムの類と隣接する地域では判断がむずかしい。また、「死ぬ」ことをシムという地方との重なり具合も合わせ考えるべきであろう。このシヌはもっとも新しく、おもに東へ伸びた勢力であろう。CI-SINUは、愛知・静岡・長野・群馬などにまとまった分布領域を持っている。KUROZI・-/NI・SINU(、SIN、SINDA)は、はっきりした領域を持っていないが、草で示したクロジの類と、分布が重なる。与えた色は違いが同類と見れば、その地域的連続がよくわかる。たとえば、能登・山口・近畿北部など。凡例のKURO SINUから CUGURO SYUMUまでと UOSIMUとのうち、SINUのように後部分が他の地点に単独で現われるものは、連濁があっても、ZINUなどとはしなかった。ZUMUとなっているのは、SUMUという形が単独で現われなかったものである。

赤で示したシニの類の中では、四国・中国西半に広く分布する SINI-IRU が有力である。山梨にも SINI-IRU が分布する。SINI-IRU の中に、jinigairu という1地点があったので-を入れた。しかし、他の図など(たとえば98図)と比較するとき、SINI-IRUの地域は、

すべて助詞ガを持つ地域と考えられる。よって、jini-gairuの方がむしろ例外で、jiniiruという、複合動詞の勢力が強いと考える方が妥当かと考えられる。SIGIRUは、「死ぬ」ことをjiruということと関連があるか。SINI-IRUは、東西に分かれ、シヌの類の外側に分布する。ある時代に中央で栄え東西に伝播した表現かと思われる。近畿などに、数地点見えるのはその残存とも考えられよう。クロジの類は、中国西部のKUROZINI・NI NARUが有力である。これは、その周囲の草で示したクロジと東側に強い分布を示すシヌとの結合によるものと思われる。クロジの分布の上へ、シヌが侵入してきて、クロジニという結合を生んだと考えられる。

シム・シミの類には橙を与えた。シム類は、それぞれ、島根東部のSIMU、愛知北東部・近畿周辺部・九州中北部などのKURO SIMU、福岡南部のKUROSYUMUなど数地点ずつ各地にちらばって分布している。KUROZUMUは、静岡・長野・徳島などに分布し、周囲のクロズミ類と連続している。

シミの類は大きく二つの類に分かれる。中ぬきの円形符号を与えたジンの類と、その他の類とである。ジンの類は九州南半に分布し、その北側はシミが分布する。北陸・能登のシンと同様に、シヌに対応させるべきか、シムに対応させるべきか、むずかしいものである。しかし、分布から、北側の福岡・大分にシミが分布し、また、シムも分布することから、橙で示した。シミの類のうち、SIMI IRUが島根東部にあり、南のSINI-IRUとの関係をうかがわせる。クロジミは、大分を中心に分布し、南のKUROZIN, CUGUROZINと連続している。クロズミの類は、静岡に広い分布地域を持つ。その他先に触れたクロズムの長野・徳島などの地域に接してもいづらか分布する。以上のものとは少し異なるが、-ZIMIという要素を持つものに、関東東部に広い分布領域を持つクロナジミの類がある。この類は、千葉にナジミ、福島にクロナジが分布するほか、ほとんどクロナジミである。またこれに後接する動詞部分にも、栃木・千葉にデキル、その他にナルというようにはっきりした分布が見られる。これはシミの類に通ずるZIMIという共通要素を持っているので橙を与えてある。NAが何を意味するかはわからない。NAZIとMIとに分割すべきものかも知れない。これらに橙を与えることによって、中国・九州などの-ZIMIと対称的分布を得る。この東西の分布は、シヌ類より古く、かつて中央から-ジミ、-シミ

ないしシムが東西に拡がった痕跡ではなからうか。それが、東京を中心として現在勢力のあるアザによって分断されたとも考えられる。

空で示したアザの類は、関東・福島・山形にまとまった分布領域を持ち、その他、近畿北部・山陰・九州西部など、全国に散在する。このアザは一見して残存と見える。第3集に予定されている質問番号058の「あざ」を見ると、島根・広島中部以東の本州はすべてアザであり、それより西はホクロ・ホヤケをはさんで、九州西部にふたたびアザが現われる。そこでこの図のアザ地域には、質問番号058でもほとんどアザの現われることがわかる。すなわち、両図を比較して、「痣」と「打ち身」との二つの意味を区別しないのは、本図のアザ地域だけということになる。関東のアザは、古いものが江戸ないし東京付近に残存していたために、標準語の地位を獲得し復活して現在勢力を持つようになったものであろう。

草を与えたものは、チ・クロジの類である。チの場合CI-YORUは、九州西部に拡がり、山陰・四国南岸・東北などに散在する。動詞部分が必ず、ヨルであることに注意したい。分布は、古いものの残存である可能性を示す。クロジの類は、東北東部・三重・愛知・愛媛・中国西部・熊本などに、それぞれまとまって分布する。東北東部の分布を見ると、KUROZI-YORUが宮城に分布し、そのヨルが、岩手を帯状に北上し、茶の地域ではBUCICI-YORUとなって、青森まで伸びていることがわかる。この地方では現在、KUROZI-YORUが強い勢力を持っていることがわかる。また、このKUROZI-YORUは、熊本にも領域を持つ。東北と中国・四国・九州とに別れて分布するKUROZI-YORUを、中央から伝播していったものの残存と考えることもできる。その際、名古屋付近の分布が問題となる。近くにKUROZI・-/NI・SINUがあることから、このKUROZIは、もとはさらに広い分布を持っていたと考えられる。また、能登先端のクロジとの関係も考えなければならない。すると、クロジは九州・中国・四国、東北のものと、中央と、三つの分布地域があることになる。いずれにしても、この類はかなり古いもので、CI-YORUなどと同時代のものであると考えてよからう。

ニエルの類には緑を与えた。岐阜とその周辺、紀伊半島南半・四国・九州に分布する。新しい勢力ではないことは分布からわかるが、どの程度に古いものかは判断しにくい。しかし、シヌよりは古く、シムよりは新しい、と

考えられる。また、紀伊半島以外ではどの地域でも、クロジと隣接していることから、クロジと同時代か近い時代のものと言うこともできよう。

茶で示した類は、ブチ・ウチという要素を含むものである。積極的分布はあまり見られないが、ブチル・ブチチの類に一定の領域が認められる。ブチルは、福島・新潟中部・佐渡と、山形北部・秋田などにある。分布の形としては特異で、この地方独自に発生し広まったのかも知れない。その周辺一帯に点々とあるブチと関連があらう。岩手北部・青森のブチチも、ブチ、ブチルと通じよう。南側のクロジとチが共通する。岩手南部・宮城にも、ブチチがあることから、クロジに追われた古い語形であろうか。古い語形と言っても、現在クロジのある地域全域をおおっていた語形というより、この地域独自に発生してすぐ弱まり、クロジに圧倒されつつある表現とすべきかと思われる。

以下は、全国の分布から連続性の認められないものを、紺に一括して示したものである。岡山のクチルは、シニの分布を分断している。この地域での独自の新しい発生であらう。九州西部・鹿児島南端のツグロは、九州南部のツグロジンとかかわりがある。ツグロを共有する点でこれらを一括すると、九州西部・南部一帯にかなり広い領域を見出しうる。東側から -ジンを持ったクロジンが侵入し、南部でツグロの中へ分けいった。そこで、ツグロジンが生じ、ツグロが図のように、分断されたものと思われる。分布はその変化の歴史を推定させる。

奄美・沖縄は、ほとんどクロに対応する語形が分布する。

今、凡例に、クロジ、クロナジミ等、クロ-を含むものが多くあり、一定の分布を示しているが、このクロ-の中に実際にはアオ-という要素を含むものがあつた。アオナジミとかアオチなどは、色の限定を加えるという点で、クロナジミ、クロチと共通すると考え、この地図ではアオ-はクロ-に含めた。クロ-の中に含まれるアオ-の分布のあらましを述べると、千葉・茨城のナジミの領域、近畿中部のクロシヌ・クロシム・クロシムの地域、四国今治付近のクロジ地域の一部、九州北部のクロジミ・クロシム・クロシムの地域、大分東南端のクロジの地域などである。地点ごとの詳細は、『日本言語地図資料』に記載してある。

以上、分布の記述と解釈の概略を述べたが、なお、真の解釈に到達するためには、「なじむ」「にじむ」「そまる」「そめる」「しみる」などについての徹底的な調査が、「死

ぬ」についての調査とともに必要であらう。

81. くすぐる(擦る) 一前部分一

「くすぐる」に当たる方言語形は 81 図(前部分)と 82 図(後部分)とに分けて示した。ある地点の完結した方言語形は、81 図と 82 図の見出しを一印を目安にしてつなぐことによって得られる。ただし、82 図凡例中()に入れた部分は、81 図に重複して示してあるから、つなぐ場合は無視する。

なお、『日本言語地図』第 1 集には、この語と比較すべき「くすぐったい」に当たる形容詞の諸方言語形が収められている。「くすぐったい」の場合も、32 図(前部分)と 33 図(後部分)に分けて示してある。「くすぐる」の前部分は、「くすぐったい」の前部分と、現われる語形、およびその分布において共通するところが多いので、共通の符号を与えるように努めた。

また、この「くすぐる」という項目は、後期計画において追加された調査項目であつて、調査地点数が少ない。

81 図と 32 図とを比較すると、81 図において地点が少ないことを除いて、まずほとんどが一致するが、両図の間に差がないわけではない。大きな違いとしては、次のようなものがある。青森を中心として、32 図には MO-CYO- が顕著に現われるが、81 図では劣勢である。八丈島は、32 図では MUCU- であつたが、81 図では KUSU-、KOSO-、GUSU- などである。鹿児島で、32 図では KOSO- が主勢力であるのに対して、81 図では CUKU- が目立つ。沖縄は、32 図では本土と別種のことばが見られるが、81 図では本土と通ずる。

これは、平行的なモルフィームながら、別々の語に属する場合は、その変化の方向や速度に違いのあることを示すのであらう。青森や八丈島においては、形容詞の場合に古態が残り、動詞の方で変化が早いと言うことができよう。

鹿児島については、よくわからないと言わざるを得ない。もっとも、完結した語形は 81 図では CUKUZIT であることが多いから、CU-KUZIT と分割すべきものかも知れない。もしそうだとすれば、81 図には、32 図に現われないモルフィームがあることになる。

なお、この地図の見出しで「その他」となっているものの中には、動詞一語での表現(たとえば 82 図で KAKU

となっているもの)を答えた地点を含む。

82. くすぐる(搦る) —後部分—

前部分と後部分の分割について、完結した語形の求め方、および第1集所載の「くすぐったい」(32図, 33図およびそれぞれの解説)と比較すべきことについては、81図の説明を参照。

82図に現われた動詞の後部分に関する諸語形は、33図が形容詞を扱っている関係上、33図と一致するものはない。しかし、対応関係がまったくないわけではない。そこで、82図に現われた諸語形については、33図と対照できるように、色や符号を工夫した。もっとも、必ずしも成功しているとは言えない。たとえば、82図の—BAKASUは、33図と比較すると、—BAIまたは—BAIIの分布する地域に拡がっているようである。このことから、—BAKASUは—BAIまたは—BAIIと対応すると考えていいであろうか。どうも適当でないと思われる。33図の側から見ると、—BAIは、82図の—BASUにも対しているからである。82図の—GURUは、33図の—GUTTAIに当たると言えよう。しかし、平行的に、82図の—BURUが、33図の—BUTTAIに当たるとは、断定しにくい。82図の—BURUは、33図で—BAI, —BAII, —BAIKAの用いられる地方にも現われるからである。82図の—GASUに対して、能登では33図の—GASIIがきれいに対応するようであるが、東北地方では、きれいな平行関係が認められない。

以上のような事情から、色については33図の基本方針に従うことにしたが、符号の形については、必ずしも33図と対応させることはできなかった。

82図を大観すると、次のようにならう。北海道・東北地方から紀伊半島にかけて、太平洋岸に赤の符号が分布する(K-, G-で始まるものには、赤を与えた。ただし続く母音がOであるものは、桃を与えた。以下同じ)。能登にも赤の符号がある。西日本では、中国西半から九州にかけてが、赤の符号の分布地域である。これは、沖縄にまで及んでいる。

一方、赤符号の地域を分断して、山形から四国までが、緑の符号の連続して分布する地域である(後部分の頭部が、B-, M-, W-であるものに緑を与えた。ただし、後続する母音がOである場合は、草とした)。

このほか、九州南端に茶の符号があり、これは琉球列島にも見られる。

赤と緑の符号の配置は、33図と比較して通ずるところもあるが、かなり違っているとも言える。82図においては、西日本で赤の勢力が強い。

赤の符号のうち、おもなものの分布は、次のとおりである。

—GASU 北海道・東北・能登半島・隠岐

—GURU 福島から紀伊半島まで、および中国・九州。沖縄のものも、グルの類と考えてよからう。

—GUSU 群馬

—KASU 長野東部・香川・愛媛

緑・草の符号のうち、おもなものの分布は、次のとおりである。

—BASU 東北地方日本海岸から新潟・長野北部まで

—BAKU 福井

—BAKASU 長野南部・岐阜から島根・愛媛まで

—BORU 滋賀・京都・大阪・和歌山・奈良・三重

—BURU 静岡以西各地

茶の符号は、前部分と比較することによって、すべてがクジルの類らしいことがわかる。他の類との関係から前部分を切り離れたが、分割が適当であったかどうか、問題がある。

紺の符号は、後部分であるもの(見出しの頭部にダッシュのあるもの)は、ほとんどがスルの類と言える。ただし、山梨の—SUだけは、前部分と組み合わせればMOMOSUとなるから、あるいは、MO—MOSUと切って、桃の符号を与えるべきものであったかも知れない。

さて、これらのうち、歴史的に見て、もっとも古い言い方はどれであろうか。

赤と緑の分布からは、一見して赤の類が古く、緑の類が新しいものであることがわかる。これは、33図での解釈と平行する。そして、33図の方が変化の速度が早そうである。このことは、81図の説明とちょっと矛盾するように見える。しかし、形態素ごとに別々の歴史があると考えれば解消する問題であろう。もっとも、赤の中でも—GURUだけは、標準語であるから、現在発展中であって、このことも考えておく必要がある。

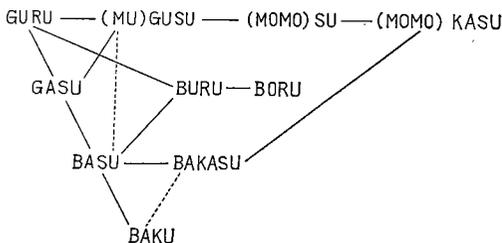
赤の類の中でもっとも古い表現は、—GURUであろう。次いで—GASUが生じたと考えられる。行為の積

極性を強調したい気持ちが語尾を変えさせたのではあるまいか。-GUSUは-GURUと-GASUの混交形と考える。西接する-BASUの影響をも、考えるべきかも知れない。この-GUSUは完結形としてはMUGUSUということになるが、さらに変化してMOMOSUとなったのであろう。

緑の類の中でもっとも古い表現は、-BASUであろう。-GASUの頭子音が変化して生まれた語形であろうか。この-BASUを起点として、種々の語形が生まれる。一つは福井の-BAKUである。現在あまり勢力はないが、ある時代には、この-BAKUは、もっと広く各地に存在したかも知れない。もう一つは-BAKASUである。-BASUをさらに能動的に表現したい欲求が、語尾を変化させたものと思われる。あるいは、その誕生に-BAKUの-K-が関係しているのかも知れない。

さらに-BASUは、-GURUと接して-BURUとなったと考えられる。-BORUもこの類であろう。見出しの頭部がBであることから、-BURUや-BORUには、この図で緑や草の符号を与えてあるが、いわば赤と緑の中間に位置する語形と考えられる。

-KASUは、現在、赤の類として分類してある。しかしこの語形は完結形がMOMOKASUであることから、東南に接するMOMOSUと関連させて考えるべき語形のようなのである。-BASUから-BAKASUが生じた。同様に、MOMOSUからMOMOKASUが生じたと考えることは、自然であろう。しかも、-BASU、-BAKASUの両者がこの表現に接して分布していることから、その影響が及んだものと考えておく。以上の推定を略図によって示せば、次のようになる。



もっとも、この推定に問題がないわけではない。緑の地域が連続しているとはいえ、北陸道が、-GASUによって切断されていることが、その一つである。近畿と長野・新潟以東を結ぶ交通路はどれも見当たらない。

この問題は、次のように考えておく。-GASUは過

去のある時期には現在の領域よりもっと狭く、もっと北に(半島北部に)圧迫されていた。ところがある時、逆に南方に張り出してきた……。あるいは、名古屋付近の-GURUは実は在来のものでなく、現在の標準語の勢力であって(33図と比較せよ)、古くは南方からの経路があったと考えられるかも知れない。

九州南部(沖縄を含む)のクヅルの類は、この地域では、-GURUの類より、いっそう古いものと思われる。いわば、すべての現存表現の中で、最古のものとして推定される。もっとも、この類が古くは全国をおおっていたかどうか、それはわからない。

なお、この図をさらに深く理解するためには、各地方(各地点)についての、33図とのこまかい比較が必要となる。たとえば、まえに、形容詞後部分の変化は、動詞後部分の変化に先行したと書いたが、これは主として西日本についてのことであった。東日本では、概して、変化は平行している。変化はそれぞれ独自に進行しつつ、一方相互の影響が必ずあったと考えられる。そして、その事情は、地方(地点)ごとに違っていた可能性がある、というわけである。

83. きゅう(灸)をすえる 一前部分一

共通語の「灸をすえる」に当たる語をたずねている。回答は各地点ほとんど目的語と動詞との二部分からなるので、図も前部分(目的語)の「灸を」に当たる部分を83図、後部分の動詞に当たる部分を84図として分けることにした。

83図はとくに、ほとんどすべての地点で目的語を示している(一語で表現する——たとえば「においをかぐ」に対するカザムのような——、あるいは主語に当たるものが現われる——たとえば「せきをする」に対するセキガデルのように——ところがない)ので、「灸を」の「を」に当たる部分をも「灸」に当たる部分と同時に図示することにした。この場合、「を」に当たる部分を棒系統の符号で表わし、これを、「灸」に当たる部分を表わす符号に加えて示すという方法をとった。「を」に当たる部分は、-Oのとき縦の棒、「灸」に当たる部分が延びているときは横の棒、九州などで-BAのときは上に黒丸のついた縦の棒などといったように表わした。この際いくつかの約束を作ったので、まずこれを説明しよう。

まず、KYUUはKYUの延びたものとは認めなかった。KYUUUとなつてはじめてKYUUの延びたものとする。KYUUの中にはKYU-Oに当たるKYUUが含まれようが、この二つを分離することは必ずしも容易ではないので、ここでは無視した。次に、-Oで終わる「灸」に当たる語のときは、KYO, CYOを除いて、最後の-Oは助詞と認め、またこれは延びたものとは認めなかった。たとえば、YAITOOはすべてYAITO-Oとして整理され、YAITOOとなつてはじめて、「灸」に当たる、語末に長音を持つYAITOOが出てくることになる。

「を」について概観すると、これは99図、100図に詳細はゆずるが、関東、日本海沿岸4県を除いた中部、中国、香川を除いた四国、福岡・大分・鹿児島で助詞Oを使うことが多い。東北では岩手の岩泉地方を除いて-Oを使わない。北海道も使わない方が多いのは、東京の使い形の方がこの地方で弱く、やはりこの地が基本的に東北的であることを示している。近畿は無助詞のように言われているが、大阪市など-Oが見られるのは共通語の影響を受けた新しい傾向であろうか。99図と大変違っているのは沖縄で、ここでは延ばした言い方と認めたものが多くなっている。延ばした言い方は九州南部にも少し見られる。この点を除いては、前の語の助詞への影響は見られない。-BAというのは西北九州に見られる。

「灸」に当たる部分では、大きく言って、キュウ類が東、ヤイト類が西に現在分布しているが、おそらく、キュウ類の方が古いであろう。これは、中国・四国・九州におけるキュウ類が残存物だと思われることと、中部地方のキュウ・ヤイトの境界地帯以西にキュウ・ヤイト両類の併用地点が見られるのに対して、強いキュウ類の専用地帯にはまだヤイト類が侵入していないことからもうかがわれる。併用のキュウ類は、このような残存物としてのもののほかに、標準語の地位を得たキュウが新たに標準語として広まったものが含まれると考えられる。共通語形の併用処理原則で、実際のカードに現われたものよりも地図ではキュウの併用が少なくなっている。

茶のヤイヒ類がその前の中央語であった可能性が高い。これは関東周辺以北と九州(その中部以北)また八丈島の分布から推定できる。ヤツ類は九州南部から南に分布しているが、これがもっとも古いものであろう。ヤイトもヤイヒも「焼く」を語根としていると見られるが、「焼く」というモルフィームが2回発生したと考えるのは

多少不自然だという見方もできる。

高知のモグサ類は、灸の材料からの命名で、おそらく独立にここで発生したものであろう。

次に各類の中で問題点を述べよう。

まずヤツ類。ヤツが五島を主に、ヤアツが長崎の本土部、沖縄本島北部に、ヤアチュが沖縄本島および周辺に分布している。おそらく以上の類の方が古くて、九州南部のエツは新しいものであろう。あるいはこのエツは、地域から考えて、エツに助詞のオに当たるものが加わって、エツになったとも考えられる。

ヤイヒは「焼き火」からきたものである。佐賀にヤアヒ、青森・秋田にヤヒがある。YAHYO, YAHYUはヤヒオの約つたもので、YASYU, YASIなどはさらにこれを東北方言の訛音で発音したものだらう。関東周辺部にはYEEHIなどがある。

次にキュウ類。キイやチイなどは東北方言的な訛音と思うが、これは、関東北部から東南北部に主として分布している。キュなど母音の短いものは東北、主として青森で行なわれている。

オキュウのようにていねいの接頭辞O-は、東の方のキュウ類のうち、南半分の方に比較的多い。このようにO-がつくのは他の類には見られず、このキュウ類だけである。このことは、いろいろな理由が考えられるが、おもしろい。「灸」は漢語であろうが、ゴでなくオがつくのは、使い古された語であるからであろう。

長野北部から新潟・庄内にかけてキョオがある。ただし庄内のチョオはこのキョオの東北方言的な訛音である。これは~YUが~YOと発音されるというこの地域の音韻法則によるものである。この地域の中心部である新潟中部では、いわゆるオ段長音の開合の別をするため、合音OOの調音点が東京などよりも狭く、UUに近い音になっていることと関係があるか。現在のキョオの拡がり、いわゆる開合の別のある地域より広いのは、このようにして発生したものが、四圍に向かって拡がっていったものと考えられる。

最後にヤイト類。これは「焼き火」の約と言われている。中国西部にはヤイトオがあり、岡山中心にエエトがある。これはこの地方がアイの音の融合しやすい土地であるために生まれたものであろう。なお、このエエトの形は東のキュウ類との境界地帯、名古屋付近などにまた多く現われていることも興味深い。この地方もアイの音の融合しやすい地方である。なお、アイに当たる音につ

いては、第1集40図「からい」を参照。九州のエトも境界地帯に多いようである。熊本を中心にヤト、エトが多いのはヤツ、エツからの影響であろうか、このようになりやすい地方であろうか。なお、兵庫北部にはヤアトが集団をなしている。ここはAIがAAに変化したのであろうか。

84. きゅう(灸)をすえる 一後部分一

「灸をすえる」の動詞部分についての図である。

まず、作図に当たっての語形のまとめ方について述べよう。SUERUは、東北地方の場合、東北方言による訛音を含む。ただしSUIRUは分出。したがって、シエルは東北の場合にはSUERUにはいつている。この点から言えば、出雲地方のSIERUもSUERUに入れていいわけではあるが、四国にもSIERUがあるので、これとの比較のためにそのままSIERUの中に入れておいた。

SURUの中には方言訛音を全部含んでいる。SYERUは縁にしたが、スエル類と考えることもできる。SYEERUはスエルの類に入れたが、このSYERUはスルかスエルか不明である。沖縄のSYUNにはスルの類すべてを代表させてある。この沖縄のスル類については、詳しくはたとえば、55図「片足跳びをする」について見られたい。

TATERUに対してTADERU、YAKUに対してYAGUを分けて示した。

なお、SUERUとの併用として現われるUERUとOROSUとは専門医療語らしいので、図には表わさなかった。UERUは埼玉5687.86、岡山6455.88に、OROSUは和歌山6581.52、岡山6436.98、広島6461.53、徳島7417.27、愛媛7421.62、7450.44、高知7427.90、7435.07にあった。

さて、スエル類がもっとも新しく、また標準語の地位を獲得して伸びつつある形であることは確かである。しかし、ヤク類とスル類の新古関係を判定することは必ずしも容易でない。奄美・沖縄では、中央にスル類があって、ヤク類を分断しようという勢いを示しているのは、少なくともこの地方ではスル類の方が新しいことを意味するであろう。ヤク類が関東東部・東北に拡がったあ

とスル類が北陸を経て北へ伸びて、ヤク類を分断したとも考えられる。しかし、スルという語形はこのような移動によらなくても個別的に地域ごとに発達する可能性が強いものである。スルが二形接触地帯またはその近くで見られることはこの可能性を認める見方に根拠のあることを示している。また、北陸は、スエルがセル、シエルを経てスルに変化する可能性を持つ地域である。なお、質問文に「皮膚を焼く」ということばがあるので、ヤク類は実際より多少多めに地図に現われているかも知れない。

もし、スル類がヤク類のあと東北に伸びてきたのならば(こう考えると少しスルが古すぎるが)、そのあとに、タテルが東北で独自に新しく発生した、と考えられる。この類が北海道を除いて、他の地方にまったくないことから、独自の地方発生である点は推定できると思う。

タテルもヤクも、北の方へ行くと有声化してタデル、ヤグが優勢になる。

スエル類の中では、SEERUがところどころにゆるい集団をなしている。これはおそらく訛音による個別変化であろう。また、中部地方にはSUWERUが比較的多い。

ここで、灸をすえるの前部分との結合を考えてみる。

タテルは北の方では、ヤヒと結んでいる。おそらくヤヒはヤキヒからヤイヒとなってヤヒと退縮したものであるが、これがさらにヤクと結ぶのは少なくとも意味を無視しても同音で発音しにくいこともあり、ここでまずタテルが発生したのではあるまいか。ヤヒ類はほとんどヤクとは結んでいない点からもこのことは考えられる。このタテルが好まれて、まわりのキュウ地帯にも拡がった、あるいは逆にキュウ類が拡がったときもそのまま残ったものと思われる。(ヤヘヤを嫌ったという推定の例外は、九州以南に多少認められる)

ヤツを別とすれば、もっとも古い形としては、ヤキヒーヤクが考えられる。次に、キュウスルまたはキュウーヤクの形が中央に起こった。これによってキュウが四囲へ伸びていった。次にヤイトが中央にできたが、これは上に述べた理由によって、ヤクには結びにくく、スエルができて、ヤイトスエルの形が安定し、これが四方に伸びるとともにスエルはとくに四囲へ拡がった。この理由としては、ヤクという直接表現を嫌うといった心理も働いたのではあるまいか。

85. におい(匂)をかぐ(嗅ぐ) —前部 分—

質問番号 042 の質問に対する答えは 85 図と 86 図とに分割して示した。

85 図に示した前部分とは、主として目的格に立つ名詞(およびそれに伴う助詞)の部分で、86 図に示した後部分とは、主として動詞の部分で、ダッシュのない見出しは、組み合わせるべき後部分、または前部分を欠く回答をさす。例：85 図の NIOI(これは、質問に対しては不完全な回答と考えられる)、86 図の KAZUMU(これは不完全な回答ではない)。後部分の頭部に(一)のある語形は、接する前部分を持つ場合を含む一方、それを欠く場合もあることを示す。例：86 図の(一) KAGU は、たとえば山梨県中心部では 85 図と比較することによって NIOI O KAGU であったことがわかるが、西南部には、単に KAGU と答えた 4 地点のあったことがわかる。

前部分と後部分との分割で、問題がないわけではなかった。いくつかを例示しよう。詳細は『日本言語地図資料』を見よ。

KAZAKAGU は、KAZA— —KAGU のように切った。しかし、NIOI O KAZAKAGU は、NIOI— —KAZAKAGU のように切った。前者は、後者と比較するという観点からは、分割しない方がよさそうに思える。しかし他の多くの KAZA~や、~KAGU と比較するためには、分割する方がよさそう。一方、後者には、二つの部分に分割するという前提に立つ限り、他の分割法はちょっと考えにくい。両者の取り扱いは矛盾するようにも思えるが、この図では以上のように処理することが、もっとも適切であると考えた。

KAZAKAKU, KADAKAKU, KARAKAKU も、同様に、KAZA—, KADA—, KARA— —KAKU のように切った。一方、NIOI O KADAKAKU は、NIOI— —KADAKAKU のように切った。NIOI O KAZAKAGU に準じたわけである。

KAZAKASU, KADAKASU は、KAZA—, KADA— —KASU のように切った。一方、NIOI O KAZAKASU, KAZA O KAZAKASU などは NIOI—, —KAZAO— —KAZAKASU のように

切った。このあたりになると、KAZA—, KADA— —KASU の分割が適切であるかどうか、多少問題になる。—KASU が果して独立した動詞部分と言えるかどうか……。しかし、他との比較という観点から、上に準じてある。

KAZAGASU, KADAGASU は、KAZA—, KADA— —GASU のように切った。NIWOI O KAZAGASU は、NIWOI— —KAZAGASU とした。また、KAZAGERU は、KAZA— —GERU とした。

—GASU や —GERU を分出することは、すでに名詞と動詞とを分割するという範囲を越えていよう。しかし、この地図では、他との比較という観点から、以上のように処理してある。沖縄の KAZYASUN なども、この図では KAZYA— —SUN としてあるが、同類と言えよう。

ただし、KAZAMU などはそのままで後部分と認め、KAZA— —MU としなかった。NIOI O KAZAMU などは NIOI— —KAZAMU としてある。一貫性がないようにも思えるが、いたしかたがない。

なお、この日本言語地図作成のための調査には、別に名詞としての「におい」に関する調査項目(質問番号 038, 039)があった。その内容はいずれ公にされるが、この 85 図と大綱において一致することだけを注意しておこう。ことに質問番号 039 の地図と共通するところが多かった。

また、一般に、名詞が目的格(ヲ格)をとったとき、どのような形態をとるか(どんな助詞をとるかなど)の問題については、この 85 図によっても大略を知ることができようが、本集 99 図、100 図にはそのための地図がある。

85 図を見ることにしよう。全国を大観すると、まず近畿地方を中心としてカザの類が分布し、その勢力は点々としてではあるが主として西方に伸び、琉球列島にふたたび顕著に現われている。そして、カザの類の両側には、ニオイの類が分布しており、さらに、東北地方の北部にはカマリの類が分布していると言えよう。そのほか、西日本には、瀬戸内海沿岸および九州中央部(いわゆる一型アクセント地帯よりやや広い)その他に、前部分を欠く語形(86 図によれば KAZAMU と答えた地点が多いようである)が、かなり広範囲に分布している。また、能登半島や富山には、ホガやハナガなどの独特な語形が見られる。この地図で橙の符号を与えたもの

の中には、実はカマリの類のほか、カオリの類、カの類、カバの類が含まれていた。このうちカの類は主として秋田・山形・新潟の日本海岸に分布し、そのほか九州の南端にも見られる。カバの類はもっぱら沖縄である。これらには、一定の分布領域が認められると言ってよからう。ただ、カオリの類だけは、秋田・山形に多いようにも見えるが、一方、栃木・静岡・兵庫・広島・大分に点在し、必ずしもまとまっていない(質問番号 038, 039, ことに 038 の調査結果に、同様の傾向が見られる)。この図では橙を与えたが、別色を与えた方がよかったかも知れない。

では、この全国分布は、どのように成立したのであろうか。

カザの類が新しい勢力であり、その両側に分布するニオイの類が、それ以前に発達した勢力と考えることは、自然であろう。ニオイは、もと近畿地方にも広く分布していたと考えられる。現在近畿地方に点在するニオイ類が、残存であるか現代標準語の侵入であるかは、一概にきめられない。ただし、併用の場合の注記には、カザの類を新しいとする例のなかったこと(その逆はある)は、注意してよからう。主として西方(沖縄まで)、まれに東方(佐渡・千葉・茨城・福島・青森など)に見られるカザの類は、ニオイの類が標準語となる以前に中央語として伝播した痕跡と認められる。

ニオイの類は、動詞ニオウ(ニホフ)から名詞形に転じた語形と考えられる。したがって、この図によってニオイ類が古いといっても、それ以前に、動詞ニオウの存在が推定される。これは、北海道から東北部に見られるカマリについても同様である。カマリは、動詞カマルを起源とすると考えられる。

こう考えると、ニオイの類・カマリの類は、この地図に紺のダガーで示した動詞のみの回答と、一脈通じることになりそうである。元来日本語では、to smell に当たる表現を、動詞一語をもって表現していたのではあるまいか。

ある時代、名詞+動詞という型で表現したいという要求が起こる。この要求には、物を見る、音を聞くなどの他の感覚動詞との平行関係を考慮しなければなるまいが、ともあれこの要求がニオイとかカマリなどという語形を生ませたのではないかと考える。

結局、概略的には次のように推定することになる。日

本全土は、もともと、動詞一語による表現におおわれていた。そこにニオイが発生する。カマリも発生する。カマリの発生は、東北地方における局地的現象であろう(ただし、カマリないしはカマルということばは、必ずしも東北地方に限られたことばではないようである。『大日本国語辞典』によれば、『甲陽軍鑑』『小田原軍記』に「かまりの物見」ということばがあるという。斥候の意味らしい)。ついでカザの類が近畿で発生した。

沖縄本島付近では、86 図と比較することにより、完結した回答は、KAZYASUN であることがわかる。これは、動詞一語による回答と見ることもしできる。近畿中心部には、KAZAGAKU・KAZAGASU が分布している。これらも、動詞一語による回答と見ることができ。これらは、一種の先祖返りの現象と見ることはいまいか。日本語の本質が、近畿という、いわば日本におけることばの改新の震源地にふたたび現われたのではあるまいか。沖縄本島の首里・那覇地方もことばの改新の震源地となる場合がある。

では、秋田・山形・新潟および九州南端に見られるカの類は、どう考えるべきであろうか。これは文献から見ても古くからの語形のようにだし、動詞から変じたものとも考えられない。

分布図からの答えは次のとおりである。カは非常に古いものとは考えられない。日本海岸の分布状況からは、近畿を出発点として伝播した表現と考えられる。九州南端のものは、極端に離れているように見えるが、カザ類と関連させて見れば、そのわずかな先鋒でしかない。カザの発生直前(すなわちニオイ類の発達より遅れて)、近畿を出発して東西に伝播した表現と考えられる。別のことばで言えば、カ+動詞(嗅ぐを意味する動詞)の表現は、日本全国に古来あったとは考えられない。もっともこれは、to smell を名詞+動詞という形で表現する場合のカに関することであって、名詞カの一一般についての発言ではない。86 図の説明でもわかるように、名詞のカ一般は、古そうである。

主として沖縄本島に見られるカバの類は、形容詞カンバシの語幹と通ずるものというより、86 図に見られる動詞カブを源とするものと考えられる。

北陸のホガ・ハナガなどは、この地域で独自に発達した語形であろう。岐阜と福井のハナとは関係があるかも知れない。-ガの部分は名詞カと関係があろう。いずれにせよ、非常に古い語形とは思えない。

86. におい(匂)をかぐ(嗅ぐ) 一後 部分一

質問番号 042 の質問に対する答えは、85 図と 86 図とに分割して示した。

86 図の全体を、北の方から眺めてみよう。岩手を中心としてカマルの類が分布している。この類は、遠く八丈島にも分布していて注目される。東北地方(山形を除く)における主力語形は、カムの類である。カムは北海道と東関東に及び、はっきりした領域を持っている。一方、西日本でも、高知・屋久島などに、この類が分布する。琉球列島の離島には、カム・カブの類が分布する。これらは、九州南端のカムに接続するものと言えよう。国の中央には、東のカムに接し西は鳥取・兵庫あたりまで、広くカグの類が分布する。内部的変種としては、北陸・埼玉のカクと、近畿中央部から岐阜にかけてのカグが目立つ。なお、KAGU の G の音変種については、第 1 集所載の 1 図、2 図に示したものと大差はない。

カグの西には、山陰と西九州のカズムの類、および瀬戸内海から東九州へかけて、カザムの類が分布して、有力である。

近畿地方には、カス・ガスなどが見られる。これらはカザカス・カザガスなどの後部分である。

以上のほかでは、九州西部のクサム、三宅島のクサグ、瀬戸内海から山口、さらに九州東北部にかけてのニオウ、そのニオウとほぼ平行して分布するキク(岩手にもある)、山形・西関東・奄美・沖縄などに見られるスルの類などが注目される。

まず、カ(ガ)にはじまる諸語形について考えてみよう。歴史的には、カムあるいはカブの類が、もっとも古い語形と考えられる。分布が辺地に分散していることが、その理由である。カ(香)という名詞の動詞化した表現と思われる。カマルの類は、カムに接して分布し、おそらくカムの語尾を延長することによって生じた語形であろう。85 図と比較してみると、前部分に見られるカマリと、この動詞としてのカマルの分布する地域は、必ずしも一致していない。この語の発生を考えるに当たって、興味深い話題を提供している。

カムは、一方カグをも生んだと考えられる。カムからカグへの変化の道程には、おそらく音便形の問題が介在

するであろうが、現在の資料の範囲からは、何も言えない。ただ、このカグもまた、名詞カ(香)の動詞化した表現と言うことはできる。

85 図の説明で、to smell に当たる表現は、日本語では元來動詞一語によってなされていたのではないかと考えた。おそらくある時代には、このカム(カブ)およびカグ一語によって、全国のかなりの部分がおおわれていたのであろう。なお、これらの動詞は、ともにカ(香)という名詞を前提としている。85 図の説明では、カ+動詞(嗅ぐを意味する動詞)の表現は、日本全国に古來あったとは考えられない、とした。しかし、その次にこれは名詞カの一般についての発言ではないむね断わってあるように、名詞カそれ自体は、日本全国のかなりの広い地域に、古くから存在したのであろうことが推定される。

カグの類のうち、カクの発達については、よくわからない。85 図と比較することによって、その前部分は、現在さまざまであることがわかる。近畿地方では KAZA—が多く、北陸では HOGA—(HANAGA—)、新潟や関東では NIOI(O)—が多いが、KAO—もある。動詞一語で表現していた時代の変化ではなく、名詞+動詞の表現が発達した後に、各地で発生した表現ではあるまいか。GAKU—は、KAZA—KAGU ないしは KAZA—KAKU から変化したものであろう。KAZA—KU との関連も考えられないことはないが(カザク+カザカグ→カザガクなど)、分布の上からは認めにくい。

この地図において赤の符号を与えた、中国・四国から九州にかけて広く分布するカザム・カズムについては、よくわからない点がある。分布の状況からはカズムが古く、カザムが新しい勢力のように思えるが、断言しにくい。

カザム・カズムの発生については、KAZ の共通から、当然 85 図との比較が必要になってくる。

両図を複合し、しかもまず近畿を中心に見てみる。ニオイオカグがカザ(オ)カグを取り巻いて分布していることがわかる。ニオイオカグの分布地域は、東は長野から愛知にかけてであり、西では隠岐から鳥取にかけて、および高知である。この分布から、前部分カザは、当然ニオイに代わる新しい名詞と考えられる。発生に際しては、おそらくカ(香)が関係しているであろう。一方カザ(風)も関係しているかも知れない。このカザがどこで発生したのか、よくわからないのである。

今、かりに近畿地方として考えを進めてみよう。カザ

は近畿地方では、既存の動詞カグと結んでカザ(オ)カグとなる。一方、カザは、to smell を一語の動詞によって表現する日本語の本性にもとづいて、動詞化される。カザムは、こうしてできた語形ではあるまいか。この勢力は西に伸びてゆく。さて、前部分のニオイは、当然後部分のカザムより以前から存在していたと考えられる。当然これも西進するであろう。こうして、西日本の現状が生まれたのではないかと考えてみるのである。

この考え方によれば、カザムが先発であり、カズムはその変化した語形ということになる。カザム・カズムについてよくわからないとした所以である。カザの発生が近畿でなく、もっと西の方であるとするなら、カズムをいっそう古い語形とすることもできるかも知れない。カ+ズム(黒ずむなどの接尾辞)などという発生理由も考えられよう。この類には、さらに KAZIMU, KASUMU, KAZOMU などが見られる。KAZASU, (-)KAZAKU, (-)KAZARU, 沖縄の KAZYA—SUN などもある。これらの類の歴史については、さらに総合的な、いっそう深い考察が必要であろう。86 図で後部分とした—KASU, —GASU なども、実は、完結した語形はカザカス、カザガスなどであるから、この類と考えることができる。なお同じく、後部分として示した—KAZAKASU, —KAZAGASU などは、カザカスなどにさらに名詞の接して生じた表現と思われる。

クサム、クサグなどは、おもに前部分を持たない、言い換えれば、動詞一語による表現である。カ(香)という名詞を前提としない、独特の表現とすることができる。

ニオウも動詞一語による表現であるという点から、クサムなどと似ている。自動詞と他動詞の関係が、標準語と違っている。

キクは、主としてニオイオを前接している。名詞+動詞の表現が望まれた際、ニオイオニオウともしかねて、動詞として他の感覚動詞を借用したものではあるまいか。なお、「香を聞く」「聞香」という語も古典には現われる。岩手のものは、カムとカマルの接触によって、聴覚に関する「聞く」が転用されたもの(すなわち、西国とは発生の理由が違う)と考えておく。

87. せき(咳)をする 一前部分一

「せきをする」に当たる表現は、全国のかかなり多くの地点で、目的格に立つ名詞(助詞を含む)部分と動詞部分との二つから構成されているので、これを前部分(87 図)と後部分(88 図)に分割して地図に示した。

調査内容はかぜを引いた場合などの咳であって、「せきばらい」などはとりあげていない。

87 図を概観すると、草で示したセキ類が全国的に分布し、空で示したイキ類が九州南部と奄美北部にまよって分布するほか東北にも見られ、赤で示したシワブキ類が東北にややまよって分布するほか、関東・中部・中国・九州などの辺地に点在する。このほか、茶で示したコツリ類が中国西部に、橙で示したタゴリ類が中国・四国に少数ではあるが分布し、桃で示したサクイ類が沖縄に分布している。前部分のない、動詞一語のものが西日本などに多く見られる。

この図は、名詞部分のほか、助詞に当たる部分までを含んでいる。助詞相当部分の変種は、各色・各形とも、助詞オのつくものは中ぬき符号、助詞オが名詞末尾の音と融合して~YOO になる場合はぬき三角に中点のあるもの、~YUU になる場合はぬき水滴符号に中点のあるもの、助詞 BA のつくものは小さい穴のあいた符号、前部分が目的格ではなく主格になる表現のため、主格を表わす助詞と思われる GA, NO, N, A のつくものは中または両端に白ぬき部分のある符号、助詞に相当するかどうか疑問であるが名詞の末尾の音が延びる場合は片端に白ぬき部分のある符号、助詞のまったくない形、すなわち名詞単独の場合と同じ形と思われるものはぬりつぶし符号を与えた。

この助詞部分の表現方法とその分布の様子は、89 図「いびきをかく一前部分一」の場合と共通している(89 図から助詞だけをとり出したものに 99 図がある)。ただし、この図では、回答が動詞一語であったために前部分がない地域の広いこと、およびセキガ(ツク)、セキガ(デル)などの表現のため、山陰を中心として全国的に散在する主格を表わす助詞の分布の多い点が異なる。

セキ類の音変種について述べる。セの部分 SYE [e] HYE [ce] HE [he] であるものは、SE~の場合と同じ形で方向だけを変えた符号により示したが、この音の分布は第1集の7図(セナカの SE-の音)とほぼ同じである。ただ、宮城の [ee] の音は、7図では [ce] の方に入れたが 87 図では同じ音を SYE [e] の方に入れたため両図の分布に差のあるように見えるが、実際の音声の分

布に変わりはない。八丈島の SIKYO も 7 図の [i] の音の分布と一致する。東北に分布する SIGI, HIKI, HIGI, などの SI~, HI~ も, SYE~ などと同種のもので母音がせまく発音されたものであろう。

キの部分が発音であるものは、大きい符号を用いて示したが、これも第 1 集 28 図「あかい」における K の有声化と地域的にほぼ一致しており、法的な音声現象であることがわかる。千葉・奄美の一部では、K が H になったり、またそれが脱落したりして、SEHIO, SEHĒ, SYEHĒ, SEĒ, SYEE, などが現われる。鹿児島島の SEKUO, SYEKO, SEKU, SYEKO, などは SEK に助詞のオがついたものがさまざま変化して生じた形かと思われる。

なお、88 図によれば、おもに動詞一語で表現するセク類が近畿の周辺部、中部地方・中国地方に分布しているが、セキ類の発生は近畿あたりで、このセクの連用形の名詞的用法から発展したものである。そしてできあがった名詞のセキという形が、動詞の場合にセクと言う領域をも越えて東日本一帯や九州の一部にまで及んだものと思われる。

イキ類は九州南部・奄美北部にかたまわって分布するほかは、遠くはなれて、岩手の東北海岸にも 2 地点ではあるが見られている。九州に IKU, IGU の多いのは、セキ類の SEKU などと同じ法則によるものかと思われる。九州のイキ類のところは、88 図によれば、必ずハク類またはヒク類が分布しており、イキ(オ)ハク、またはイキ(オ)ヒクという表現として固定していることになる。それに対して、東北や奄美のものは動詞部分がスル、キレル、キラスなどであり一定の表現法がないものよりである。イキ類は九州南部と東北の辺地に分布していることから、古いものの残存かと思われる。

シワブキ類は東日本の辺地や山間部に多く、ほか山陰・九州にも分布し、セキよりも古いものと思われる。これも動詞シワブクを源として発達した表現であろう。言うまでもなく古典にも現われる。関東・中部ではすでにこの類は山間部にしか残っていないが、東北ではまだ勢力があり、平野部や街道筋にやっとセキ類が侵入した程度であることが、地図からうかがわれる。セキ類とシワブキ類の併用の場合、セキ類が新しくシワブキ類が古いとの注記の多いこともこれを裏づけている。この類とイキ類との歴史的な関係は明らかではないが、この類の方がいく分中央日本に近いので新しいかとも思われる。

このシワブキ類は、凡例にもあるとおり多くの音変種がある。シワの部分に SIWA, SYA, SA, ブの部分に BU, BO, MU, キの部分に KI, GI などがある。最後の有声化音の場合は、セキ類の場合と同じく大符号を使った。SYABURU は、88 図では動詞として使われているが、この 87 図にのせたものは SYABURU—SURU というものの前部分をとりあげたものである。両図とも SYABURU は同じ符号を与えたが、分布地域も同じである。

コツリ類は山口などに分布し、これは 88 図でコツル類の分布している地域に含まれるので、その連用形を名詞化して生じたものであろう。同様にして、タゴリ類も 88 図でタゴル類の分布する地域に含まれるので、それからの名詞化と思われる。この名詞の図では両類は地域的に接していないし、この名詞形はそれぞれ動詞形から生まれたものかと思われるので、両類の歴史は 88 図で、地域で接している動詞について考えることにする。

サクイ類は「しゃっくり」などとの意味の区別について興味が持たれる。この類のうちでは、語末に I のあるものが沖縄本島付近に、語末が KU などのものが八重山に、語頭に I のあるものが宮古にというように分布がかなりはっきりしている。

その他の類では、奄美のタンがやや目立つが、正確に「咳」の意味に対応しているかどうかよくわからない。北陸の山間部に 1 地点ある GAIKIO は「咳気を」という漢語に由来したと思われる。

88. せき(咳)をする 一後部分一

この地図の見出しで頭部にダッシュのあるものは、87 図に前部分が載せられているものであり、頭部にダッシュのないものは、87 図では「前部分がない」として扱われているものである。言い換えれば、後者は「せきをする」に当たる表現を、動詞一語によってするものである(—SEKU と SEKU などと比較せよ)。

なお、この地図では、セキオスル・セキガデルを標準語とし、なおセキオセル・セキバスル・セキスル・セクスッ・セキオダスなどをそれに準ずる語形と認め、併用の場合、〈新しい表現・共通語的である・上品な言い方〉などの注記があれば、図に表わさなかった。詳細は『日本言語地図資料』にゆずる。

地図を大観すると、東国一帯および近畿中心部から北陸にかけて、草で示した一スルがあり、それ以西にもいくらか見られる。沖縄もこのスル類が分布する。近畿地方の両側には、緑の符号で示したセクが分布し、長野および太平洋岸では、とくにセキ(オ)セクという表現のあることがわかる。主として東国に、セキ(ガ)デルが点在する。

近畿以西には、橙の符号で示したタゴル・タグルの類、茶の符号で示したコズク・コツル・ツクの類が錯綜して分布し、南九州には赤で示したヒク・フクの類が分布していることがわかる。さらに、これも赤で示したシワブクの類が、さまざまな異形をとりつつ、宮城・山梨・島根・山口・大分・長崎に散在する。

近畿を中心に見れば、スルの類がその両側に分断されているセクを排除した、新しい勢力と考えることができる。近畿のスルの類は、87図と比較すればわかるように、セキ(オ)スルの後部分である。セクが名詞化してセキを生じ、それが表現されるとき、あらたに動詞スルが求められることになったのであろう。関東のスルも、87図との比較によって、セキ(オ)スルの後部分であることがわかる。近畿で生まれたセキ(オ)スルが伝わり、この地に根をおろして拡がったものと思われる。長野から東海・三重に及ぶセキ(オ)セクは、セクの地帯にセキ(オ)スルが衝突して生じたものであろう。セキ(オ)スルの勢力は、地図によれば東から及んだように見える。こう考えれば、スルの類は全国各地に散在するが、ほとんどは、こうした近畿での新しい勢力の裔と考えられる。もっとも、沖縄のサッキイスルの類、東北などに分布するシワブキ(オ)スルの類などは、別系ということになる。ただし、後者について、88図の方にシワブクという一語の動詞での表現があることから、セク>セキ(オ)スルと平行して、シワブク>シワブキ(オ)スルが生じたと考えることができる。シワブクがシワブキ(オ)スルといった名詞+スルの表現に変化する過程には、セキ(オ)スルが近傍に存在することが関係しているかも知れない。88図で、シワブクがセクより僻地に見られることは、シワブクがセクより古いことを物語るのであろう。

近畿以西に見られるコズク・コツル・ツクの類と、タゴル・タグル類、ヒク・フクの類については次のように考える。

まず、ヒク・フクについては、シワブクとの関係を考えておきたい。シワブクの後半のブクと、フクとは何か

関係があるかも知れないというわけである。同じ赤の符号を使ったのも、そのためである。もし関係があるとするなら、この類を非常に古いものとするのが、あるいはできるかも知れない。ただし、九州南部の地理的分布は、フクよりヒクの方が優勢という事実がある。フクの方が古いと言えるかどうかははっきりしない。また、HITはヒクではなくヒルである可能性もある。現在、結論を出せないと言わざるを得ない。

コズク・コツル・ツクの類と、タゴル・タグルの類とは、なかなかむずかしい。中央日本からの伝播を考え、近畿を中心に分布を見ると、大局的には前者が古く、後者が新しい勢力のように思われる。山口を中心とするコツルはコズクとタグルの混交によって生じたものであろう。なお、古事記には、へどをはく意味でタグルが見えている。口から出るものという意味で関係があろう。

しかし、岡山南部から徳島にかけて、古いはずのKOZUKUが見られるのは、不審である。近畿地方を中心にして放射した語形とするなら、北陸を含めた東日本(木芽峠から鈴鹿山脈以東)に、これらの語形がまったく見られない点も、注意すべきである。

後者の問題については、何とも言えないが、東日本と西日本とでは、咳という事実について関心の度合に違いがあるかも知れない。

前者については、いちおう次のように考えてみる。この地域には古くKOZUKUがあったが、そこにTAGURUが侵入してくる。KOZUKUは退くがまったく姿を消すのではなく、別の意味となって保存される。それが、ある事情で原意を復活する……。

もっとも、これらの語類は、中国地方においては、セクの類とも混在し、極めて複雑な様相を呈している。以上の推論のように、単純に割り切れないかも知れない。

二形併用の場合などで、それぞれの語類をどう使い分けているか、被調査者のコメントを抄出してみよう(詳細は『日本言語地図資料』参照)。

{	シェキスル	}	鳥取県中部
{	コズク (小さな咳を何度もする)		
{	セキスル	}	長崎
{	コズク (ひどくせくと)		
{	タゴル (ふつうの咳)	}	愛媛中部
{	セク (百日咳のようにひっばる)		

{ タグル (かぜの咳)	}	愛媛の島
{ セク (ぜんそくのような咳)		
{ タグル (ひどい咳)	}	広島西部及び 北東部
{ セク		

一定の方向があるようでもあるが、ないようでもある。真の解釈に到るためには、この地域において、咳の種類、その程度、さまざまな類義表現など、いろいろな角度からの精査が必要となろう。

89. いびき(鼾)をかく 一前部分一

「いびきをかく」に当たる各地の表現を、この言語地図では、前部分(89図)と後部分(90図)に分割して地図に示した。

89図では、緑で示したイビキ類が優勢であるが、ほか、空で示したネ(イ)ビキ・ネイキ類、紺で示したうちのイグチ・ネグチ類、イグスリ・ネグスリ類、橙で示したハナ類およびハナ～類、赤で示したゴロ類なども分布している。

この図は名詞部分のほか、助詞に当たる部分をも含んだものである。助詞相当部分の相違を示す符号の方式は、原則として、87図「せきをす一前部分一」と共通にしてある。なお、別に、助詞相当部分だけをとりあげたものに、99図「助詞『を』—「いびきをかく」における」があるので、ここでは、助詞部分の説明は省き、名詞部分についてだけ触れることにする。

イビキ類は非常に優勢である。この第1音節がEのもののは大きい符号で示したが、このうち東北・東関東・北陸・山陰などに分布するものは、規則的な音韻現象と考えられるが、それ以外の地域、たとえば長野・埼玉・東京・高知などにも、E～のあることに注目したい。これは、たとえば、東京の俗語でエバル(威張る)エボ(疣)などのように、Bの直前ではこのような音変化が起きやすいという傾向と関係があるのかも知れない。第1音節がYUのものは丸系統の符号で示したが、地点数も少なく、地域的なまとまりは見られない。

第2音節 BE, ME のものは平行四辺形の符号で示したが、北陸と山陰に見られ、それらの地点では EBE-KI のように第1音節も E であって、母音のそろっていることが指摘できる。第2音節が BU になる IBUKI などにも一定の形を与えたが、新潟・群馬・埼玉・山梨

などにやや多く見られる。これはイビキの音変化とも、また、「息吹き」に由来する語なのかとも思われる。長野の IBUCI, 島根の IBOKI は IBUKI の音変化であろう。

第3音節のKの有声化は、分布地域からみてほぼ音韻法則によるものと思われる。千葉で、KがHになったり脱落したりする現象も法則的なものである。九州の南部と西部では、語末のキに当たるものが、音韻法則により [ʔ][k] などとなっており、これは凡例で～Kで示した。この分布地域のうち、鹿児島で IBIKU のように～KU[～ku]が見られるが、これは上記の～Kに助詞のオが接続して融合した形と思われる。山形・隠岐にある EBI は、IBIKI からの音変化かと思われる。大分の IBIYU は、付近に分布している IBIKYU のKの脱落かと思われる。

HIBIKI, SIBIKI は、イビキが、音の類似している「響き」に語源を求めたために変化した形かも知れない。イビキ自身、「寝(寝をぬ、のい)響き」の約か、「息響き」の約か、との説がある。

ネ(イ)ビキ類は、イビキ類の分布地域の中に、しかも、他の類との接触地帯に比較的多く見られる。このことは、イビキ類の勢力が弱くなった場合、これを補強するため、意味を明確にするネ(寝)を加えることが各地で発生したことを思わせる。すなわち、イビキの語頭にネをつけた NEIBIKI を作り、さらに音変化して NE-BIKI となったり、あるいは、イビキのイの部分にネに置き換えたりしたのではないかということである。

ネイキ類は、おもに奄美に分布するが、隣接する九州南部や沖縄にも若干見られる。「寢息」かとも思われる。この類は、90図によれば、後部分がただのスル類である。なお、ネ(イ)ビキ類、ネイキ類とも、ネの部分以外の語形に与えた符号の形は、イビキ類と共通なものを用いた。

イグスリ・ネグスリ類は、埼玉・山梨・伊豆半島・伊豆諸島に分布し、イグチ・ネグチ類は、そこから西の山梨・静岡・四国・山口・九州北部に分布する。すなわち、山梨・静岡を境に、東ではイにグスリがつき、西ではイにグチがついた語形とすることができる。グスリ・グチは擬音語に由来するかも知れない。イは「寝」の意味であったとしても、意味を明確にするため、のち、この部分をネに変えて、埼玉・三宅島・山口のようなネグスリ・ネグチになったものかと思われる。この動機はイビ

キからネビキへの変化と通ずるものがあるかも知れない。

ハナ類(ハナの後に何もつかない「鼻」だけの語形)は、岩手の海岸・東関東・香川・鹿児島・奄美・沖縄にあり、分布の様子から古いものの残存と思われる。この類は、語形としては「鼻」だけに相当するので、この前部分自体では「いびき」の意味を持たず、後部分を伴うことによって、はじめて「いびき」の意味が生じてくる点、他の類と異なる。この後部分は、90図によれば、ナラス・ナルの類であることがわかる。鹿児島では、「鼻が鳴る」式の表現であり、この表現形式しか得られなかったとの注記が多かったが、このことも方言的な現象と思われる。

ハナ～類のうち、ハナオト(ハナゴトを含む)が東北北部に、ハナグラ(ハナゴラ・ハナグルマを含む)が東南北部から関東にかけて伊豆諸島に分布している。これらは多くの音変種を持つが、その中には、ハナに擬音語的な部分をつけて発生した語形とか、語源は擬音的なものでなくとも擬音語意識が生じたために音が変わったものが含まれよう。沖縄の HANABUCI, PANABUKI などは、90図を参照するとハナ(オ)フクと言う地域に隣接するので、ハナに「吹く」が結合して生じた名詞形と思われる。

ハナオト・ハナグラなどはハナ類に接して日本の両端の辺境に分布し、イビキ類、ネビキ類などより古いものと思われる。岩手・秋田・山形・宮城・福島などの分布の様子は、日本海側を北上したイビキ類によってハナ～類が侵略された結果と思われる。このハナ～類とイビキ類・ネ(イ)ビキ類・ネイキ類との接触地帯である岩手・秋田・宮城・千葉・鹿児島に、HANAIBIKI, HANABIKI, HANAIKI などの語形が分布している。これらは本来ハナ～類であったところにイビキ類などが侵入したために生じた混交形と思われる。

ゴロ類(ゴロタ・イゴロ・ドロを含む)は、擬音語から発生したものであろうか。この類は、近畿・瀬戸内海地方に多く分布するが、能登・静岡・群馬などにも1地点ずつあり、八丈島のイゴロもあるところを見ると、この類はイビキ類より新しく近畿で発生して東西に広まりかけたが、のち、上方や江戸からふたたびイビキに侵略されたため、このような分布になったものと思われる。ただし、瀬戸内海方面では分布からみてかなり最近まで新しい生命を保っていたものようである。もっとも、

現在は、イビキ類との併用地点などでは古いことばとの注記が多く見られている。八丈島のイゴロは、イグスリ・イグスイのイと関係があるかも知れない。

以上、全体としての歴史を大きくまとめると、次のようになるかと思われる。ハナ類が古く、これが東北などでハナオト・ハナグラに変化した。一方、イビキ類が中央日本から広まり、土地によってはネビキともなり、ハナ類と接触してハナビキを生み出したりした。イグスリ・イグチもハナ類よりは新しいかも知れないがよくわからない。ネイキは非常に古いかと思われるが、分布から推定することは困難である。ネイキの地域にイビキが侵入してネビキが生じたところもあろう。ゴロ類はかなり最近の発生で、一時、近畿とその周辺に広まったが、現在では標準語のイビキがふたたび勢力を得ている。

併用の場合などの注記で目立った傾向を拾うと、次のようである。東北・関東では、ハナオト・ハナグラが大きい音、イビキ・ネビキが小さい音の場合という注が多かった。同様に、兵庫・中国・四国などでは、ゴロ類が大きい音、ネビキ類が小さい音の場合という注がかなりあった。

なお、とくに大きいいびきとか、ユーモラスな比喩的表現としては、後部分をも含めて、イカダ(オ)クダス、ゾオスイ(オ)タク、カユ(オ)タク、ヤカン(オ)コロガス、などがあったが、地図では「その他」として扱った。また、イビキ(ガ)タカイなどの表現も「その他」に含めた。

90. いびき(軒)をかく 一後部分一

90図を概観すると、緑で示したカク類は全国的に分布し、ほか、茶で示したスル類が東北北部と奄美・沖縄に、橙で示したタテル類が東北地方から関東東北部にかけて、赤のつぶし符号で示したヒク類がおもに瀬戸内海を中心とする地方に、赤のぬき符号で示したフク類がおもに伊豆諸島と沖縄に、紺で示したうちナラス・ナル類が東関東・鹿児島・沖縄などに分布している。

この分布の型は前部分の89図とかなり似ている。すなわち、「いびきをかく」という表現は、全国的に見て、ある名詞が、それぞれきまった動詞をとっているということであり、その組み合わせは以下ようになる。

イビキ(オ)	}	カク
ネビキ(オ)		
イグチ(オ)		
イグスリ(オ)		
ハナオト	}	スル
ネイキ		
ハナブキ		
ハナグラ(オ)		タテル
ゴロ(オ)		ヒク
ハナゴラ(オ)	}	フク
ハナ		
ハナ(オ)		ナラス
ハナガ		ナル

以上の組み合わせのうち、ハナガナル以外は、目的語と動詞の関係であろうと思われるが、助詞のオがまったく見られない表現については疑問も残る。

カク類は、上に示したような4種類の前部分と結びつのが普通であるが、宮城ではハナオトやハナグラとも結びついていることが注目される。

89図の説明で述べた宮城のハナビキは、ハナオト・ハナグラにイビキ類が侵入して生じたものと考えられるが、動詞部分にもカクをとり入れやすかったものであろう。カクは、さらにそれに接する地帯のハナオトやハナグラにも浸透し、ついに、宮城全域にカクが広まったものと思われる。また、カクは共通語として宮城以外の東北各県でも、スル類、タテル類の中に入りまじって浸透している。すなわち、共通語形のイビキオーカクのうち前部分の勢力が及ばないところでも、後部分だけが、侵入・伝播している傾向が見られるというわけである。カク類の第2音節のKの有声化・H音化・脱落などは音韻法則どおりの様子を示している。

スル類は、語形に与える符号の形を、55図、69図、77図、88図などと共通にしてある。そのスル類の中における諸変種の分布は、ほぼ他の図とも一致する。この類は、日本の東北と西南の端、その他の辺地に分布するので、古い表現の残存かと思われる。もっとも、スル類が古い言い方である、と言うより、「いびきをかく」を表現するためのイデオマティックな用法が未発達であるという状態が辺地に残り、動詞形を求める質問であったため、とりえずスルをつけて答えが現われた結果かも知れない。

タテル類は、昔は宮城にもあって、関東から東北北部へとつながっていたものと思われる。おそらく、東関東から東北にかけて分布していたタテルが、東北北部でイデオマティックな用法が発達していない、いわば弱い地帯に侵入し、比較的広くばらまかれ、後に、宮城にカクが広まったので、タテルは南北に分断されたものと思われる。この類には有声化地帯に分布する関係上 TADERU も多く見られている。

ヒク類の分布は、前部分(89図)におけるゴロ類と似ており、ゴロ(オ)ヒクとして発展したものであろう。すでに89図の説明で述べたゴロ類と同じ歴史をたどったと思われる。すなわち、カクより新しく近畿に発生し東西に及んだが、後に江戸や上方から標準語のヒクがふたたび勢力を盛りにかえたので、現在のような分布になった。ただし、瀬戸内海方面では比較的最近まで、新しい勢力として進展していたらしい。

前部分のゴロ類の分布とこの図のヒク類の分布で、若干の不一致も見られる。すなわち、前部分にゴロ類の分布する外側であってイビキ類の分布している山口・高知などにも、この図ではヒク類が分布し、逆に前部分がゴロ類である四国西南部は、この図でカク類が分布している。これはこれらの境界地帯では、語の侵入の際、前部分と後部分の進展の早さに若干の差があった結果かと思われる。近畿以東では、三重・静岡・八丈島以外前部分のゴロ類と後部分のヒク類との地点が一致していない。これは、上に述べた瀬戸内海地方のずれ地帯と同様に侵入・消滅の際、前部分と後部分に差があったためと考えられるが、場合によっては前部分のイビキ・ネビキなどという語形は、動詞としてはヒクに由来するという意識から独自に生じた可能性もある。

フク類(ハクも含む)は、伊豆諸島と沖縄などに分布しており古い言い方かと思われる。もっとも、この類の語はいろいろな名詞について独自に発生する可能性もある。沖縄本島中部・北部のハナブキースルは後部分としてはスルに分類したが、実質的にはフク類の要素があり、その意味では沖縄本島の全域にフクを含む表現が連続して分布することになる。

ナラス・ナル類は、前部分のハナ類とともに考えるべき性格を持つ。これについてはすでに89図の説明で触れたが、歴史的に非常に古い段階の表現であろう。

91. うそ(嘘言)をつく 一前部分一

「うそをつく」に当たる 諸方言語形は、これを 91 図と 92 図とに分けて示した。

なお、この図ではウソ(オ)ツク、ウソ(オ)ユウをとともに標準語形と認めて、それらの回答が他の回答とともにあり、とくに、〈新しい・共通語的である・上品な言い方〉などの注記があれば、地図から割愛した。

91 図の見出しはたくさんあるが、分布はかなり単純である。草の符号で示したウソ(オ)一の類が、ほとんど全国をおおっている。

そこで、この類の内部変種をかなり詳しく示すことにした。まず、目的格をとる名詞がどんな助詞を伴うか、無助詞であるかの分布が、かなりはっきりと現われる。この点については、99 図、100 図に関連図がある。次に、ウソに当たる部分のいろいろな変種、OSO, USU, USSO などの分布状況も知ることができる。

ウソの類以外のものを大観してみよう。それらは、中央日本には、ほとんど現われず、東日本と西日本(沖縄を含む)に、種々のものが見られる。

まず東日本から。

橙で示したパスが、秋田に見られる。かなりまとまった領域を持っている。

紺で示したボガ・ボンギの類が、岩手に見られる。

空で示したチクが、北関東にある。

赤で示したソラッコト・ソラッペエ・ソラッパチの類が、主として関東に散在する。宮城のズラも、このグループかも知れない。

このほか、茶の符号で示し、たがいに関係のありそうな各種の表現がある。語類と地域とを示そう。

デホオダイ・デホオラク・デンボオラク……群馬

デホ……福島・長野・岐阜

ズホ・ズフォ……秋田・山形(北海道にもある)

テホ……岩手(テはすべて[tɛ]であった)

テフ……山形

ドッポロ……八丈

デッポ……群馬

デッブ……新潟

テッポ……新潟・長野

デンボオ……群馬

テンボ……山形・新潟・佐渡・福井(北海道にもある)

テンツ……山形

なお、西日本であるにもかかわらず、徳島に、これらと類似したテンコロがあって注目される。

また、これは全国に関係あることであるが、各地に散在するホラの類にも、茶の符号が与えてある。その変種と思われるハラダ・ハッダが山形にある。

西日本では、九州の北西部にかなり広く分布する、赤で示したソラゴトの類が、まず目につく。この類は、九州西南岸の甑島・種子島にも見られる。

対馬・五島には、緑で示したヘッパクがある。

対馬にもあるが、主として九州東岸に、紺で示したヌストゴトがある。

徳島には、2 地点ではあるが、紺で示した、オゲ・オゲッタがある。

西日本にも、東日本と同様に、茶で示したホラの類がいくつか見られるが、鹿児島のは、山形のハラダと似ている。

琉球列島には、また、奄美大島・喜界島のウスを除いて、本土には見られない独特の表現が分布している。主なものは次のとおり。

赤で示したシロ・シロユムタ……奄美大島

空で示したアランムン……奄美大島南部・徳之島

紺で示したムニヒンジ……徳之島・沖永良部島

緑で示したユクシムスイイ……沖縄島および属島・八重山

茶で示したマカピムスイイ……沖縄島北部

紺で示したナアムヌ……沖縄島北部・八重山

橙で示したダラカ・ダラク……宮古

このほか、わずかの地点にしか現われなかったため、本図では、その他として具体的な語形を示さなかった、さまざまな語形があった。たとえば、岩手中部に 1 地点、新潟北部に 1 地点、計 2 地点にしか現われなかったイツワリ、沖縄最西端の与那国島のトッピャなどである。詳細は、『日本言語地図資料』に記録してある。

この図の説明は、なかなかむずかしい。ソラゴトの類は、現在東日本と西日本に分裂して分布し、古い中央語の退縮した姿かと思われるが(奄美のシロ・シロユムタも関係があるかも知れない)、ウソ類が、それより新しく発生した勢力かどうかについては、疑問がある。ウソの類が、本土の北の果てから南の果てまで、ほとんど全域に分布しているからである。ある時代に類義語ウソと

ソラゴトとが別々の意味を分担するに至り、この質問に対する答えには、ほとんど全国でウソが力を持ち、九州の西北部および関東などで、ソラゴトが力を持つようになった……、というような事情があったのかも知れない。

全国にホラの類が散在するが、これは第1集付録の『日本語地図解説—方法—』にのっている調査票全文(106ページ)でもわかるように、大げさなことを言う意味でなら採用しないことになっていたので、実は、もっと広く、多く存在すると考えられる表現である。このホラの類も、中央日本には現われにくいようである。これは何を意味するか。よくわからないが、中央日本においては、ウソとホラ(いいかげんな発言、でまかせの発言を含む)との区別がはっきりしているのに対して、東西日本において、その区別が明瞭でないことに起因するのかも知れない。質問文によって、中央日本ではウソだけが現われたが、東西日本においては、ウソとともに類義語も、折にふれて聞かれたのかも知れない、というわけである。

主として、東日本に見られるデホ・ズホなどの類が、このホラとどのように関係するものか、八丈島にドッポロがあるにしてもよくわからない。また、これらの諸語形が、何を源として分化したものかも、現在のところ、不明と言わざるを得ない。ただ、デホオダイは「出放題」、デホオラクは「出法楽」でおり、デホはその省略形とも考えられなくはない。

テホ[təho]は、デホと関係があるかとも思われるが、また、音韻的にタイホオ(大砲)に対応し、テッポオは鉄砲と同音語と考えられ、ともに、ぶっぱなすものとして、新しく発達したものではないかとも思われる。

また、秋田から山形へかけて南北に分かれて分布するズホなどは、以前はもっと広く、連続して分布していたと考えることは、許されるであろう。その間にはさまれるパスは、分布の様相が緊密であって、地域的表現として新しく発生したもののように思われる。ズホとウソの抗争の間に生じたものと、考えてよからう。

同様に、北関東のチク、九州西北部のヘツパクなども、他の表現間の抗争と関係づけて、その発生を考えるべきものかも知れない。つまり、非常に古くから使われていた表現の残存とは、思えないということである。

92. うそ(嘘言)をつく 一後部分一

この図は91図(前部分)とは異なった分布を見せており、「うそをつく」という表現は、ある名詞ならば、あるきまった動詞をとるというふうになっているわけではないことを示している。

緑で示したツク類が中国・四国以東に、茶で示したユウ・カタル・シャベル類が、ほとんど全国的に分布している。ほか、赤に中点のあるコク類が東日本に、平行四辺形で示したタレル類が岩手・近畿などに、T字形などで示したヒル類が鹿児島に、橙のマケル類が東北北部に、空のヌク類が茨城に、紺のぬき符号で示したスル類が北海道南部・青森・八丈島・沖縄に分布する。紺のものでは、ほかにフク・ダマスなどもやや目立った分布を見せている。

91図の説明で触れたとおり、ウソ(オ)ツク、ウソ(オ)ユウの両者を標準語と見なし、併用でこれらの表現に、〈共通語的・上品・新しい・まれ〉などの注記のある方の語形は地図から除いたが、それでも、九州・西中国以外は併用の非常に多い図となっている。とくに、ユウ・カタル・シャベル・スルの類とツク・コク・タレル・ヒル・マケルの類との併用が多い。併用の場合の注記には前者には、「軽いうそを言う場合」「軽い気持ちで叙述する場合」「目上に対して」「やさしく言う場合」などが多く、後者には、「悪質なるそ」「敵意をもって表現する場合」「卑しめ」「非難して」「下品なことば」「目下に対して」「腹を立てたとき」などが多く見られた。

併用が非常に多く、しかもその多くのものにこのような注記が見られるということは、九州・西中国以外の全国の多くの地点の方言では、この調査項目に対応する意味分野が、少なくとも普通の表現と、悪感情をもって卑しめて言う表現との二つに分かれているということになる。したがって、もし二つの分野のおのおのについて調査した結果を別の地図に描けば、併用の少ない図になったと思われるが、この地図はそのような性格の違い二種の表現を一つの図にまとめて示したことになる。

ユウ類は東北地方以外に広く分布しており、関東・新潟から島根・岡山・愛媛までは他の類との併用で使われている場合が多いが、九州・西中国・南四国はユウ類の単用地帯であって、ほかに卑しめたような言い方は現わ

れない。この地方は、さきに述べたような表現上の区別をしていないものと思われる。

ユウ類の中の音変種について述べる。ZYUUはYUU [ju:] の頭子音の摩擦が強くなって生じたものであろう。YUは東北北部・九州南部など長音が規則的に短音化する傾向のある地域に多く分布する。新潟のYOは、音韻的にユに対応するものである(83図参照)。IUは長野全域・岐阜東部・島根西部などに分布しているが、YUUに融合する前の段階を保っているものと思われる。長野の佐久地方は83図において名詞「灸」もKIUの地域であるから、音韻的な問題と思われるが、その他の地域のものは「言う」の語幹をIのまま保つという文法上の力が働いているかとも思われる。逆にYUUとなっている地点の方言では、語幹をYUに統一して、YUWANAI(言わない) YUTTA(言った) などとなっているところも多いのではないかと思われる。

ユウ・カタル・シャベルなどの類およびその中の語形の分布は、一般的な意味の「言う」という動詞の方言分布を反映しているものと思われる。

カタル類は東北と房総に分布しているが、宮城ではツクが悪意のある表現、カタルが普通に軽く言う場合との注記がある。しかし、栃木では「カタルは意識的にいつわりを言う気持」との注があったりして、必ずしも、カタルの分布している地点のすべてが一般的な「言う」意味にそのまま対応しているとも言えないようである。シャベルは方言的なものでないかも知れないが、東北北部にだけ分布するという地域性を指摘することができる。紺の符号で示したもののうち、石垣島のANKUUは「言う」に当たる表現らしく、久米島のANUUもその可能性がある。

ツク類は中国・四国以東に広く分布しており、ユウ・カタル類と併用されたり地点が入りまじったりしているのが普通である。しかし、関東東北部・東京付近・滋賀・出雲などにわずかではあるが、ツク類の専用地帯が見られる。分布からみて、この類は共通語として比較的最近、東京から関東・東北の太平洋側・中部へ、また、京阪から北陸・中部・中国へと侵入したらしいことがわかる。東北北部と出雲ではツの部分にCĪ [tsi] が現われること、東北と東関東ではクの子音が有声音のG [g] であること、千葉ではKが脱落したりHになったりしていることは規則的な音韻対応によるものである。

コク類はおもに東日本に分布しているが、紀伊半島・

中国・四国など近畿の外辺に分布しているところから、周圏論的に解釈できそうである。すなわち、コクは、ある時代に京阪に発生して広まったが、のち、京阪でコクはツクにとって代われ、辺地に押しやられた。しかし東日本ではそのコクが勢力を得て全域に及んだ。のち、江戸や東京に上方のツクが侵入し、江戸ないし東京から関東・東北地方の太平洋側、甲信越などに広まったため、コク類が後退したものであろう。

タレル類は、地点数も少なく、三か所に分断されており、古い表現の残存かと思われるが、岩手のものはあるいはそこで発生したのかも知れない。この類は、コク類と共通した分布を見せており、あるいは歴史的にコク類と似た性格であることを示しているかとも思われる。

ヒル類は鹿児島だけにまとまった分布をしているのでこの地方で発生した新しい言い方と思われる。これらのコク類、タレル類、ヒル類は「ともに体内から汚れたものを出す」の意から転用されたものらしい点では通ずるものがある。コク・タレルなどの類がツクと併用されている場合、これらの類の方に下品な表現であるとの注記が多く見られている。

マケル類は、秋田を中心とする地方に分布するため、この地方の音韻的事情により、ケに当たる子音はG ([g] であって [ŋ] ではない) として現われているのであって、共通語ならばMAKERUとなるはずである。津軽にBUCIMAKERUがあるところからも、このマケル類は「全部まき散らす」「ほうり出す」の意から転用されたものと思われる。分布からみて、この類は、この地方で独自に発生したものかと思われる。

ヌク類は茨城に分布するが、この地方の音韻的事情により、NUKUのほかNUGU (Gは[g] であって [ŋ] ではない) が多くなっている。この類は、まとまって分布しているので新しい発生と思われるが、もし、西日本に点在するNUKASUと関係があるとすれば、その由来は古いことになりそうである。

スル類は、ツク・コク・タレル・ヒル・ヌクなどと違って、卑しめの感情を伴うなどの注記もなく、どちらかというユウ類に近い語感を持っているようである。この類は、青森・八丈島・沖縄というたがいにかけ離れた辺境の地に分布しているので古いものと思われるが、あるいは、スル自体が古いというより、「うそをつく」を表現するためのイデオマティックな用法とか卑しめの表現などの未発達な状態が古いのであって、それが辺境に

残り、それらの地域では、動詞形で言うとするればスル類を使う以外方法がないという事情によるものなのかとも考えられる。沖縄本島では前部分が「～物言い」に当たる意味の語形なので、後部分はスルを用いるだけであるという事情なのかも知れない。

—HUKU, —HUGU などは 91 図を参照すれば、ホラ(オ)フクとなる場合の多いことがわかる。(一)DAMASU は、前部分をも含んだ表現が、ウソ(オ)ダマスとダマスだけの表現とのあることを示す。

なお、調査内容は、質問文とその注意書き(「大げさなことを言う(たとえば、ほらを吹くなど)、あるいはだます・あざむくの類はとらない」……『日本言語地図解説—方法—』の 106 ページを参照)によっており、ただ大げさに言うだけのものはとりあげていない。また、だます・あざむくのように単純な言語行為を越える—その結果をも含む—表現も、とりあげていない。それにもかかわらず(ホラオ)フク・ダマスの類がやや地域性を持って現われるのは、これらの地点ではこれらの限定についてあいまいな傾向を持っているのかも知れない。

93. クサルを“濡れる”の意味で使うか

下欄に示した質問文によって得た回答を、図示したものである。赤の符号で示した「使う」は、かなり広く全国に散在している。赤の符号の(ほとんど)見られない地方は、次のとおりである。北海道、東北地方北部の主として太平洋岸、近畿から北陸にかけて、および中国地方東南部、九州東岸、八丈島、沖縄。

この地図の示す分布は、何を意味するのか、よくわからないと言わざるを得ない。言えることは、赤は日本語の最古層ではなさそうであるが、そうかといって、現在発展中の表現でもなさそうである、という程度であろうか。

標準語では、ヌレルとクサルとは、その両語の意味が明確に区別されている。果して、東京には紺の符号のみが見られる。しかし考えれば、全国の紺の符号が、すべて標準語と同様に、あるいはそれ以上に明確に両語を区別しているとは限らない。つまり、ヌレルとクサルとが、かなり接近した意味を持っている地点も含まれている可能性がある。また、クサルを「濡れる」意味に使うとは

いっても、ひどく濡れた時に限るという注記が、主として東日本に見られたことも、注意しなければならない。

いったい、この質問で得た答えからは、紺の符号で示した「使わない」があっても、「濡れる」ことをヌレルという保証はないし、「腐る」ことをクサルという保証もない。赤い符号についても、「腐る」ことをクサルと言うとは限らないわけである。一方、「腐る」にもいろいろの場合がありうることに注意しなければならない。金属が腐る、柱が腐る、魚が腐る、飯が腐る、水が腐る……。同様に、「濡れる」についても、いろいろの場合がありうる。ガラスが濡れる、手が濡れる、道路が濡れる……。着物が濡れるひとつをとっても、さまざまな程度や、濡れる時の状態(たまたま水がかかてっ濡れたのか、たらいにつけたために濡れたのかなど)がありうる。「しめる」「しける」などの類義語との関係はどうか。

この地図に関する質問文は、これらの点について十分な知識を得るためには、完全なものではなかったようである。このことが、この地図を不明確なものとした理由だったかも知れない。すくなくとも、紺の符号を得た地点では、「濡れる」ことを何と言うか、「腐る」ことを何と言うか、さらにヌレル・クサルをどんな意味で使うか(使わないか)知る必要があろうし、赤の符号を得た地点では「腐る」ことを何と言うか、さらにヌレルをどんな意味で使うか(使わないか)、クサルを「濡れる」以外どんな意味で使うか(使わないか)知る必要があろう。これらの材料を総合することによって、この地図ははじめて本当の意味で理解されると考えられる。

なお、この地図で赤い凸レンズ型の符号で示したものは、具体的にはヌレクサル、ダラクサル、ヒトクサル、ボタクサル、ベタクサリニナル、ドクサリニナル、ドオクサリニナル、ムレクサルである。このうち、前三者についてはややはっきりした分布が認められる。すなわち、ヌレクサルは宮城北部、静岡・長野・岐阜、山陰・隠岐、九州に分布する。ダラクサルは山形、ヒトクサルは山梨・長野、鳥取東部、山口などに分布している。

このうちとくに問題になるのはヌレクサルである。この語形はヌレルとクサルが「濡れる」意味の同義語として衝突したために生じた語形かも知れないからである。もっともこれは、残念ながら推測の域を出ない。またこの地図からは、卑しめの接尾辞(言イクサルなど)との関係もよくわからないと言わざるを得ない。

94. オチルを“下車する”の意味で 使うか

「下車する」を宮城あたりでオチルということは、著名な事実である。この地図において、そういう言い方のある地点の分布は、東日本においてとくに顕著である。境界線も極めてはっきりしている。なお、凡例の第一と第二とは、カードに記載されている注記と、西日本における現象を明確にするために区別したものであるが、この地図における第一のものの中にも、発音が第二のものに準ずるものが、多く含まれているはずである。

さて、この地図を理解するためには、まず次の二点を注意しておく必要がある。第一に、リの発音の各地方言における現象である。『日本方言学』によれば、リンゴがジンゴと聞こえるような発音は「茨城・栃木・福島・宮城の四県の各地で聞かれる。……一種の retroflex の摩擦音である」「出雲・熊本地方では、リ・ルが語中語尾に来た時に、響のよい retroflex になる」また、「能登の一部と越中の一部では、語中・語尾のラ行音を反転音でいう」とある。ここで指摘されている地方のほとんどで、この地図に赤の符号が現われていることは、興味深い。

次は、S式質問の限界である。93図の説明でも触れたように、この地図の赤の符号は単に「降りる」ことをオチル（オジル・オンジル）と言うことだけを示し、オチル（オジル・オンジル）に別の意味（たとえば「落ちる」）があるか、あるいは「落ちる」ことを何と言うかなどについては、何の情報も示していない。紺の符号にいたっては、オチルが「降りる」の意味に使われないことを示すだけで、第一オチルという語形があるのかないのか、「落ちる」意味には使うのかどうか、さらにはオリルという語形があるのかないのか、あるとすればどういう意味で使うのかなどは、一切わからない。したがって、この地図を解釈することは、資料不足という点から困難と言わざるを得ない。

ただし、後者の問題については、95図「<雷が>落ちる」の地図から、多数の資料を得ることはできる。すなわち、95図によって、全国のかなりの地域で、「落ちる」をオチル（およびそれに準ずる言い方）と言っていることがわかる。さらに、94図のための調査カードからは、

次の諸点が明らかになる。

宮城で3地点ではあるが、「落ちる」をオチルと言って、「降りる」と区別しないという報告があった。

福島南部で2地点ではあるが、「落ちる」をオッコチルと言って、「降りる」と区別するという報告があった。

佐賀で2地点ではあるが、「落ちる」はウチャエル・ウチャユツと言って、「降りる」とは区別するという報告があった。

同じく佐賀で1地点ではあるが、「落ちる」はオチルと言って、「降りる」とは区別するという報告があった。

熊本で5地点ではあるが、「落ちる」をオチル・オツツと言って、「降りる」と区別するという報告があった。

以上は、赤の符号に関する注記である。紺の符号に関する注記はあまり多くなかったが、全国のかなりの地域で、「降りる」はオリルと言うと考えられる。ただし、新潟中部および九州西部などにオレル、また九州一帯にオレル・オルッという地点があるようである。

以上の情報を総合することによって、次のことは言えるのではあるまいか。

東国の赤符号について——オリルの発音がオチル（チが有声化する地方ではオジルのようになる）の発音に近づき、さらに類音牽引が働いて、「降りる」ことをオチルという現象が生じたのではあるまいか。これには、さらに、たとえば「降りる」・「落ちる」とも音便形はオッタのようになる、といった問題も、介在しているかも知れない。宮城で「降りる」と「落ちる」が同音語となっているという報告は、この状態をよく示していると思う。「降りる」はオチル、「落ちる」はオッコチルと言って、言い分けるといふ福島での現象は、一度同音語となった後、それを回避するために起こった現象と理解できるかも知れない。日本海岸と陸中海岸に同音語化の現象がなぜ起こっていないかはよくわからないが、一部には、「降りる」はオレルであって、かりにオレルの音が多少訛っても、オチルにまで近づけない事情が働いたかも知れない。新潟中部のほか、山形と岩手西南部に、各1地点ではあるが、「降りる」はオレルと言うとの注記があった。

「降りる」ことをオチルと言うようになったのは、どこに始まったことか、よくわからない。おそらく数か所での平行的な同様な変化が起こり、その結果が周囲に伝播し、一方標準語と対峙しつつ、現在の分布が形成されたのではあるまいか。

北陸——オリルの発音が変化してオジルとなったもの

と考えられる。ここでは同音衝突は起こらないと考えられるから(95図と比較せよ)、オンジルという語形がそれを回避するために生じたものとは考えられない。

兵庫・徳島——よくわからない。

九州西部——これも北陸と同じく、オリルの発音が変化してオジルになったものと考えられる。ここでも、同音衝突は起こらないようである。長崎野母崎先端のものは、有声・無声の対立を越えて、類音牽引が起こったのであろうか。

総合的に見て、赤の符号は全国の辺地に分散しているが、以上からは古い時代広く全国で使われていた表現の残存と、さしあたり考えない、ということになる。

95. <雷が>落ちる

この質問(質問番号123)では、第1集の『日本言語地図解説—方法—』の付録、調査票全文(補注を含む)でもわかるように、「雷が落ちる」という、いわば名詞+動詞の形での回答を求めた。つまりこの地図には、回答の全体が記載されているわけではなく、名詞に当たる部分が省略してある。これは、この日本言語地図作成のための調査には、別に「雷」についての質問があって(質問番号120)、この項目(123)の調査結果とほとんど一致し、その地図が、いずれ刊行されることになっているからである。なお、名詞と動詞(カミナリとオチル)とが結び合るとき、いかなる助詞が使われるか(ガかノか無助詞かなど)については、本集98図に別に示した。98図の説明には、「雷」に当たる部分の表現の概略も示してある。また、本集94図には、下車することをオチルと言うかどうかの地図がある。これも、多少とも関連があると思われる。

さて、この質問に対する回答には、カミナリがオチタというように、過去形をもってしたもののがかなり多く含まれていた。被調査者の立場から言えば、確かにこの場合、終止の言い切りの形は、出しにくかったかも知れない。しかし、作者の立場からすれば、これでは困る。地域差が出るならそれも結構であるが(たとえば過去形は東日本に限られるとか)、どうもそういう傾向は認められない。そこでこの地図では、過去形のものもすべて終止形に統一して示すことにした。オチタをオチルにもどすなどは、いちおう簡単と言えようが、どんな語形に

もどすべきか、迷うものもいくつかあった。被調査者は過去形を答えたが、終止形は～、といった調査者の注記があれば、もちろんそれによった。周囲に分布する語形との比較によって終止形を決定したものもある。以下に具体的な処置を例示しよう。→印の左側は、実際の回答、→の右側は、地図に示した見出し語形である。()内は、そのような見出しに含めることも考えられるが、調査者の注のない限り、採用しなかったものを示す。

otjita →OCIRU(OCURU, OCIT, OCUI……)

otta →OCIRU (OCiRU, OCURU, OTE-
RU……)

oteta →OTERU(OCURU, OCUI……)

odzita →OZiRU(OZURU……)

tsukokeratta →CUKOKERASU

(CUKOKERARU……)

otfoita →OCYORU(OCYOSU……)

詳細は『日本言語地図資料』によって知ることができる。なお、沖縄の UTII, HUTII などは、果して終止形かどうか、よくわからない。これらは、今は、カードに示された語形によって見出しを立てた。

この地図は見出し語は豊富であるが、分布はそれほど複雑でない。北海道から沖縄まで、全国のほとんどがオチルの類でおおわれている。そのために、チに当たる部分を CI, CĪ, CU, ZI, ZĪ, ZU のように詳しく示してみた。音の訛りの分布が現われてくる。CU や ZU が、必ずしもいわゆる二段活用の分布地域にのみ現われるものでないことを知ることができる。中には、音韻変化としての訛りの段階を越えて、個別的に OCURU になってしまったものが含まれているかも知れない。チの部分の有声化は、他の項目における有声化ほど、判然とした分布を示さない。これは、後続母音が狭いことと、関係があるかも知れない。九州にオチルが認められるが、これは、元来のオツ(上二段活用)が、下一段化したものと思われる。九州以外にも、山形・八丈島に類似のものが見出される。これも下一段化したものであろうか。

いわゆる東京弁のオッコチルの分布が、かなりはつきりと現われる。ただし、厳密に言えば、机の上からオッコチル、屋根からオッコチルの場合も、これとまったく一致する分布が現われるかどうかは、わからない、ということになる。琉球の HANTIYUN などは、オチルに接頭辞が付いたものであろうか (HANNAGIYUN—投げ捨てる。『沖縄語辞典』)。

オチル類以外では、九州のアエルの類（オチル類と複合したものもある）、東北のトケル・オトガイルの類、中国・四国・九州東部および名古屋付近のアマルの類、宮城北部・北関東を中心としてのサガル・オリルの類、熊本を中心としたツコクルの類、山口・大分などのホラケル・ホロケルの類、京都から兵庫へかけてのアダケル、熊本のカカヅル、三重のツタワル、愛媛のデヤルが目立つ。特定動詞は特定名詞とむすびつくといった名詞部分との平行関係はとくに言及するもののほか、認めにくい。

このうち、アマルとサガル・オリルの類だけが、分布領域を二か所に大きく分断された形をとっていて、注目される。アマルは、『大言海』によれば、『御湯殿上日記』（1563年の条）に見えるという。この表現は、現在近畿地方にほとんど認められないが、オチルに駆逐されたものと考えられる。もっとも、全国分布からみると、アマルよりオチルが新しいとは考えられない。国の中央で、古くはアマルが用いられたとはいっても、一時の流行語的なものではなかったろうか。四囲に伝播したとはいえ、糸魚川・浜名湖線以东および九州西岸には及ばなかったものと思われる。

サガル類の分布領域は、雷におけるライサマ・オライサマの分布領域にほとんど含まれる。このような漢語を使い、尊敬の接頭辞・接尾辞を伴うものがオチルではふさわしくないという考えが、サガル・オリルへの言い換えを生んだのではあるまいか。もしそうであるなら、同条件の地域では、別々に、平行的な言い換えが起こりうる。つまり、サガル・オリル類は現在領域を分断されているようにも見えるが、ここでは、過去のある時代領域が連続していた（現在の分布は古語の残存）とは、考えないことにしておく。

オチルの類でもそうであるが、ツコクル・アエル・トケル・アマル・サガルの類にも、敬語表現の回答があって注目される。OCIRASU, OCIRAHARU, CUKOKERASU, AETEKORASU, TOKESARU, AMARASSYARU, OSAGARIYARU などである。地域的には、東北・九州に集中すると言えよう。九州のものは98図における助詞「ノ」の分布とほぼ一致した分布を示す。また東北・九州を通じて、雷について（この集では地図に示すことを略したが）、カミナリサマ、

オライサマ、ユウダチサンなど、オ〜とか〜サマ・〜サン・〜ドンなど接頭辞・接尾辞を伴う語形の分布する地域に含まれて、関連を暗示している。

以下に、地方的な諸語形を見渡してみよう。

アエルの類のうち、チアエルなどは、元来は「落ちあゆる」であったものが、オが脱落したために生じた語形と思われる。オ〜が、敬語の接頭辞と考えられたのかも知れない。『全国方言辞典』によれば、アエル・アヤスなどの語形が九州以外にも見出されるが、「落雷」に限ると、この地図のような分布となるようである。

トケル類の由来はよくわからない。『全国方言辞典』には、和歌山県日高郡に、「落ちる」の意味でトクルということばがあるというが、今回の調査には現われなかった。オドガイルなどは、O+TKERU+YARU といった、敬語の形式を介して出現したものであろう。AI の二重母音で示したものでも、実際の語形は、odoneru, odogæru などである場合が多かった。詳しくは『日本語地図資料』に示してある。

コケル・コクルの類は、主として熊本に現われ、オチル類とは別類と考えられるが、CUKOCIRU(茨城)とCUKOKURU とが、あまりによく似ているので、凡例の順序ではオチルに準じてある。いったいに熊本は各種の語類が混在して、注目される。アエル・コクル・カカヅルなどの類義語がどのように使い分けられているか、さらに詳しい調査が望まれる。これらのうちあるものは、オチルと他のある語形が同義衝突することによって、新しく発生したものである可能性が強い。

ホラケル・ホロケルの類は、『全国方言辞典』によれば、そしてホロクを含めれば、この地図に現われた地域より、さらに広い地域に分布しているらしい。「落雷」に限定したために、この状態となったものと思われる。

アダケルは、元来は「落ちる」意味ではなかったかも知れないが、次第に「落ちる」の意味になった地域があるようである。『全国方言辞典』には、例によって、この地図に現われた地域より、さらに広い地域が指摘してある。

カカヅルの語源は、カキカヅルではあるまいか。この地図には例があまりに少ないためその他としてしまったが、発想法の共通するものが、別にいくつかあった。kuşiru, kakimujittoru, tsumede kaito, nekoga kakisaku, re:şu:na çikke:teiku などである。

96. こおる(水が凍る)

97. こおる(手拭が凍る)

96図、97図は、「水が凍る」、「手拭が凍る」という二つの隣接した意味分野についての図である。したがって、現われる語形もほとんど共通するので、色・符号とも両図に共通させた。両図を通じて、コオルに緑、コゴルに草、シミルに茶、イテルに赤、シバレルに空をそれぞれ与えた。なお過去形での回答は、現在形にかえて図示してある。はじめに両図の分布を説明してから、解釈を試みよう。

まず96図について述べよう。この図では、コオルが広い分布を示す。近畿西部から中国にかけてコゴル、本州の日本海側および東北地方にシミル、北海道にシバレルが現われるほか、全国コオルの領域である。コルは、コオルの[0:]が短くなったものとも考えられるが、「凝る」などの当てられる別な語かも知れない。

コゴルは広い領域を持つにもかかわらず、分布が必ずしも密でなく、コオルが多く混在する。これは、勢力を失ったコゴルの退縮を示しているものと考えられる。長野に2地点、山形に1地点コゴルがあるのも一種の残存であろう。

シミルは、山口から北海道まで日本海側に点々と分布し、東北地方に広い領域を持つ。97図ではシミルがこの地域よりさらに広く、しかも密に分布していて、96図の場合にも、もとはシミルがさらに多く使われていたのではないかと考えられる。

近畿西部に分布するイテルは、97図ではさらに広く現われる。あとで詳しく述べるが、97図のイテルがその意味を拡張し96図の意味をも表わすようになった結果ではあるまいか。シバレルは北海道に広く分布し、岩手・青森にも数地点ある。本土には多くはないが、『全国方言辞典』などによれば東北地方各地で、非常に寒い・冷えるなどの意味では使われていることがわかる。

東北地方のスガハルは、その分布が、この地方へ侵入したと考えられるコオルの前線とほぼ一致することは興味深い。また、KOORI-HARU など - で結んだものは助詞ガを省いたことを示す。

つぎに97図を見てみよう。96図と異なり、コオルの領域が狭く、シミルとイテルが広い分布を示している。

シミルは中国地方、近畿以東の日本海側、東北地方に密な分布領域を持ち、大分・愛媛、北海道南部にも及んでいる。

一方コオルは、96図「水が凍る」の意味でシミルの地域、とくに北陸中部、東北南部のシミル地域を侵しつつ、意味を拡張している。97図でコオル、シミルの併用が多いことがそれを示している。併用の地点でコオルの方に、〈新しい・上品・まれ〉の注記の見られたものは、標準語と考えて図に載せなかったが、とくに新潟などに多かった。このこともコオルの進展を示していると考えられる。

イテルは近畿を中心に、まとまった分布領域を持っている。関東に数地点飛地を持つ。近畿のイテルは、分布から見て新しい拡がりと考えられる。

コゴルは、96図と比較すると、分布する範囲はほぼ同じだが、密度は低い。96図のコゴルはコオルと対立しているが、97図ではシミルと対立している。シバレルは北海道にある形だが、秋田・新潟・能登にも数地点あることに注目したい。

そのほか、両図にわたって伊豆諸島や奄美・沖縄などに、無回答が多いことは、これらの地域の気候が温暖であって「凍る」現象が見られないことによるものであろう。

今、「水が凍る」「手拭が凍る」の二つの意味をどのように区別するか、またはしないかという観点からこの2枚の地図を見てみよう。一地点一地点の対照は、ここではしない。大まかな地域として考える。まず97図で緑になっている地域は、コオルーコオルで両者を区別しない。一方、96図で茶となっている地域では、シミルーシミルとしてやはり区別しない。おもに東北地方である。北陸から新潟、長野北半にかけてと、福島・宮城あたりでは、コオルーシミルと区別をしている。これは元来、シミルーシミルと両意を区別しない言い方の地方に、96図の意味で南からのコオルが侵入したために生じた結果であろう。また、宮城から秋田南部にかけてスガハルという表現がある。先にも触れたことだが、この分布はシミルを侵していったコオルの最前線に分布することが特徴である。元来、シミルという語で二つの意味を区別していなかったところへ、南から96図の意味でコオルが侵入した。そこで96図の意味の混乱(同義語衝突)が生じ、第三の表現スガハルが生まれ、コオルおよびシミルを排除したと考えたい。スガハルという表現を採用した背景には、「氷」の意味のスガという語の存在が考

えられる。同様な解釈が、兵庫南部のコオリハルにもあてはまろう。南側にコオル、西側にコゴル、東側にイテルと様々な語形が分布し、そこで意味の混乱を避けるため、別な表現をとったものと考えられる。

近畿以西に目を向けよう。紀伊半島南部、四国・九州の大部分では、両図ともコオルとして区別を持たず、中部南半、関東のコオルと同じ意味を持ち、歴史的にも同じ層のものであろう。97図の近畿地方に拡がるイテルは新しい拡がりと考えたが、その前は何であったであろうか。コオル・コゴル・シミルが考えられるが、96図の分布と97図でイテルの分布のすきまにコオル・コゴルが見られ東側にはコオルが見られることから、コオルないし、コゴルであったと考えられる。近畿西半がコゴル、東半がコオルであったのではなかろうか。イテルが拡がり、コオルないしコゴルとで二つの意味を区別するようになったが、96図でイテルのある地域では両方の意味を区別しない基層に影響されて、新しい侵入者イテルは両方の意味にまたがって用いられるようになったと考えられる。関東に数地点見られるイテルは、近畿のイテルと連続していたものがコオルによって分断されたとは考えにくい。近畿で拡がったあと、関東へ飛火して後に勢いを失い関東周辺に残存したものであろう。次に中国地方の分布を見よう。97図で、近畿西部のイテル地域には、もとコゴルが分布していたと考えた。このコゴルは元来「水が凍る」「手拭が凍る」の両方の意味をそなえていた、と思われる。そのうち、「水が凍る」の意味でコゴルが西に侵入し、シミルを追った。その結果中国地方では、コゴル―シミルと二つの意味の区別が生じた。ところがこの地方の基層はシミル―シミルと区別をしない表現であるため、一部の地域では侵入者のコゴルがさらに「手拭が凍る」にまで意味を拡げ、両方の意味を区別しなくなった。それが97図のコゴルの分布であると思われる。また一方、コゴル―シミルと区別をするようになったところへ、コオルが侵入したのではなかろうか。これはさらにコゴルを追い、コオル―シミルと区別する地域を作る。96図でコオルのある地域がこれである。

96図の意味の方がより基本語的であり、したがってコミュニケーションの場面に現われやすく、そのためにこの意味の方が常に伝播の面で97図の意味に先だっていることがわかる。

シバレルは北海道独特の表現のように言われることもあるが、96図では岩手・青森に、97図では能登・新

潟・秋田にそれぞれ数地点分布する。両図で本州の分布地域に相異が見られることは、おもしろい現象である。異なった地方で少し違った意味に用いられていたシバレルが北海道に渡り、北海道の厳しい寒さにもとづく現象を表わす格好の語として、この地域で発達したものであろう。

そのほか97図で、岡山にサエル、九州北部、瀬戸内海西部にカンヅルが、ある拡がりを示している。それぞれ個別的に発生した形ではあるまいか。96図の福島南西部のザイルと、このサエルとの語形の類似も考えられるがこれだけの分布からは何とも言えない。「氷」を意味するザイ(ザエ)(『全国方言辞典』)と関係のあることばかも知れない。

98. 助詞「が」 ―「雷が落ちる」における―

質問番号123の「雷が落ちる」という調査項目に対する報告のうち、主格を表わす助詞に相当する部分を取り出して地図に描いたものである。

全国を大観すると、橙で示した、助詞のある類が大部分をおおい、緑で示した無助詞が北海道南部・東北・北陸・近畿南半・沖縄の一部などに見られる。

調査項目は、助詞を調査する目的ではなかったため、報告された資料のうちどの部分が助詞に当たるものか、あるいは助詞はなく名詞に直接述語動詞が伴っているものかという注記がほとんどなく、その判定にはむずかしい面もあった。しかし、幸いに、質問番号120で「雷」という名詞だけの形を調べたものがあるので、その語形と、この質問番号123の「雷が落ちる」の前部分とをつき合わせるによっても、見当をつけることができた。すなわち両項目において同一語形の地点は助詞のないもの、語末に差のある地点は助詞があるか、あるいは少なくとも文法的なある形態が存在したということになる。

質問番号123のうちの名詞相当部分は、質問番号120の名詞単独の形とはほぼ一致する分布を見せたので、名詞として調査した「雷」の図を以後の集で示し、「雷が落ちる」の名詞部分の図は割愛した。しかし、この98図で述べる助詞がどいう語形の名詞に接続しているものであるかを知り、それとの関係をも一応考えておく必要があるので、ここで「雷」に当たる名詞部分の方言分布

を簡単に述べておく。(オ)ライ(サマ)が青森東部・秋田東北部・岩手・宮城・山形東部・福島・栃木・茨城・千葉北部などに、カンダチが岩手東部・秋田東南部・山形中部・房総半島・長野中部に、ドンドロが広島を中心とする中国地方、四国の瀬戸内海側、ゴロゴロが九州西部と青森に、ナルカミが西中国と宮崎・佐賀・青森に、ユウダチが中部地方と兵庫に分布している。このほかの地域には全国的にカミナリオよびその変種が分布している。なお、これらの語形に尊敬の接尾辞サマのつく地域は、秋田南部と山形の庄内地方を除く東北全体、新潟中部東部・栃木・茨城・千葉北部・群馬東部・埼玉東部・東京・神奈川・静岡西部、九州のところどころ、サンのつく地域は山梨・静岡東部・長野南部・愛知・岐阜南部・瀬戸内海沿岸の東半・熊本・福岡の有明海側・佐賀などで、それ以外の地方では敬称を用いていない。

以上の名詞につくものとしての助詞相当部分の詳細を次に述べる。

GA は全国的に分布している。G の音について [g] であるか [ŋ] であるかという音声の分布は、第1集の1図、2図とほぼ同じである。GO は対馬と薩摩半島南端に1地点ずつ見られるが、この地点は95図によれば動詞部分はオツル類であるから、本来 GA であったものが次の語の O に影響されて GO になっているものかも知れない。

A は北海道・岩手・東北の日本海側・北陸・紀伊半島・淡路島など、やや地域性のある分布を示している。これらの地域のうち、岩手以外は名詞部分がかみナリであって北海道から東北の日本海側を新潟の高田付付近までは、そのまま A のつく KAMINARIA であるが、新潟県の糸川川付近から北陸・長野・近畿にかけては、名詞末尾の母音の I とこの A が融合した KAMINAR-YAA の形であり、さらに短音となった KAMINAR-YA が富山と石川に各1地点ずつ見られる。岩手のものは ORAISAMAA であるが、地点によっては助詞の意識がなく、主格に立つ名詞を延ばして発音しているだけのものがあるかも知れない。A の分布している地方は比較的 GA の劣勢な地方ばかりであること、しかも岩手の場合は、付近に WA も現われていることから、この A は WA から変化したものである可能性が高い。

WA は岩手にだけ2地点見られるが、併用のあることを見ると、果して正確に主格を表わす格助詞に当たる

ものかどうかは疑問もある。WA、またはその変形である A は、主格のガのない地方に多く分布している。このことは、これらの地方では、とくに主格であることを強調して表現する場合、もしそれを表示する必要があるれば、とりたてて述べる WA、A を使う以外に方法がないことを示しているのかも知れない。

NO は九州西半にまとも入り八丈島にも分布している。NO から変化したかと思われる N が東海地方にある。これらの地方は名詞の「雷」に敬称のサマ・サンをつける地帯でもあるので、主語を尊敬することが、ガをさけてノを用いる原因とも一見考えられる。しかし、80図「あざになる(あざができる)」のように敬意のないものにおける分布とも一致するから、敬語の問題というより助詞そのものの方言分布と考えてよさそうである。奄美・沖縄の NU は、この地方の音韻法則により NO に対応する。NU には宮古島の NUDU も含めてあるが、DU は強調を表わし、古語の係助詞「ぞ」に当たるものと考えられる。

I は大分に3地点見られるが、これらは

地点	雷が(主格)	雷(名詞単独)
7356.55	KAMINARISAMAI	KAMINARI
7356.98	KANSAMAI	KANSAMA
7366.14	KANNARISAMAI	KANNARI

などであって、カミナリの最後の母音の I の延音ではない。この I は国語史上、文献に現われた上代語の「い」と関連があるかと思われる。

無助詞表現は、北海道西南部・東北地方に優勢で、東関東と北陸にもかなりあり、さらに奈良・和歌山・京都南端・大阪南部のままとった地域でも優勢である。ほかに、鹿児島に2地点、沖縄の小地域に分布している。近畿南半のものは例外であるが、一般に無助詞は比較的辺境の地域に分布していると言えよう。

凡例で「その他の表現」としたものは、主語に当たるものがない表現を意味する。たとえば、カミナリニウタレルとか、ラクライスル・オチルなど動詞一語とか、カミナリなど名詞だけの回答などである。

ここで、98図に現われた主格助詞の分布を80図「あざになる(あざができる)」においてデキルなど、主語をとる表現をした地点の助詞の分布と対比してみよう。ただし、80図では北海道の札幌以東・青森・秋田・山形・福島・新潟・富山・石川・福井・岐阜・近畿諸府県・岡山・山口など全国の半分ほどの地点で主語をとる表現を

欠いているので、これらの地域では対比が不可能である。資料が得られた地域で両図を比較すると、大局的には共通の分布を示しており、98図の分布は主格を示す場合の助詞の現われ方の一般的な傾向をほぼ代表しているものと思われる。両図で相違する点を以下にあげる。80図では岩手の内陸部と県南地方にクロチという名詞に、Aの後続する例が圧倒的に多かった。これは、98図のオライサマについての助詞のアは、名詞末尾の母音の[a]と音が合一して消えてしまったことを示し、ほかの母音の場合は、80図のようにアがその姿を現わすことを示すのかも知れない。ほか、鹿児島では98図のノとガの混用に対して80図ではガが多くなっており、また80図にはI、GOはまったく見られない。

なお、国語研究所が昭和26年度に地方調査員に委託して行なった、地方言語の語法に関する調査の結果（未発表）も、これとよく似た分布を示している。ただし、それにはゴは見当たらない。

主格を表わす助詞の歴史を、この分布図から考えてみよう。ただし、従属節における場合は、調査していないので、ここでは触れないことを断っておく。昔は全国的に助詞を使わない習慣であったが、のち中央でガおよびノが使われるようになり、無助詞表現は辺境に追いやられた。ガとノについてはノの方が早く衰え、現在、東海・八丈島・九州・沖縄にしか残らなくなったが、ガの方は全国的に広まっている。近畿に無助詞がややまとまって分布するのは、ガが広まってからのある一時期、無助詞が近畿でふたたび勢力をもちかえして周囲に広まり始めたことを示すのではなからうか。後に江戸・東京からの標準語が侵入し、近畿の中心部を貫いて中国のものにつながったために、現在は無助詞が分断されて北陸と南近畿に残ったものかと思われる。なお、直接に格の表現をになうものかどうかわからないが、イは古いものの残存であり、DUはノとともに使われることによって沖縄の一部に残ったものと思われる。一方、ワから変化したと思われるアは無助詞地帯では盛んに用いられている。

この主格を示す助詞の分布は、99図、100図における目的格を示す助詞の分布と通ずる様相を示すので、それらとも合わせて考えるべきかと思われる。

99. 助詞「を」 —「いびきをかく」 における—

100. 助詞「を」 —「あぐらをかく」 における—

『日本言語地図』の調査項目の中で、目的語と動詞による表現の多く得られたものとしては、次の7項目があった。

- 「うそをつく」 (質問番号021) <91図・92図>
- 「きゅうをすえる」 (シ 022) <83図・84図>
- 「においをかぐ」 (シ 042) <85図・86図>
- 「いびきをかく」 (シ 054) <89図・90図>
- 「せきをする」 (シ 055) <87図・88図>
- 「あぐらをかく」 (シ 071) <52図>
- 「片足跳びをする」 (シ 087) <54図・55図>

目的格を示す助詞「を」に相当するものについては、これらの項目を総合した一般的な図を示すことも考えられよう。しかし、この7項目は、目的格をとる場合の代表的な表現を吟味して定めたわけではなく、語彙調査項目の中でいわば偶然に得られたものであった。したがって、これらの総合によって目的格を示す「を」の性格を論ずることはかえって危険でもある。これらの大部分は、たとえば「水を飲む」ほどには格関係のはっきりしたのではなく、しかも各項目ごとに格関係が若干異なっているかと思われる。さらに、同一項目でも地域によって分布する単語の意味機能が異なる場合もあり、この面でも格関係に差を生じており、一定の基準で比較し総合することがむずかしいと言えよう。加えて、名詞部分の方言量の多いものは、助詞か名詞の末尾部分か、また助詞が直前の母音と融合した姿かどうかなどの判定もむずかしく、しかも、助詞のための調査項目でないので、その方面の注記も十分には得られていない。結局、この操作は各項目ごとに、その項目の事情を考慮しながら個別に行なうことが必要と思われる。

したがって、『日本言語地図』では、総合図は示さず、うち2項目だけを選んで、それぞれの分布図を示すことにした。

すなわち、99図に示した「いびきをかく」は、目的格としての機能が比較的はっきりしている、「目的格+動詞」の表現がほぼ全国をおおっている(たとえばニオイカグにはカザム、セキオスルにはコズクなどといった動詞一語による表現が多かった)、名詞部分の語類が比較的少ない、全地点を調査している、などの点で、他の項目と比較して、代表的と考えられる性格を持っていた。

さらに、参考のため、これとは少し事情が異なると思われるものとして「あぐらをかく」を100図に示した。以下99図を中心に説明し、100図をこれと比較し、さらに図示しなかった残りの5項目の助詞の分布をも参照し、目的格に関する方言の地理的差異の性格を考えたい。

99図の説明から始めよう。これは、すでに89図「いびきをかく一前部分」に助詞部分をも含めて示してあるので、あるいは重複とも考えられようが、助詞部分だけをはっきり示すために描いてある。

この99図を概観すると、橙で示した助詞のあり、またはそれに準ずる類が、北海道・福島中部南部・新潟中部・関東地方・中部地方の中部南部・近畿地方中部北部・中国・四国大部分・九州東部と南部に分布し、さらに岩手東部・佐渡などがやや飛地として目立つ。無助詞表現はそれ以外の地に分布するが、福島・新潟・茨城・千葉にもかなり橙の符号と混在している。また近畿地方と四国の瀬戸内海側にもまとまって分布し、さらに山陰にもやや目立っている。助詞のある類は、助詞のままの形で用いられているものをぬりつぶし符号で、名詞との融合と思われるが場合によっては名詞の末尾部分かも知れないものを中に小さい穴のあいた符号で、助詞のオに由来するものではないが目的格を示すために末尾音を延ばした可能性のあるものを輪郭だけの符号で示した。以下、凡例の各見出しに従って説明する。

Oは上記の助詞を扱う地帯のほとんど全域に分布する。この多くはイビキ類・ネビキ類につき、一部の地点でハナ類・ハナ～類・イグスリ類などに、またゴロ類のうちのGORO以外の語形についたものであるこのOは、IBIKIO—, HANAO—, HANAGURAO—, GOROTAO—などのように、直前の名詞との区切りがはっきりして、助詞のオであることに問題がないと考えられるものである。これらには大分に3地点 [ibiki¹o] が含まれているが、[j]は単なるわたり音と思われる。さらに、三重南端に1地点あった [ibikio:] をも含んでいる。なお、とくに地理的なまとまりはないが全国的に [wo]「ヲ」の表記が計30地点ほど見られた。これらはすべてが音韻的に[o]と区別される[wo]とは限らず、単なるわたりの音の[w]のはいった程度のも、または助詞であることを示すため「ヲ」と表記したものがかなり含まれていると思われるので、地図では区別せず O で示した。

Uのうち八丈島のもはIGOROU—であり、このU

はOO>OUという音変化によるものと思われる。沖縄の宮古島のもは, PANAU—と PANANAIYU—であって、後者はわたり音がはいったものと思われる。本土のOにUが対応する音韻法則から、このUは助詞のオに当たるものと思われる。

~YOO, ~YOは、静岡・大分・鹿児島・対馬などに分布する。これは、名詞部分がイビキ類など語末にIの音を持ち、その音と助詞のOが融合してIBIKYOOなどのようになったものであろう。このうち、鹿児島の南部と西部は短音のIBIKYOであるが、この地方の法則によって短音化したものであろう。伊豆半島6地点では名詞がイグスリなのでIGUSURYOO—, 種子島南端では名詞がネイキなのでNEIKYO—となっている。

~YUU, ~YUは、岡山・広島・大分・宮崎にまとまって分布する。ここは名詞部分がイビキ類であって、その末尾のIと助詞のOが融合し、IBIKYUU—などのようになったものであろう。その場合、九州ではOO(オ段長音の合音)がUUとなる規則があると言われていたので、いったんIBIKYOO—となってからIBIKYUU—に変化したかと思われる。宮崎はIBIKYU—であるが、長音が短音化する規則によってIBIKYUU—から変化したものであろう。

~OOは、名詞部分がハナオト(岩手・秋田)、ドロ(奈良)、ゴロ(瀬戸内海地方)などである。~OOの中には[~o o], [~oo], [~o:]の表記を含めてある。このうち、[~o:]は名詞末尾の母音がOであって、これに助詞のOがついたため長音となったものが多いと思われる。しかし、場合によっては、後述の~II, ~AAのように目的格を示すための延音であるが、偶然母音がOであったもの含まれている可能性もある。さらに、末尾部分が長音の名詞であるという可能性も考えられよう。

~Uは、ほとんどが鹿児島のIBIKU—である。~K(名詞イビキはIBIKとなる)に助詞がついて融合した形と認められる。広島に1地点だけある長音のGORONSUU—もこれに含めたが、これは助詞オの分布からGORONSUに助詞オがついて融合した可能性があると考えたからである。しかし、語尾が長母音のままでも名詞形なのかも知れないし、あるいは次項の~II, ~AAと同じく延音なのかも知れない。

~II, ~AAは今まで掲げたものとは異なって、助詞オという語形が直接関係していないことはほぼ確かであ

る。これは語末が長音の名詞かも知れない疑いは残るが、ほとんどは、目的格などに立つ場合、語末の母音を延ばす現象によると思われる。このような現象は発話ごとの気分により左右され、しかもその母音も半長音のものがあつたりして、方言として固定したものではないかも知れないが、関東南部・近畿北半にまとまった分布を見せることは興味深い。全国的にイビキ類が分布するので、～IIが圧倒的であるが、～AAは埼玉の HANAGURU-MAA- 千葉の HANAA- 沖縄の PANAA- 中国の一部の GOROTAA- など計 12 地点が見られる。

BA は九州西部にかなりまとまった分布を見せている。この調査項目は助詞に注目するものではないし、また BA と他の現象との併用地点も見られなかったので、この語がどのような感じで用いられているかという情報は、とくに得られていない。しかし、たとえば目的格に立つ名詞をもっと強く、あるいははっきり示す場面を調査すれば、東北地方にも BA が現われると思われるし、九州の BA の分布も若干広くなってくるかも知れない。なお～OBA は見れなかった。

DU は沖縄の宮古と与那国に 3 地点見られた。これは古典などの係助詞「ぞ」と関係のある表現と思われ、結びの動詞部分は、その地点の終止形と異なって連体形かと思われる形をとっているところもある。上記のうち 214L.61(宮古)のものは PANOODU であつて、助詞のオに DU がついたものと思われる。

「助詞に当たるものが現われない」、すなわち、無助詞は、東北・山陰・九州・沖縄など辺境の地と近畿・北陸・四国の瀬戸内海側など中央地域とに分布している。このうち、90 図(後部分)でスル類の分布する東北北部・奄美・沖縄などは、目的格表現ではなく、複合動詞の性格の強いものといえる疑いもあるし、また 98 図(助詞「が」)によれば東北北部は主格の助詞も使わないところなので、「ハナオトがスル」に当たるような主格表現かも知れない疑いもある。なお名詞の末尾が O の音であるハナオト類、ゴロ類などの中には、もし助詞のオがついても短縮され、名詞末尾の O に吸収されたものがあるかも知れない。なお、併用で HANA NARASU はオがなく、共通語と同形の IBIKIO KAKU はオにはある形の得られている地点があり、無助詞地帯へのオの侵入の様相の一端がうかがわれる。

「その他の表現」とは、ハナがナル、ハナイキがタカイのような主格表現、名詞だけの回答などである。

つぎに 100 図について述べる。52 図「あぐらをかく」では、助詞部分の語形が省略してあるので、各地点で、52 図の凡例で - 印の部分にこの図の助詞を加えれば、「あぐらをかく」の完結した表現が得られる。名詞部分の「あぐら」に当たる方言は比較的語類が多いけれども、全国的に分布するおもな語類がアグラ類、イタグラ類、ヒザ類などなので、名詞末尾の母音がほとんど A となり、その点では助詞のオを調べるには好都合である。

O の分布は 99 図とほぼ同じであるが、やや地点が少なくなっている。これに含めた [wo] [j] の音も減っている。U が宮古島のほかに鹿児島にも見られるがこれは ITAGURANNU 一であつて、名詞末尾の N の音の影響でオが～NU となったものかと思われる。

この項目は全国的に名詞末尾が A なので 99 図と異なり、～YOO, ～YO や～YUU, ～YU という見出しは立てなかった。このような音を持つものが各 2 地点ほどあつたが、それらはおのおの～OO か～UU に含めて地図に示した。～OO では AGUROO, HIZOO が多い。これはアグラ、ヒザにオがついて AO>OO の変化をしたとも思われるが、また AGUROO の場合は付近に AGURO が分布するので、これにオがついたものかとも考えられる。もっとも、その AGURO も AGURO>AGUROO>AGURO と変化してできた形なのかも知れない。～UU も若干見られるが、99 図の GORON-SUU について述べたと同じ可能性が考えられる。

延音の～AA, ～EE はこの図では非常に多くなっている。すなわち、99 図では名詞末尾が I のため～YOO, ～YO, ～YUU, ～YU となっていた岡山・広島・大分で、100 図の場合名詞末尾の A が長音となっており、さらにその勢力が山陰にも及んでいる。ただし、宮崎では、短音化地域のためか名詞のままと同じ形になってしまい、これは地図で無助詞として扱った。この延音地域は連母音 AI, OI などが融合する傾向のある地域(第 1 集 20 図, 28 図, 40 図などを参照)と、ほぼ一致している。この地域は一般に連母音を嫌うという傾向を持つのかも知れない。99 図と異なって～EE が 6 地点散在しているが、逆に～II はまったく現われていない。このことは、これらの延音地域に両項目の名詞部分にどのような語形が分布しているかによる差にすぎない。

BA は 99 図より少なくなっている。これは、この項目の目的格に立つ名詞を明示する性格が 99 図より弱いためかとも思われる。DU は、与那国については 99 図

と一致するが、宮古にはなく、かえって八重山に現われた点でやや異なっている。

沖繩に30地点ほど～IIで終わる前部分が現われているが、これは～イ(「～座り」の意)に当たる動名詞であるとして、目的格表示の延音には含めず無助詞として扱った。無助詞のうち、AGURO—、AGORO—などが中部・関東に16地点、ZYORO—が近畿を中心に30地点ほどあって、前述のようにいちおう助詞オの要素の有無が問題になろうが、この図ではすべて無助詞に含めて示した。これら無助詞と扱い、また前述の宮崎の短音化を無助詞と見なしたことを考慮しても、まだ全国的に99図よりは無助詞が多いようである。その理由の一つに、「あぐらをかく」は「いびきをかく」に比べて目的格表現としての意識が弱く、目的格表現と副詞表現との中間的な性格を持つ場合もかなりあったのではないかと考えられる。副詞的な表現と思われる、たとえば、イタグラメスワル、ロクニスワル、タイラニスワル、アズクミニナルなどが20地点、また、スワル、ネマルなど動詞一語の表現もかなり多く、これらはこの地図では「その他の表現」として示してある。

以下、とくに助詞の地図を示さなかった5項目のおのおのについて、その項目の事情を述べ、助詞の分布の様相を99図と比較しながら簡単に記しておく。

「うそをつく」は、91図に助詞部分をも示してある。この項目は名詞部分にウソ類が多く、語末音の一定している点では好都合であるが、語末音がOのため、助詞オのついたものかどうか判断のむずかしい点もあった。大きく言って、Oまたはそれに準ずるものの分布は99図に似ているが、この項目では大分にUSUUが現われており、宮崎にはUSOのままの地点が多い。また、東北ではオが99図より若干北に張り出している。なお、調査地点数は前期5か年分だけである。

「きゅうをすえる」は83図に助詞部分をも示してある。名詞末尾の音が東日本では～UU、西日本では～Oであって、いずれも助詞オの要素の有無を判定することがむずかしい。沖繩本島に多く分布するYACUUの判定はむずかしいが、『沖繩語辞典』には「jacuu灸」とあって、助詞のない形と見れば、この項目の助詞の分布は99図とほぼ同じになる。

「においをかく」は85図に助詞部分をも示してある。これは別に名詞単独の「におい」をも調査しているので、助詞オの要素を抽出しやすいが、残念ながら動詞一語の

表現が、西日本をおおって、助詞の問題を扱うには不適当と言わざるを得ない。近畿以東については99図とほぼ同じようである。

「せきをする」は、87図に助詞部分をも示してある。これも動詞一語の表現が多いうえに、主格表現もかなり見られ、また動詞にスル類が多いので、複合動詞的なものを多く含む疑いもある。目的格表現と思われる地点に関しては、ほぼ99図と同じ分布が見られ、名詞部分がほとんど～KIで終わるので、音の融合も99図に準じて考えればよい。

「片足跳び」は54図に助詞部分をまったく示していない。これは名詞だけの回答が多かったこと、～デ、～ニ、など副詞的な表現が多かったこと、動詞にスルが多く複合動詞的な要素もあること、などによって、目的格表現をとる地点がかなり少なく、しかも、目的語である名詞部分も語形変種が非常に多かった。このことは助詞オを観察するにはこの項目はあまり適当ではないことになる。分布を見ると99図に比べて中部・近畿に無助詞が非常に多くなっているが、これらが副詞的表現のため助詞オに当たるものがつかなかった、すなわち「その他の表現」として扱うべきものであるためとも考えられる。なお、九州では～KENKENなどに接続してNUが10地点ほど現われているが、これは、オが名詞末尾のNの影響を受けた形であろう。

BAはこれらの5項目において程度の差はありながらも常に九州西部に現われている。さらに「うそをつく」「せきをする」「片足跳びをする」ではBAが沖繩の八重山にも見られた。

DUはほとんどの項目で沖繩の宮古か八重山に現われているが、地点は必ずしも一致していない。

以上、各項目をまとめてみると、融合した音変種は別としても、助詞オの有無、BA・DUの現われ方はほぼ99図によって代表されると言えよう。なお、国語研究所が昭和26年度に地方調査員に委託して行なった、地方言語の語法に関する調査の結果(未発表)も、これとよく似た分布を示している。

これらの図における目的格を示す助詞の分布は、98図の主格の場合と比較してやや助詞の勢力が弱いが、大局的には似かよった様相を示し、歴史的に平行するものがあると思われる。

以下、大まかに、目的格を示す助詞の歴史を推定してみよう。分布からみて古くは全国的に助詞を用いなかっ

たが、後に中央から助詞のオが発展した。ところが、その後、近畿で助詞を使わない言い方が勢力を得て周囲に広まりかけたらしい。そして、現在また標準語的な言い方として、東京などから助詞のオを使う言い方が広まり、近畿地方でも中心部には押し寄せているということになる。歴史的に、近畿地方という中央の言語で、はじめてオを使うようになった後も、オを使う表現と無助詞表現とが併存しながら、ある時期に一方の表現の勢力が強くなり、ある時期に他方の勢力が強くなるということがあって、それが周囲の地域への伝播に反映したと考え

ることもできよう。全国のかかなり多くの方言で、オの現われる頻度についての地方差はあるが、目的格に立つ名詞を明示する度合とか雅俗の意識などによる使い分けに関係しながら併用されているようである。

なお、バ・ヅは、本来は格に関係がなかったかも知れないが、地域によっては、次第に格を示す機能をも持つようになったものもあると見てよかろう。しかし、オに比べると各項目間で現われ方の差が大きい。これは、格そのものを示すより、やはり、目的格に立つ名詞を強調する機能が依然として根強いことの反映かと思われる。

Introduction
to
The Linguistic Atlas of Japan

— Interpretation of the Maps —

Vol. 2

The National Language Research Institute

TOKYO

1967